富山県福岡町

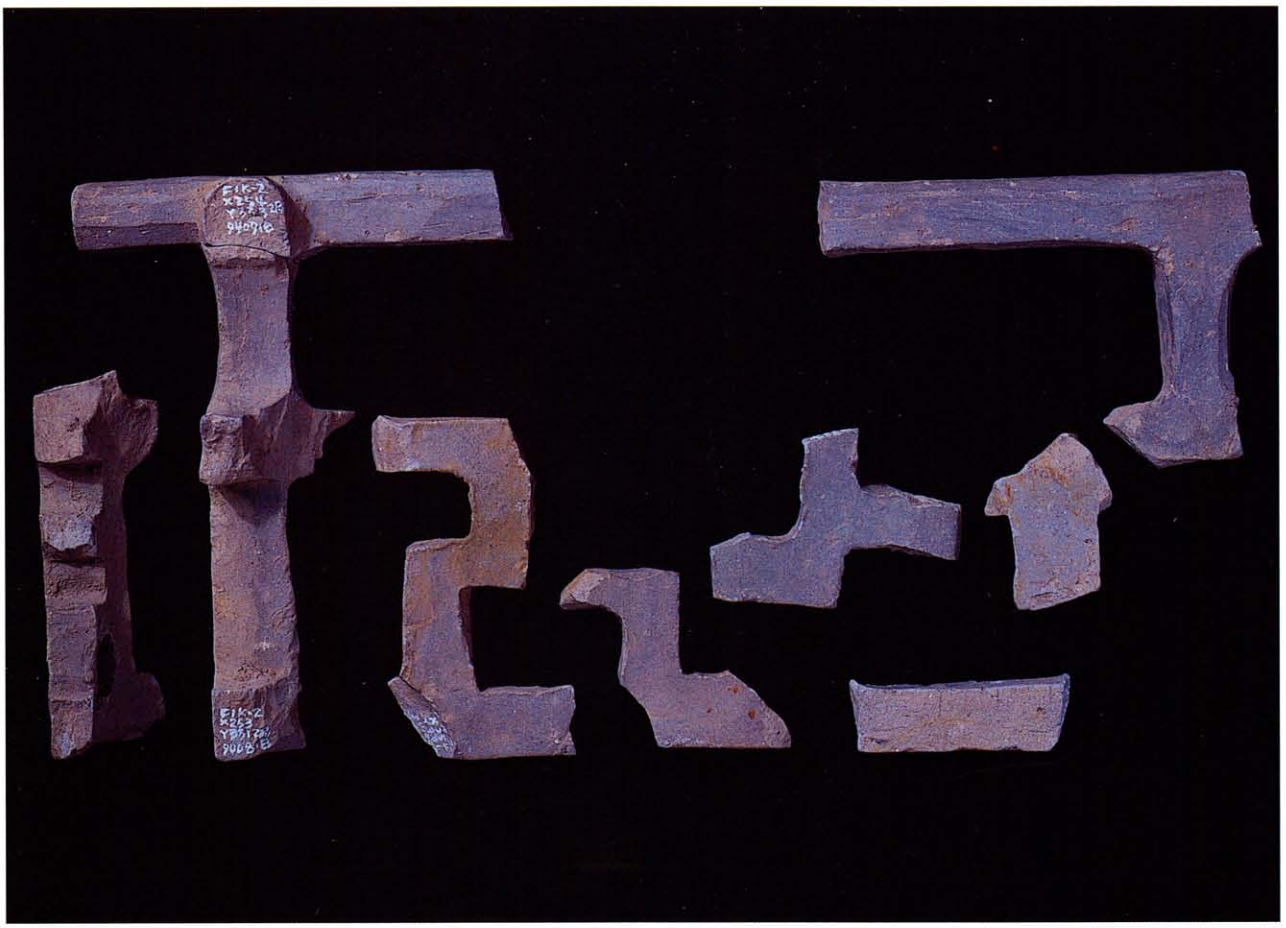
石名田木舟遺跡

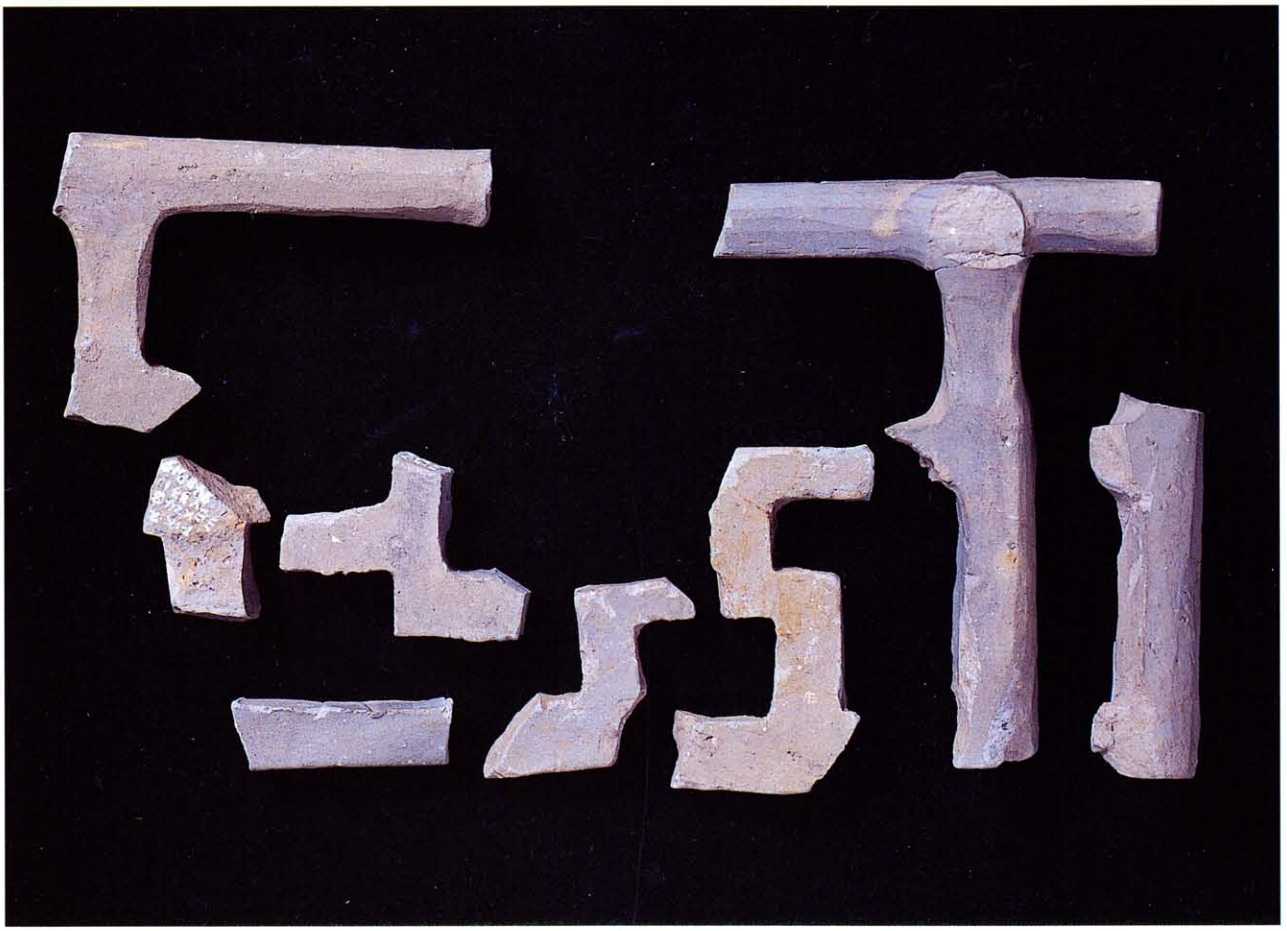
発掘調査報告書

1995年 3 月

福岡町教育委員会

原色図版１　瓦塔：阿弥陀三尊像（実大）





原色図版２　瓦塔：卍崩し高欄（飛鳥様式実大）

原色図版 3　上：瓦塔屋蓋部　下左上：奈良三彩水瓶　下左下：奈良三彩獣脚　下中：水瓶　下右：火舎（実大）

原色図版 4　上：多嘴瓶　下：水瓶（実大）

序

福岡町は、富山県の最北西部に位置します。西部の丘陵地帯は、能登半島の最高峰である宝達山に連なり、庄川と小矢部川によって形成された礪波平野の北端部分を構成します。この地域は交通の要衝でもあり、礪波平野の支配の拠点として歴史上に姿を現しております。

当町の北辺には古墳群が並び、また、奈良時代の北陸道が通り、国府に通じていました。山麓には須恵器や土師器の遺物も散見されます。県指定の文化財である城ヶ平の横穴古墳からは、「銀象嵌頭椎柄頭」のような優れた遺品も出土しました。

開発に伴って、先人の生活文化が我々の目に触れる機会が増えてまいりましたが、埋蔵文化財は一度発掘されると二度とは元に戻りません。我々の地域の歴史を知ることは、同時に郷土への関心と愛着を深めることになりますが、それだけに細心の注意と配慮をもって、その完全な姿を明らかにする必要があります。この意味で、わが郷土を舞台として築かれた文化を探り、後世に残すことは、現代に生きる我々の責任であると考えます。

石名田木舟遺跡は、能越自動車道の建設に伴う分布調査において遺跡の存在が認められたもので、その範囲は隣接する小矢部市にまたがる広範囲なものです。当町にインターチェンジが建設されるのに伴い、そのアクセスとして県道の改良工事が実施されることになり、工事に先立つ記録保存調査を実施することとなったものです。

今回の調査で発見された「瓦塔」は、飛鳥様式の「卍崩し高欄」を廻し、初層階内部に阿弥陀如来の三尊像をまつるものです。飛鳥様式の高欄は、実際の木造建造物においても数例しか存在しないものであり、調査は大きな成果を見ることができました。この報告書が、この地域の歴史を知る上でのみならず、古代建築史、古代仏教史の研究にいささかでも資することになるよう念願する次第です。また、これを契機に、文化財についての大方の人々の理解が深まり、保護意識の高揚に繋がるよう期待しています。

この調査にあたっては、富山県道路公社をはじめとする関係各位のご理解のもとに、富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣及び調査指導をいただきました。また、多くの先生方から有益なご指導とご援助を賜りました。調査報告書の刊行にあたり、心から厚く感謝申し上げます。

平成７年３月

福岡町教育委員会
教育長　皆月　弘行

例　言

1　本書は、福岡町教育委員会が、平成６年（1994年）６月から同年11月にかけて実施した石名田木舟遺跡（遺跡北側地区）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　今年度発掘調査地区の所在地は、福岡町木舟192－1ほかである。

3　調査は、福岡町木舟地内の能越道密接関連県道西中大滝線バイパス建設(道路整備改良事業)に伴う埋蔵文化財発掘調査として、県道路公社及び福岡町都市計画課の依頼により福岡町教育委員会が調査主体となり実施した。

4　発掘調査及び遺物整理作業などの実施にあたっては、福岡町教育委員会が富山県教育委員会・富山県埋蔵文化財センターに調査員の派遣などを依頼して行った。

5　発掘調査は、人力掘削などについては工事請負とし、福岡町が発注した。

6　調査事務は、福岡町教育委員会が行った。

教育長　皆月弘行　教育次長　吉国修一　社会教育課長　吉田篤史（以上総括）　社会教育主事　藤田辰昭（調査事務全般）主事　高嶋史恵（経理他）

7　調査遺跡の期間・担当者・面積等は、以下のとおりである。

試掘調査（平成５年度）

調査期間　：平成５年５月17日の１日間

調査担当者：富山県埋蔵文化財センター　企画調整課　文化財保護主事　島田修一・同伊佐智法

調査面積　：190㎡

所在地　　：福岡町木舟ほか

記録保存調査（平成６年度）

調査期間　：平成６年６月４日～11月７日までの72日間

調査担当者：富山県埋蔵文化財センター　調査課　主任　斎藤　隆・同橋本正春

調査面積　：2,056㎡

所在地　　：福岡町木舟192－１ほか

8　本書の編集は、福岡町教育委員会が行った。また、本書の執筆は、下記のとおりである。一部の遺構と遺物については、担当者以外の方々に調査研究をお願いし、別に論考を賜った。

Ⅰ・Ⅱ章　１：斎藤　隆

Ⅱ章　２・３・Ⅲ章・Ⅳ章　研究成果　１　石名田木舟遺跡出土の瓦塔と宗教遺物について：橋本正春

Ⅳ章　研究成果　２　瓦塔にまつられた仏像：大脇　潔　奈良国立文化財研究所

Ⅳ章　研究成果　３　石名田木舟遺跡出土の瓦塔について：松本　修自　東京国立文化財研究所

Ⅳ章　研究成果　４　石名田木舟遺跡出土奈良三彩分析結果：斎藤　努　　国立歴史民俗博物館

山本さぎり　東京学芸大学大学院

Ⅳ章　研究成果　５　石名田木舟遺跡地震跡：寒川　旭　通産省工業技術院地質調査所

9　図版と遺物整理作業などは、斎藤と橋本が担当し、次の諸氏の協力を得た。

坂林久美子・茂住亜由美・神田勝代・赤坂世津子・高田和代・山本雅美・永田順子

発掘調査にあたっては、福岡町シルバー人材センター・大滝地区各自治会などの協力を得た。

10　本書の作成までにあたっては、下記の諸機関・諸氏の貴重な指導・助言をいただいた。記して謝意を表します。

通産省工業技術院地質調査所　文化庁記念物課・美術工芸課　東京国立博物館、京都国立博物館、奈良国立博物館、仏教美術資料研究センター、東京国立文化財研究所、国際文化財保存修復協力室、奈良国立文化財研究所・飛鳥藤原宮跡発掘調査部・飛鳥資料館、国立歴史民俗博物館、東京学芸大学大学院、法隆寺、海龍王寺、飛鳥園、倉吉市教育委員会、倉吉市立博物館、茨城県立歴史館、結城市教育委員会、佐原市教育委員会、三木市教育委員会、小野市教育委員会、小野市好古館、弥生文化博物館、埼玉県史編纂室、埼玉県埋蔵文化財事業団、名古屋市博物館、塩尻市立平出遺跡考古博物館、群馬県教育委員会、群馬県立博物館、君津郡市文化財センター、七尾市教育委員会、新潟県教育委員会、島田市教育委員会、刈羽村教育委員会、新発田市教育委員会、福井県埋蔵文化財センター、富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所、小矢部市教育委員会、富山市教育委員会、氷見市立博物館、高岡市教育委員会、立山博物館、富山県警察本部刑事部鑑識課指紋第二係、富山大学、富山県工業技術センター

寒川　旭・大脇　潔・深澤芳樹・島田敏男・井上直夫・松本修自・工楽善通・千田剛道・岩本圭輔・井口喜晴・松浦正昭・前島巳基・礪波真昭・井上一稔・森　郁夫・久保智康・伊藤史朗・吉岡康暢・斎藤　努・高橋照彦・山本さぎり・土肥　孝・安藤孝一・松浦宥一郎・時枝　努・斎藤孝正・瓦吹　堅・原田享二・西田　猛・黒田峯正・渡辺昌宏・浜野美代子・高崎光司・真田廣幸・森下哲哉・梶山　勝・小林康男・田中耕作・小島幸雄・伊佐智法・青木豊昭・工藤俊樹・水村伸行・豊巻幸正・渋谷昌彦・土肥富士夫・善端　直・津金沢吉茂・唐沢至郎・松村正和・小綱　豊・望月精司・斎藤伸明・広瀬和雄・吉田　昇・岡本淳一郎・酒井重洋・柴口真澄・岸本雅敏・大野　究・林　浩明・河西健二・安念幹倫・島田修一・麻柄一志・高慶孝・山口辰一・荒井　隆・吉井亮一・伊藤隆三・藤田富士夫・古川知明・小林高範・山崎　栄・生駒勝浩（敬称省略・順序不同）

11　一部の写真・図他については、次の機関より掲載許可と資料提供を受けた。記して謝意を申し述べる。

東京国立博物館、奈良国立博物館、奈良国立文化財研究所飛鳥資料館、埼玉県教育委員会、塩尻市教育委員会、平出遺跡考古博物館、三木市教育委員会、小野市教育委員会、小野市好古館、小矢部市教育委員会、富山市教育委員会、高岡市教育委員会、大阪市文化財協会、法隆寺、海龍王寺、飛鳥園、法華寺、中央公論美術出版（敬称省略・順序不同）

12　参考文献の中で、原書については、韓国からの留学生(富山大学学生)趙　炸衍(CHO BANG YOUN)氏に翻訳をお願いした。

13　出土遺物中の木製品と金属製品の保存処理及び金属製品のX線撮影については、元興寺文化財研究所に委託した。

14　航空写真と図面の一部の作成については、はアジア航測株式会社が請負った。遺跡座標X240Y330の国家座標はX＋76480.040Y－22440.020であり、遺跡のX軸は真北である。

15　発掘調査事業に多大なご理解とご協力を示された地元関係各位については、記して謝意を表します。

福岡町木舟・開蕚・本領・大滝荒屋敷自治会、福岡町都市計画課、福岡町シルバー人材センター、福岡町立図書館・町文化財審議会、岡田和夫、崎田佐起、堀内靖司

16　図版類の縮尺は、図版下に示した。方位は真北を、高さは標高を用いた。表中では、言葉を省略して表現したところがある。土層の色名などは、日本土壌学会発刊「標準土色帳」に基づき、また、同書で使用されている分類・略号などにより記録し、本書で用いた。

17　瓦塔及び瓦塔出土遺跡関連文献は、基本的なものに限った。表中の遺跡名は名称のみとした。出土位置については、出来るだけ正確に表したが、密集地区では一カ所に集中するためおおよその位置とした。

18　平成５・６年度の発掘調査関係の資料及び出土遺物は、富山県埋蔵文化財センターが保管する。

目　次

序
例言
目　次
Ⅰ　序章
1　遺跡の位置と環境
2　調査に至るまでの経緯
3　調査の経過
Ⅱ　調査結果
1　古代
2　中世
3　瓦塔と仏具など
(1)　阿弥陀三尊像
(2)　屋蓋部
(3)　卍崩し高欄
(4)　奈良三彩
(5)　水瓶
(6)　香炉
(7)　多嘴瓶
(8)　合子
Ⅲ　調査の成果
1　奈良三彩などの分析結果
2　瓦塔等
(1)　阿弥陀三尊像
(2)　卍崩し高欄
(3)　屋蓋部
(4)　仏具
3　地震跡：噴砂遺構について
4　遺跡全体と今回調査区とのまとめ
Ⅳ　研究成果
1　石名田木舟遺跡出土の瓦塔と宗教遺物について
2　瓦塔にまつられた仏像
3　石名田木舟遺跡出土の瓦塔について
4　石名田木舟遺跡出土奈良三彩分析結果
X線マイクロアナライザー付走査型電子
顕微鏡分析結果
5　石名田木舟遺跡地震跡
Ⅴ　参考文献
表・図版・写真
表・目次
表1　石名田木舟遺跡遺構一覧
表2　瓦塔出土地名表
表3　相輪関係地名表
表4　奈良三彩出土地名表
表5　多嘴瓶出土地名表
表6　塼仏出土地名表
表7　方形三尊塼仏出土地名表
表8　富山県内出土緑釉地名表
表9　北陸地方陶硯出土地名表
表10　国分寺一覧
表11　富山県内出土瓦塔一覧
表12　福岡町遺跡調査一覧

図版目次

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡(1／50，000)
第2図　調査区割りと遺構平面図(1／300)
第3図　遺構実測図　1・2　SE20平面・断面図(1／100)　3　SE20出土阿弥陀三尊像(1／4)　4　主な遺構概略図(1／600)
第4図　遺構実測図　瓦塔他出土位置(1／600)
第5図　遺物実測図(2／3)　1　瓦塔屋蓋部(X252Y338)　2　瓦塔屋蓋部(X248Y333)　3　阿弥陀三尊像(SE20)　4　奈良三彩水瓶(分析資料2：X250Y331)　5　奈良三彩獣脚火舎(分析資料1：X256Y336)
第6図　遺物実測図(2／3)　卍崩し高欄　1　(X254Y333・X253Y331)　2　(XSK70)　3　(X248Y331)　4　(X257Y330)　5　(集中区No.53)　6　(X255Y334)　7　(SB1)　8　(X254Y331)　9　参考　法隆寺高欄模式図
第7図　遺物実測図(1／2)　1　水瓶(X255Y333)　2　香炉(表採)　3　水瓶(X248Y331・X250Y338・X249Y333)　4　多嘴瓶(X256Y333)　5～21　須恵器蓋　5・6　(SB1)　7　(X251Y336)　8　(X257Y338)　9　(X253Y337)　10　(集中区No.23)　11　(X253Y332)　12　(X243Y337)　13　(X252Y337)　14　(SD10)　15　(X256Y334)　16　(X256Y339)　17　(X257Y339)　18　(X255Y330)　19　(X255Y330)　20　(SK73)　21　(集中区No.6)　22～26須恵器杯身　22　(集中区No.67)　23　(集中区No.17)　24　(X249Y333)　25　(集中区No.16)　26　(X247Y335)　27・28須恵器壷　27(X248Y336)　28　(X250Y334)
第8図　遺構実測図　噴砂跡(1／20)　1　X255～257Y330～333　2　X257～259Y334～337
第9図　参考図　建物・瓦塔の部位名称　1　法隆寺五重塔(国宝)部分名称　2　法隆寺五重塔(国宝)全体図　3　静岡県三ヶ日町出土瓦塔(国宝)全体図　4　東京都東村山出土瓦塔(国宝)全体図　5　埼玉県美里町東山遺跡出土瓦堂(埼玉県指定文化財)全体図　(以上一部加筆編集)
第10図　参考図　建物と相輪　1　法隆寺五重塔(国宝)全体図(左断面図：右立面図)　2　発起寺三重塔(国宝)全体図(左断面図：右立面図)　3　薬師寺五重塔(国宝)全体図(左断面図：右立面図)　4　海龍王寺五重塔小塔(国宝)全体図(左断面図：右立面図)　5　室生寺五重塔(国宝)全体図(上立面・断面図：下相輪詳細図)(以上一部加筆編集)

第11図　参考図　建物と瓦塔の初層～５層　１～４　法隆寺五重塔(国宝)　１　二重詳細図　２　初層詳細図　３　五重平面図　４　初層見上図　５・６　海龍王寺五重塔小塔(国宝)　５　五重平面・見上図　６　初層平面・見上図　７～12　埼玉県美里町東山遺跡出土瓦塔・瓦堂(国重要文化財)　７　瓦塔全体図(左立面図：右断面図)　８　瓦塔五層(左平面図：右見上図)　９　瓦塔初層(左平面図：右見上図)　10　瓦堂全体図(左側面図：中央正面図：右断面図)　11　瓦堂二層(左平面図：右見上図)　12　瓦堂初層(左平面図：右見上図)(以上一部加筆編集)
第12図　瓦塔他の出土位置と分布　１　瓦塔　２　多嘴瓶と奈良三彩　３　相輪　４　塼仏　５　国分寺と国分尼寺　６　県内出土緑釉　７　北陸地方の瓦塔　８　北陸地方の陶硯

写真目次

原色図版１　瓦塔阿弥陀三尊像(実大)
原色図版２　瓦塔卍崩し高欄(飛鳥様式実大)
原色図版３　上：瓦塔屋蓋部　下左上：奈良三彩水瓶　下左下：奈良三彩獣脚　下中：水瓶　下右：火舎(実大)
原色図版４　上：多嘴瓶　下：水瓶（実大）
図版１　遠景　１　南より　２　西より
図版２　遺物集中区出土状況(X260～265Y330～335)
図版３　噴砂跡　１～３（X260～265Y330～335）　４(X257Y337)　１　北より　２　東より　３　断面東より　４　西より
図版４　SE20　１　東より　２　西より　３　阿弥陀三尊像取上痕跡　４　阿弥陀三尊像他出土状況南より
図版５　SE20　１・２　断割状況東より　３～５　井戸枠
図版６　遺物出土状況　１・２　SK70飛鳥様式卍崩し高欄　３　SB1P2土師器椀　４　集中区№８多嘴瓶　５　集中区№25須恵器他　６　集中区№37須恵器杯蓋　７　SD1越前甕
図版７　阿弥陀三尊像(実大)
図版８　１　奈良三彩水瓶　２　奈良三彩獣脚火舎　３　水瓶　４　香炉　５・６　屋蓋部（以上実大）
図版９　１　卍崩し高欄　２　合子(X247Y335)　３　合子(分析資料３：X251Y331)　４　合子(表採)　５　須恵器壷(X248Y333)（以上実大）
図版10　１　多口瓶　２　水瓶（以上実大）
図版11　１　円面硯(表採)　２　円面硯(X257Y332)　３　円面硯(集中区№12)　４　円面硯(X260Y334)　５　水瓶(X250Y334)　６　壷(分析資料４：X250Y334)　７　鉄鉢(X257Y332)　８　鉄鉢(X258Y333)　９　椀蓋(X246Y330)　10　製塩土器(X243Y230)　11　製塩土器(X256Y336)　12　坩堝蓋(SK56)（以上約2／3）
図版12　１　将棋駒王将(SK3)　２　将棋駒金将(SD1)　３　碁石(X247Y337)（以上実大）　４・５　木製品(SK36)　６～12(SE20)（以上約1／6～1／10）
図版13　１～７　古銭　８～11　釘（以上実大）　12～17不明金属製品（以上約1／2～1／4）　１（SK56）　２・３・８・９・17(表採)　４（X245Y341）　５（X298Y335）　６（SK8）　７（X239Y336）　10（X248Y331）　11（X264Y335）　12（X264Y338）　13（X249Y331）　14（X252Y335）　15（X261Y332）　16（X261Y332）
図版14　１　兵庫県三木市正法寺山出土阿弥陀三尊像（約１／2）　２　石名田木舟遺跡出土阿弥陀三尊像（約１／2：１と同縮尺）　３　石名田木舟遺跡出土阿弥陀三尊像（実大：Ｘ線撮影）　４・５　兵庫県三木市正法寺山出土仏（約1／2）　６　高岡市常国遺跡出土瓦塔屋蓋部（約2／3）　７　富山市明神遺跡Ⅲ地区出土瓦塔初層階屋蓋部（約1／6）　８　小矢部市松永遺跡出土塼仏（約2／3）
図版15　参考編集図版　１・２　法隆寺（国宝）　３　下中央：薬師寺二彩高欄部材　下左：難波宮跡小形丸瓦　下右：平城宮跡小形塼　４　海龍王寺五重小塔（国宝：模造）　５　東京都東村山出土瓦塔全体　６　静岡県三ヶ日町出土瓦塔（国宝）全体　７　静岡県三ヶ日町出土瓦塔（国宝）初層内箱形（内陣菩薩立像）
図版16　参考編集図版　長野県菖蒲沢窯跡出土瓦塔　１　全体　２・３　初層階　４　基壇

Ⅰ　序　章

1　遺跡の位置と環境（第１図）

遺跡は、富山県小矢部市石名田地区と福岡町木舟地区にまたがり所在し、調査地点は遺跡北側にあたる。小矢部市と福岡町は、県西部に位置し両市町の東には礪波平野が広がる。西は、石川県境をなし、能登半島に続き、宝達山を主峰とする山間地が南北に伸びる。遺跡は、町東の平野部の微高地上に所在し、標高は22M前後である。平野部は、庄川と小矢部川で作られた河合谷砂礫層で、片麻岩小礫を含むアルコース質砂岩と泥砂細粒砂岩の互層である〔福岡町1969〕。

福岡町の遺跡は、平成５年度現在87遺跡があり、先土器時代の小野ワラビ畑出土の石器群、縄文時代の上野A遺跡、古墳時代の城ヶ平横穴古墳群などがある〔県埋文センター1993〕。県内最初の考古学調査は、明治40年の吉田文俊氏の北代遺跡と蜆ヶ森貝塚の調査〔斉藤1981〕で、この翌年の明治41年には、城ケ平横穴群の調査が行なわれており著名である〔橋本1994〕（表12）。

本遺跡は、平成２年度春に実施した県と小矢部市の分布調査で、発見された遺跡で、11月に試掘調査を行い、遺跡が福岡町側にもあることと石名田遺跡とした〔小矢部市教委1991〕。平成４年６月に、福岡町を含めた試掘調査を富山県財団が行い、結果、福岡町木舟地区側でも確認され、新たに石名田木舟遺跡〔富山県財団1993〕とした。平成５年度に本遺跡の記録保存調査が行われている。

2　調査に至るまで

一般県道西中・大滝線は、能越道福岡ＩＣ接続道路関連として計画されたものである。工事前にセンターと町教委は平成４年秋に分布調査を実施し、遺跡を確認し、それを町教委・町・関係部局に示した。その後の協議により、工事前に試掘調査を行うこととした。調査は、町教委に埋蔵文化財担当専門職員がいないので、センターに調査員の派遣を依頼し、町教委が調査主体となり平成5年春に実施した。結果、工事地内には、平安時代頃と中世の遺構及び遺物が確認され、石名田木舟遺跡の北側部分であることが判明した。その後、関係部局が協議し、工事前に記録保存調査をするとした。平成６年春に再度協議し、年度早々に調査するとし、センターは事前に現地を確認した。確認の結果、調査予定地の一部が隣接する建設省関連工事で壊されていた。この遺跡地破壊の原因究明などにより調査着手が大幅に遅れ、６月に再度協議をし、町教委主体で調査することとなった。

3　調査の経過

町教委は、６月末から調査準備に入り、７月中頃から人力包含層掘削を始め、北側から調査を開始した。この頃、現場代理人などの調査に対する理解のなさから遅れだした。中央部から南地区に調査が移ると遺物量が予想以上に多くなり、期間・予算・現場代理人などの見直しを検討したが、遅れたまま調査を進めた。また、地震跡も検出され、専門家による現地指導などを受けた。９月からは、遺構掘と記録を行った。この頃に、阿弥陀三尊仏が出土したので、現状保存や遺構切取移動保存などを提示したが、出来なかった。遺構掘後に、再度下層確認し、古代の住居跡を検出し、期間を延ばした。10月末に保存しないことが決定したため、断割、最終確認をする。11月11日に終了報告を行ない、調査を終了。遺物の水洗と注記は、調査中に行い、最終遺物はセンターで行った。北側で小木製品を確認したので土壌水洗し将棋の駒他を検出した。年度末には、センターで遺物整理と報告書作成作業を実施した。しかし、出土遺物が予想以上に多いこと、器形や用途不明品が多いため資料調査が必要となったこと、遺物整理計画の見直しができなかったことなどから年度内での整理作業は、進展せず、一部の紹介に終わった。以下に記す事項は、現時点での部分報告で、完全な結果報告ではない。

Ⅱ　調査結果

調査の結果、遺構と遺物は、調査区北側で中世が多く、中央部から南側では古代が集中していた。遺構は、古代の竪穴住居跡２棟・土坑・井戸、中世の土坑・溝・地震跡などが検出された。遺物は、縄文土器・土師器・須恵器・彩釉陶器・灰釉陶器・珠洲・越前・土師質土器・陶磁器・石製品・木製品・金属器などがある。地形は、北側に向かって緩やかに傾斜しており、古代と中世の遺構検出面（地山）は、砂礫層と砂層と砂質粘性土である。SD1より北側は、１ｍ低くなり粘質土である。第1層は、表土と盛土で60～80㎝、第２層は遺物包含層で黒褐色を呈し40cmあり、第３層は地山との漸移層で明褐色粘質土で、第４層は地山層で明黄色粘質土である。

本書では、本遺跡の調査地区を便宜上、北・中央・南の三地区で表現する。

１　古代（第２～７図、図版１～11）

古代以前では縄文土器小破片が１点あり、X246Y334区で検出した。

古代の遺構は、竪穴住居跡２棟・土坑・井戸などが、中央部から南側で検出され、遺物も同様である。

竪穴住居跡（SB）　SB1は、中央部東で検出され方形を呈し、規模は一辺約5.5ｍで大型の穴を四隅に持つ。大型穴は、１～２ｍの直径で深さは40㎝前後で浅い。主軸は、北東・南西方向で深さは約30㎝である。東隅の大型穴付近では、焼土と土師器破片があった。

出土遺物は、須恵器杯蓋・杯身・甕・壷・瓦塔（高欄、図版６の７）、土師器甕・椀（図版６の３）・赤彩土器・錘・小型土器、製塩土器、炭などがあり、一部の土器は、図示した。第７図５と６は、須恵器杯蓋で内面にヘラ記号「×」があり、時期は７世紀後半で、他に８世紀前半例もあり、住居跡の時期は、８世紀前半とする。

SB2は、中央部東で検出され、SB1の南約６ｍにあり、方形を呈する。規模は、一辺が約４ｍで、主柱穴は南西隅を除く３カ所であり、１ｍ前後の直径で、深さは40㎝ある。穴内には、石がみられた。主軸は、SB1と異なり南北方向で、深さは約60㎝である。焼土は無かった。

出土遺物は、須恵器杯蓋・杯身・甕・壷、土師器甕・椀・赤彩土器などがあるが、図示しなかった。時期は、８世紀前半の遺物が多く、住居跡の時期は、８世紀前半とする。

土坑（SK）　古代の土坑は、中央部より南で多く検出され、方形を基本とする例が多い。

SK70は、中央部のSB1の南約１ｍにあり、溝SDと合流する。平面形は、長方形で、深さは15㎝と浅い。出土遺物は、須恵器杯蓋・杯身・甕・瓦塔（高欄、図版６の１・２）、土師器甕・椀・赤彩土器、製塩土器などで、時期は８世紀前半とする。

SK73は、中央部のSB2の南約２ｍにある。平面形は、三角形に近く、深さは10㎝と浅い。出土遺物は、須恵器杯蓋、土師器甕、土師質小皿などがある。第７図20は、須恵器杯蓋で、壷類の蓋と思われ、８世紀前半～中頃で、土師質小皿は９世紀で、土坑の時期は、９世紀とする。

他にも土坑があり、出土遺物などから、８世紀中頃を中心とするものが多い。

井戸（SE）　SE20（第３図、図版４・５・12）は、南地区南西端で検出され、一部は未調査区(道路)に伸びている。遺物や石が多数出土し、深くなるため土層図と遺物を取り上げてから再度調査することとした。その下の途中の砂層で瓦塔（阿弥陀三尊像第５図３）が出土し、その瓦塔は裏面が上を向き、水平で頭部を南向きとしていた。その後、半分に断割り最終確認を行ったところ、下から井戸枠、外側では堀方も確認できた。井戸の内部形状は、方形で一辺が約２ｍ、井戸枠までの深さは約1.3ｍの規模がある。瓦塔出土の平坦面（井戸廃棄後の埋められた面）までの深さは約１ｍである。堀方は、隅丸方形で一辺が約７ｍある。

出土遺物は、須恵器杯蓋・杯身・甕・瓦塔、土師器甕・赤彩土器、土師質小皿、井戸枠、珠洲、種子などがある。須

恵器と土師器の時期は、７世紀後半・８世紀前半と中頃の遺物があり、土師質小皿と井戸枠は９世紀代である。珠洲は、上層の遺物（混入品）で、11世紀代である。ここでは、井戸の廃棄時を９世紀代とする。

溝（SD）　SD10は、中央地区を南北に流れる。幅は、約50㎝、深さ約60㎝で、出土遺物は須恵器杯蓋、土師器甕・椀・内黒土器、製塩土器などがある。第７図14は、須恵器杯蓋で、８世紀中頃で、溝の時期とする。

SD101は、西側遺物集中区で検出され、東西に伸びる。出土遺物は、遺物集中区と同内容で、僅かである。幅は、60㎝位で、約10㎝の深さで、ゆるやかな「U」字状を呈する。

遺物集中区（第７図、図版２・６）集中区は、中央部から西側でみられ、X260～265Y330～335区を中心とする。包含層厚さは、約20㎝である。集中区は、地山層である砂礫層以外の粘土質層上で検出され、須恵器と土師器が多い。集中区は、SB1の西側とSB2周辺の２カ所に大別できる。第７図の大半が集中区出土で、この他に図示していない土器がかなりある。そのため、時期を限定しにくいが、おおまかに、８世紀代が中心となり、９世紀までの土器を含む。

ここからの出土遺物は、須恵器杯蓋・杯身・壷・甕、土師器甕などと共に土師器錘、鉄滓、フイゴ羽口などが多く出土した。第７図25は、杯身であるが、第７図21のような金属模倣様の杯蓋＜注１＞が一組となる。他に古代の遺物として須恵器では、第７図27・28と図版11の６（分析資料４）などの壷類、平瓶・双耳瓶・鉢・円面硯（図版11の１～４）・鉄鉢（図版11の７・８）・水瓶・灰釉陶器・椀・椀蓋（図版11の９）・奈良三彩（第５図４）・多嘴瓶（第７図４）・火舎香炉（第７図２）・獣脚（第５図５）・瓦塔（第６図５）などがある。土師器では、鍋・甑・甕・製塩土器（図版11の10・11）と内黒土器（椀・高杯）や赤彩土器(椀)がある。須恵器と土師器は、７世紀後半～９世紀前半の時期幅を持つ。また、仏具関係遺物は、別に扱い記述する。　（斎藤）

２　中世（第２・３・８図、図版１・３・６・11）

中世の土坑・溝・井戸は、北側で多く、SD1より北は中世の遺構のみで南側では点在している。

土坑（SK）　SK2は、調査区北地区でSD1の北にあり、平面形は長方形である。規模は、1.8×1.5×深さ0.5ｍである。出土遺物は、須恵器杯蓋、木製品（箸・椀・曲げ物など）などがある。須恵器杯蓋は、８世紀中頃で、木製品は中世で、土坑の時期は、中世とする。

SK19は、長方形で、中央部西側の砂礫層中を彫り込んでおり、規模は1.8×1×深さ0.6ｍである。出土遺物は、須恵器甕、石製品（墓石状切石３個・石臼)、木製品（棒状製品)などがある。棒状木製品は、四隅に立て四角く組む。この土坑の用途は判然としないが土坑廃棄後に石を片方に寄せている。内部に木製品をSK19同様に組むのは、SK18・36である。須恵器甕は、８世紀中頃で、木製品や石は中世で、土坑の時期は中世とする。

溝（SD）　SD1は、北側で検出され、南東北西に流れ、溝の南側は砂礫層で比高差約1.5ｍあり、北側は粘質土で比高差約50㎝である。幅は、３ｍ前後で、ゆるやかな「U」字状を呈する。

溝の東側から越前や木製品の小破片などが出土したため、溝内と周辺の土坑の覆土を土壌水洗した。その結果、SK3から将棋の駒「王將」とSD1から「金將」(図版12の１・２)が検出された。出土遺物は、曲げ物・下駄・漆塗製品(椀)などで、11世紀～12世紀と思われる。

これらの他に中世の遺物としては、越前（甕：図版6の7)、珠洲（すり鉢・鉢）木製品（箸・下駄・椀・漆塗椀・曲物・漆塗曲物・板・棒・柱など)、金属製品（古銭・釘・刀子・板状品・針金状品など：図版13)、石製品（碁石：図版12の３)・坩堝蓋状品（分析資料５：図版11の12)などがある。

製鉄関連遺物として、ふいご羽口・坩堝蓋状品・鉄滓などがあり、特に遺物集中区で多く検出されており、坩堝蓋は、中世の穴出土であるが、古代の須恵器を含む包含層内出土で、古代の可能性もある。ここでは、遺物の最終廃棄時期を中世とし、制作開始時期については、古代の可能性があるとする。

古銭（図版13の１～７)では、祥符通宝・洪武通宝・寛永通宝がある。

将棋駒の王将は、一部が欠けているが薄い(約１㎜)板材を使い、「王」一文字を墨書し、裏面は無文字である。同様

例は、隣接地区で同形の完形品が出土している〔富山県財団1993〕。金将は、芯持材を使っており、下端が1.2㎝と分厚く、現在使用する形に似る。「金」一文字は、字を彫った後墨書し、「將」一文字は彫らずに墨書する。裏面は、無文字である。碁石は、黒色で、約2㎝の直径である。これら中世の遺物は、10世紀～13世紀までの時期幅を持つ。

地震跡：噴砂遺構（第8図、図版3） 噴砂遺構は、中央部の遺物集中区などで5条検出された。噴砂は、古代の溝SD101と中世の土坑SK56を切っている。また、吹き上げた砂は、調査区の地山とする粘土質土の下の砂質土から上層を突き破り噴出している。亀裂方向は、西側では南北方向で、東側では東西方向例もあった。

中世以後の遺構では、溝（川若しくは農業用用水）があり、近世から現在に近い段階まで使用されていた可能性があり、中央部のSB1の北側にあり、東西に流れる。他に耕作時の畝跡らしい細長い溝がある。遺物では、陶磁器類が主となり、瀬戸系の椀・擂り鉢、染付皿・椀、伊万里の皿などの小破片がある。

3　瓦塔と仏具など

瓦塔では、初層内軸部箱形壁面の阿弥陀三尊像1点・卍崩し表現の高欄部材9点・屋蓋部内面(内側)破片2点が出土している。これらの破片は、組み合さり、一個体の瓦塔になると思われる。出土地点は、第4図に示した。遺構出土は、阿弥陀三尊像が井戸SE20、高欄部材がSB1・SK70からで、その他は遺物集中区の包含層からである。いずれも須恵質で、青灰色が多く、一部白色に近い例もあり焼成は良好で硬く、胎土は緻密で厳選された粘土を使用している。整形は、「なで」と「箆状具による磨き」など丁寧な仕上げがなされている＜注2＞。

仏具関係では、奈良三彩・香炉・火舎・水瓶などがある。

(1) 阿弥陀三尊（第5図3、図版7）

3は、初層軸部の内陣箱形壁面に表現された仏像で、井戸SE20内から一点出土した。この仏像に関しては、別稿で大脇　潔氏の考察があるので、ここでは事実記載のみとする。3は、須恵質で焼成は良好、胎土は緻密で精良な粘土を使用し、青灰色を呈する。形状は、方形に近いが、壁面に組み込まれていたものが外れたためらしく、周囲が欠けた部位と仏像制作時の面を残す部位がみられる。大きさは、12.5×8.5×厚さ2㎝である。壁面の厚さは、1.4㎝で、仏の顔の盛上厚さは5㎜で、台座の盛上厚さは6㎜である。三体の仏像を凸状に押し出すように表現する。三尊仏の大きさは、天蓋を含めると高さ10×幅6㎝で、仏像のみでは、高さが7㎝である。

仏像と天蓋の周囲は、指先でなでられ、周辺部は、側辺に沿った方向でなでられる。裏面は、表面と同様になでられ、仏像と天蓋の真後部分には粘土を押し出して仏像などを表現した際に押されたと見られる指先圧痕（5個の指紋他）が残っている。

この指紋については、富山県警察本部刑事部鑑識課指紋係の協力を得てどのようなものかを調査していただき、指紋では男女の別は特定できないものの人間であることが推測できた。さらに、圧痕の状況が複合し、方向性も不定であり、不明確な部分があることから、指の左右の別や種類については特定することはできなかった。しかし、指紋の大きさなどから成人の指であること、人差指・中指・薬指を使用して押したらしいことが推測できた。

仏像は、阿弥陀三尊像で、中尊は阿弥陀如来坐像、左脇侍は観音菩薩立像、右脇侍は勢至菩薩立像となる＜注3＞。

天蓋上部に宝珠3個を（盛上表現）配し、傘骨で結び、縄を撚ったような山形を複合させる。宝珠下に大房を垂下させ、大房間を縄状に撚ったような山形を組み合わせた玉繋の瓔珞で結び、それらの下に小房を5個下げ、さらにその間に3個さげる簡素な表現である。天蓋の大きさは、幅6㎝、高さ3.5㎝で、仏像との間は3㎜程あけている。

中尊は、右手を胸上に上げ、左手を膝上に下げ、諸仏の通印である「施無畏・与願印」の形を取り、衣をまとい坐る。台座の素弁蓮華は、上向きで、仕上げに線刻している。頭部の一部に黒色が見られ、「群青」を塗布した可能性がある＜注4＞。大きさは、台座幅2.5㎝、肩幅2㎝、高さ6.8㎝と最大である。光背は、二重の細い盛り上げで帯とする素朴な表現で、頂部が尖る宝珠光形状頭光である。

左脇侍は、頭部中央に小さい化仏を配した三面頭飾とし、足指を線刻で表現する。右手は上げ、左手を下げているが、瓔珞を押さえるか持っているのかは不明である。光背は、二重の細い盛り上げで帯とする素朴な表現である。天衣をまとい、大きさは高さ6.3㎝、台座幅１㎝、肩幅1.3㎝である。

右脇侍は、左手を上げ、右手を下げて「水瓶」を持ち、天衣をまとう。大きさは、高さ6.5㎝、台座幅と肩幅は1.5㎝で、左脇侍より少し大きい。光背は、右脇侍と同様で二重である。両脇侍は、腰をひねっている。右の目に彩色の可能性がある＜注５＞。

この仏像は、井戸SE20から他の遺物と出土し（第３・４図、図版４の３・４）、裏面が上を向き、水平で、頭部を南に向けていた。位置は、井戸のほぼ中央であった。

⑵　屋蓋部（第５図１・２、図版8）

１・２は、屋蓋部裏面破片の須恵質で、焼成は良好、胎土は緻密で、黄色味のある灰白色を呈する。

1は、中心柱付近で、裏面側（接合部で剥がれ、表面：瓦表現部分は不明)破片である。中心柱近くは、無文様で、少し離れて垂木表現がある。垂木表現は、角張る棒状具先で押し引き削り取り、角張る段差をつけ「凸」状の角柱表現である。垂木幅は、凹凸幅ともに1.2㎝で、２㎜の段差とし、現存厚さは2.4㎝ある。凸部は、３本、凹部は２本ある。中央凸部中心柱寄りに直径２㎜の小穴が柱方向にあけられ、貫通はしていない。同様の穴は、剥がれ面でもみられ、1.6㎝の間隔で、平行に柱方向にあけられ、残存長は１㎝ある。中心柱側の穴は、円形でなく、多角形の可能性がある。

２は、板葺表現がある四天柱上付近の軒先隅部分で、１同様裏面側破片である。隅角に向かう飛檐垂木は、角柱表現で幅1.5㎝、段差0.3～5㎝で、現存長4.6㎝あり、現存厚さ２㎝である。地垂木を平行に配していると思われる。剥がれ面では、１と同様な穴があり、交差するように２本ある。

⑶　卍崩し高欄（第６図１～８）

高欄については、松本氏の別稿があるので、ここでは、事実記載のみとする＜注６＞。高欄部材は、９点あり、うち2点は近接区出土で破片同士が接合した。出土状況は、第4図に示した。遺構出土は、２点で、７がSB1、２がSK70から出土である。いずれも須恵質で、焼成は良好で、胎土は緻密精良で金属模倣の水瓶に近い粘土を使い、青灰色を呈している。

１は、隣接区出土遺物同士が接合しており、架木と束（柱）との接合部で折れている。１は、高欄隅部分で、垂直に立つ柱とそれに架木・平桁・地覆の３本の横木を平行にかけ、架木だけを交差させて組んだ組二重高欄である。柱は、四角で外側の角を落とし丸く見せ、架木と平桁間は架木と柱との間の組物の斗表現を膨らみで表現するために一度細くしてから太くする。同様例としては、薬師寺二彩高欄部材に似ており、丁寧に作成されている。柱下部は、台などの上に乗せて組み上げるように、また、固定するかのように「Ｌ」字状としている。

柱の長さ（横木下から横木上までの距離：柱長は以下同じ計測数値）は、7.8㎝で、架木・平桁間は4㎝、平桁・地覆間は4.7㎝である。平桁・地覆間の太さは0.9㎝角と一定し、架木・平桁は最大1.2～最小0.8㎝角とする。架木は、平桁側の面を除き角を落して丸くし、上及び外側から見ると丸くなるようにする。一方平桁側で、外から見えない部分の角は落さない。柱より外側は、外から見えるため、角を落して円形とする。

架木は、柱より外に水平に突きだし架木同士を組み、端部は直角に切り落す。現存長は、5.8㎝あり、柱より外には1.5㎝出す。端部径と柱太さは同じで0.9㎝である。平桁は、僅かしかなく、形状は四角く0.9×0.5㎝角で、外側から見ると角材を指し渡すようにする。地覆は、平桁同様であるが、１×0.6㎝角で少し大きくなる。

２は、柱と架木・平桁破片で、柱があるが、1の柱と異なる形状であるため、四隅部分でなく中間部分である。寸法及び形状は、１に近く大差ない。架木の現存長は、5.7㎝あるが、柱を右に置いた時の左端部が少し太くなるため、その位置に次の柱が来る可能性がある。その時の柱と柱間の内側距離は、推定で4.4㎝となる。

5は、柱と平桁・地覆破片で、隅部分破片である。平桁と地覆間には、1と異なり2本の少し小さな横木が渡されている。この状況は、他の破片の形状などと考え合わせ、平桁と地覆間に卍崩し組み物が表現されたものである。柱と平桁と地覆の寸法及び形状は、1に近く大差ない。柱の現存長は、5.9cmで、平桁・地覆間は1と同寸法である。5の卍崩し組み物の横及び縦の数値は、5×7mm角で、外側の見える部位が小さく、内側への長さが長くなる。卍崩しの無い平桁・地覆間側の形状は1と同じである。卍崩しのある平桁・地覆間側の地覆隅の穴表現は、卍崩しの最後の部位で見られる表現である（第9図の参考図の右側柱隅の表現）。5の外側は、丸くし、平桁・地覆間・卍崩し組み物は角材表現であり、1に似る。他は、平桁と地覆間の卍崩し組み物である。

3は、平桁と地覆間を柱状につなぎ、4は、途中の横渡しで、6・7は、曲げて「L」もしくは「卍」状とする。8は、平桁と地覆間に「卍」をいれる。いずれも角材表現で、8mm角か、6×8mm板材状とする。3の柱状幅は、1cmあり、厚さは剥がれており不明である。

(4) 奈良三彩（第5図4・5、図版8）

4・5は、小破片で全体の色が判明しないが、これまで言われている奈良三彩として扱う。

4は、水瓶など瓶の口縁部小破片で、胎土・焼成などは良好で、内外面に釉が塗布されている。内面の釉は極一部で、きれいな緑色で、外面は内面同様の緑が全体に残っている。現時点では、緑一色であるが、褐色部分があり、二彩の可能性もある。

5は、破片のため器形は不明であるが、獣脚の形状などから奈良三彩の火舎と推定され、獣脚一脚である。脚の形は、太い膝から細くくびれてすぼまり爪先となり、現存脚高は4.6cmである。脚は、胎土・焼成などは良好で、外側に向く面に油が塗布されている。色は、きれいな緑と白色が確認され、緑が大半で、二色は確実である。僅かに茶色があり、三彩の可能性もある<注7>。

4・5の2点は、国内産奈良三彩とする。また、この2点は、他の資料と共に斎藤努氏に釉の分析をお願いしてあり、その結果は別稿で扱う。

(5) 水瓶（第7図1・3、図版8・10・11）

水瓶は、全て須恵質で、外面に丁寧な磨きを施す例が多い。

1は、口縁部破片で、端部はなでられ終わるようであるが、外面の丁寧な磨きから比較すると雑なため、剥離部の可能性もある。外面は、丁寧な磨きがなされ「光沢」があり、内面には擦痕が残る。胎土は、緻密・精良で厳選された粘土が使用され、焼成は良好で灰白色である。残存高は、5.5cmである。1は、全体の器形が不明であるものの、形状などから、金属器模倣の水瓶である。

3は、口縁部を欠く破片で、底部から胴部と肩部下と肩部上の3部位破片があり、破片の特徴から瓶とし、同一個体として復元した。この瓶は、須恵質で、焼成は良好、胎土は緻密・精良で厳選された粘土が使用され、灰白色である。口縁部を欠くため全体器形は不明であるが、肩部の3段構成継ぎの稜を持ち、細い沈線を巡らす。その肩から、緩やかで丸みのある胴部を経てすぼまり、底部となり、外側に開く脚部がつく。底部は、穴があけられ、一部に煤状の黒い部分があり、現存高は14.5cm、胴部最大径は12.5cmである。外面は、丁寧ななでが施され「光沢」があり、内面は横なでである。3は、1同様の金属器模倣水瓶である<注8>。

他に図版11の5の水瓶口縁部破片などがある。これらは、8世紀第1段階から中頃である。

(6) 香炉（第7図2、図版8）

2は、須恵器の香炉破片で、蓋である。頂部のつまみを欠き、天井部は水平で、体部との境は丸みを持って折れ曲がり直立する体部となる。体部端では、外方に開き出し、端部欠損のため形状と直径は不明である。天井部には、上下に

貫通する大穴が現破片に２個あり、穴径は2.2㎝で、正円とならず隅丸方形に近い。穴は、４個と推測され、焼成以前の穿孔で、穴を挟むように２条の平行細沈線がつまみ側と体部との境側に巡る。体部の中央部には、外面から内部に向かい貫通する小穴が１個水平にあけられる。小穴の位置は、天井部の穴の中間位置にあり、穴径は７㎜で棒状具により、焼成前にあける。穴上位で天井部と同様の細沈線が1条巡り、穴の左で交差しており描始め位置である。内外面及び大穴内は、丁寧な横なでとなでが施こされ、内外面は青灰色で、内面の一部に煤に近い黒色部分がある。この蓋は、火舎の蓋で、三彩写しである。

図版11の９は、同様の特徴を持ち、一回り小振りと推定される口縁端部破片である。９の口縁端部の形状は、天井部からほぼ垂直に下がった後、水平に外に広がり明確な角を持って垂直に降り、杯蓋の端部と同じように先細りの口縁端部となる。この蓋は、金属模倣椀の蓋の可能性がある＜注９＞。

⑺　多嘴瓶（第７図４、図版10）

４は、須恵器で、口が２個以上ある壷破片で、器形などから多嘴瓶とする。形状は、中央部に大口縁があり、少し肩の張る壷となり、その肩部と口縁下端くびれ部との間に斜め上方に向かう小口縁がつく。大・小口縁は、いずれも端部を欠き、大口縁のくびれ部直径は7㎝で、小口縁のくびれ部直径は4.5㎝である。外面と小口縁の内外面に緑色の自然釉が付着し、外面はなでられ、内面は横なでとなでである。口は、5個で、8C中頃から後半である。＜注10＞

⑻　合子（図版９・11）

合子３点は、肩部から胴部にかけての須恵器小破片で、胎土・焼成は良好で、自然灰釉がかかり灰色を呈する。図版９の３・４は、奈良三彩との比較のために分析を行った。図版11の６の壷破片は、黒灰色を呈するもので比較のために分析を行った。２～４の合子は、８世紀第２四半期である。

その他としては、壷と推測される口縁部破片があり、きれいな黄緑色で、奈良三彩に近い色を呈する自然灰釉破片である。この他に図版11の鉄鉢・円面硯破片などがある＜注11＞。　（橋本）

＜注１＞　須恵器全体については、文化庁美術工芸課斎藤孝正氏に実見して頂き教示を受けた。須恵器の一部については国立歴史民俗博物館吉岡康暢氏からも教示を受けている。坏蓋は、斎藤氏の教示による。大型の杯身に返りのある杯蓋が付く。
＜注２＞　吉岡氏の教示による。瓦塔と仏具などの胎土・焼成などが酷似しており、厳選された粘土を使用しており仏具として意識して製作された可能性がある。また、近くの同一の窯で焼かれた可能性がある。特に瓦塔高欄部材と水瓶類は似ている。
＜注３＞　三尊像については、京都国立博物館森郁夫他、奈良国立博物館井口喜晴氏他、奈良国立文化財研究所大脇潔氏他に実見して頂き教示を受けた。三尊像については、「阿弥陀三尊像」と「菩薩三尊像」の二説がある。「阿弥陀三尊像」説は、大脇氏などの見方である。一方、「菩薩三尊像」説は、井口氏・京都国立博物館伊東史郎氏（同博の久保智康氏を介しての教示）などの見方である。「菩薩三尊像」の場合、中尊は「弥勒菩薩」となり、「西大寺資材帳」では「弥勒堂」内仏で「中尊弥勒菩薩に菩薩二仏が脇侍」となる例があり、可能性もある。
＜注４＞　井口氏の教示による。仏像の頭部に彩色する場合があり、仏教では、赤や青など多色が用いられている。この仏像では、黒色に近いため群青と推定する。また、建造物の彩色例ではあるが、飛鳥～平安時代などの木造建築では、建物の内外に彩色をしている。
＜注５＞　大脇氏の教示による。注４と同様で、目の部分に少し黒色部分があり、その可能性がある。
＜注６＞　高欄については、東京国立文化財研究所松本修自氏、奈良国立文化財研究所島田敏男氏に実見して頂だき教示を受けた。また、高欄などの写真撮影については、奈良国立文化財研究所井上直夫氏に撮影して頂き撮影方法を指導して頂いた。高欄部材であり、下段に卍崩しの組子を表す破片である。考古遺物では国内初の飛鳥様式卍崩し高欄である。
＜注７＞　斎藤氏、吉岡氏などの教示による。色などは、奈良三彩の範疇に入り、しかも分析結果もこれまでの国内産三彩と似た結果が出ている。完全な三彩かどうかは小破片であるため何ともいえないが、他の色も僅かに見られるためその可能性がある。
＜注８＞　斎藤氏、吉岡氏などの教示による。時期については、大方の遺物が８世紀代であるが、一部の遺物が７世紀末の可能性がある。
＜注９＞　器形などは斎藤氏の教示による。
＜注10＞　斎藤氏、吉岡氏の教示による。東海地方の遺物とは、制作方法が異なり、薬師寺西僧房跡出土灰釉陶器例に器形が似る。
＜注11＞　円面硯は斎藤氏の教示による。県内例については、吉岡氏の集成より表を作成。

Ⅲ　調査の成果

本遺跡の調査を行った結果、以下のことが判明した。しかし、今回調査区の全部の遺構及び遺物を検討していないことや隣接地区で、同一遺跡内での別地点調査がいくつか行われており、その結果報告は今後発表される予定であることなどがある。そこで、今回の一部地区の結果により、石名田木舟遺跡全体の性格を把握し、説明することは難しいため、今回調査区の部分予察とする。

1　奈良三彩などの分析結果

遺跡から、奈良三彩２点が出土したため、斎藤　努氏に分析をお願いし、その分析結果は別稿で扱う。その分析結果は、以下のようにまとめられる。

分析資料1は、第５図５（X256Y336：火舎獣脚）のことで、結果から、鉛釉で、緑については問題なく、銅は普通で、白部分では、一酸化鉛の不均一性（少なさ）があるものの奈良三彩の範疇に入り、白部分は銅が無く最初から、白としている。

分析資料2は、第５図４（X250Y331：水瓶）のことで、結果から、緑部分は問題なく、二酸化珪素と一酸化鉛より鉛釉で、茶色部分は、一酸化鉛が無く、緑釉単彩で1に似る。

分析資料３は、図版９の３（X251Y331：合子）のことで、分析資料４は図版11の６（X250Y334：壷）のことである。両者は、銅と一酸化鉛が無く、鉄が１・２より多く、自然灰釉である。

分析資料５は、図版11の12（SK56）のことで穴出土である。穴の時期は、中世で坩堝の蓋と見られる遺物である。分析結果からは、付着物がなにであるかについては明確な結論を得ることが出来ず、現時点では不明である。

以上の結果から１・２は、国内産奈良三彩であることと近畿出土遺物に近いことが判明した。

2　瓦塔等

遺跡からは、瓦塔等の破片が出土したため、阿弥陀三尊像は大脇　潔氏に、卍崩し高欄と屋蓋部は松本修自氏に調査をお願いし、その詳細な結果は別稿で扱う。また、仏具については前述の分析の他に斎藤孝正氏に実見して頂き教示を得ている。これらの結果は、以下のようにまとめられる。

(1)　阿弥陀三尊像

阿弥陀三尊像は、初層軸部の内陣箱形壁面に表現された仏像で、井戸SE20内から出土し、形状は方形に近く、三体の仏像を凸状に押し出すように表現する。三尊像の大きさは、天蓋を含めると高さ10×幅６㎝で、仏と天蓋の周囲などは指先でなでられている。

仏像は、「阿弥陀三尊」で、中尊は「阿弥陀如来坐像」、左脇侍は「観音菩薩立像」、右脇侍は「勢至菩薩立像」である。天蓋は、簡素な表現で、中尊は施無畏・与願印を結び、衣をまとい台座に座る。左脇侍は、三面頭飾表現で、右脇侍は水瓶を持ち、両脇侍は、腰をひねっている。

仏像は、兵庫県三木市「正法寺山」出土の仏像の一つと同笵と判明した（同じ技法を用い、同原型から起こした型使用）。

瓦塔初層階内部に仏像を表現する例は、静岡県引佐郡三ヶ日町宇志山中瓦塔例などがある。

本遺跡出土の阿弥陀の天蓋などは、古い特徴を模倣しており、８世紀初まで遡る可能性がある。

(2)　卍崩し高欄

高欄部材は、９点あり、遺構出土は２点で、SB1とSK70からの出土である。

高欄部材は、束柱・架木・平桁・地覆架木を交差させて組んだ組二重高欄である。束柱は、四角であるが外側の見える方の側を角を落とし丸く見せ、架木を支える部分には斗表現を膨らみで表現する。束柱の長さ、7.8㎝で、架木・平桁間は4㎝、平桁・地覆間は4.7㎝である。平桁・地覆間の太さは0.9㎝角とし、架木・平桁は最大1.2～最小0.8㎝角とする。外から見える部位は、全て角を落して円形とする。架木は、柱より外に水平に突きだし架木同士を組み、端部は直角に切り落し柱より外に1.5㎝出す。角材を指し渡すようにし、平桁と地覆間に「卍崩し」の組子を表現する。

飛鳥様式の卍崩し高欄を持つ例は、瓦塔としては国内初例で、高欄を持つ瓦塔は3例ある。

年代は、意匠が直ちに時代を表すとすれば、飛鳥時代の可能性を持ち、7世紀後半白鳳時代当たりとみれる。しかし、様式がかなり後世まで残るとすると奈良時代初もしくは8世紀初の可能性もあり、時期の特定が現段階では、難しいと言える。

(3) 屋蓋部

屋蓋部（下面）破片2点があり、1点は中心柱付近破片である。下面の垂木は、棒状具先で表現し中心柱側の穴は多角形の可能性がある。2点目は、板葺表現がある四天柱上付近の軒先隅部分破片である。隅角に向かう飛檐垂木は、角柱表現で、地垂木を平行に配するらしい。小破片のため断定は出来ないものの阿弥陀三尊像と一個体になる瓦塔といえ、時期も同様とする。

(4) 仏具

奈良三彩2点は、分析結果から国内産奈良三彩と判明し、8世紀前半から中頃である。水瓶は、7世紀末から8世紀の第1段階の可能性がある。多嘴瓶は、8世紀中頃から後半で、合子は8世紀第2四半期である。他に火舎香炉・香炉・壷・鉄鉢・円面硯破片がある。

年代は、時期幅を持ち、7世紀後半から8世紀中頃までに制作されたらしい。

3　地震跡：噴砂遺構について

噴砂遺構は、第8図に示したように調査区中央部の遺物集中区などで5条（図示は2条）検出されている。噴砂は、古代の溝SD101と中世の土坑SK56を切っており、一番新しい遺構より新と思われる。また、吹き上げた砂は、調査区の地山とする粘土質土の下の砂質土から上層を突き破り噴出している。亀裂方向は、西側では、南北方向であるが、東側では、南北方向に対し90°近くずれる例もあった。

噴砂は、地盤の弱い所で現れる例が多いとの見方があり、特に遺跡内では深い土坑や幅広く深い溝などの遺構で検出されることが多い。これは、過去に人々が掘り返しているため、他地点と比べて弱くなっており、さらに下位の層に砂層などが存在するため噴砂現象が起こりやすいと考えられる。また、噴砂現象が現れるときには、その直下で震度Ⅴ：強震以上の地震が起きたと想定できるらしい〔寒川1991及び寒川氏より〕。

県内の大地震としては、以下の震動が知られている。石川県境の御母衣断層による天正13年1586年の天正大地震（M7.8：木舟城埋没、飛騨白川の帰雲城壊滅）。寛永4年1751年の越中・越後大地震（M7.0～7.4）。岐阜県境の跡津川断層による安政5年2月25日1858年飛越大地震（M7.0～7.1）。この他に、震源地などが不明であるものの大地震として知られているのは、貞観5年863年と寛文8年1668年の2地震がある。遺跡地内での噴砂現象は、天正13年1586年の天正大地震および安政5年（1858年）の飛越地震の可能性があるとしておく。

これらは、過去の地震の事実と調査結果のまとめである。

現在の出来事であるが、本報告書をまとめている時に、阪神大震災（平成7年1月17日、M7.2)があり、大規模な災害となった。現在では、これまでの考古学調査で全国的に数多くの噴砂跡などを検出しており、過去の地震の存在とそこから予想される事柄を折に触れて説明してきている。

今回の調査結果から、当地域で噴砂跡が検出されたため、すぐに県内で大地震が発生するという予測をしたわけではない。しかし、仮に万が一、県下で直下型大地震が起きたときには、当地域一帯では今回の調査を含めて幾つもの噴砂跡などを考古学調査で検出し、過去の大地震が存在したことを証明しているので、福岡町木舟地区一帯や地下の地盤層が砂質土で形成されている地区では、将来大規模地震が発生した場合、液状化現象が起こりうる事が十分に予測できる。

そこで、今後の都市設計をするにあたって、また、今後の生活をする上で、今回の調査結果で判明した「過去に当地域で大地震があった事」の事実をここに記録し、災害防止策とまでにならなくても、なにかの役にたてばと思い、専門家でないが改めて記述しておく。

4　遺跡全体と今回調査区とのまとめ

時期　これまで、弥生時代・古代・奈良時代・中世・鎌倉時代・室町時代・近世とされていた。今回の調査結果では、縄文時代が確認された。

種類　これまで、散布地及び集落とされている。今回の調査では、明確な寺院遺構や瓦などは検出されなかったが、瓦塔及び仏具の存在から村落内寺院などが考えられるため、寺院跡の可能性があるとする。

遺構　これまで、古代：竪穴住居跡　古代～近世：掘立柱建物　溝・畝状遺構・土坑・柱穴・井戸・柵列とされていた。今回の調査結果では、古代の溝と井戸が加わる。

遺物　これまで、須恵器・土師器・製塩土器・円面硯・土錘・中世土師器・瓦質土器・珠洲・越前・八尾・輸入陶磁器・白磁・青磁・明染付・交趾三彩青釉・瀬戸美濃・越中瀬戸・唐津・伊万里・肥前・坩堝・漆器椀・箸・櫛・曲物・石臼・石錘・硯・石鉢・砥石・行火・小柄・煙管・刀子・鉄盤・銅銭・古銭・鰐口・骨とされていた。今回の調査結果では、縄文時代縄文土器・古代の瓦塔と仏具・中世の将棋の駒などが追加される。

範囲　今回調査区が遺跡北側とされているが、調査区の東西に遺構が伸びており、広がることは確実である。また、北西方向では、隣接水田などで遺物が採集出来ることから北西側にも伸びる。

まとめ　本遺跡では、調査区が限定されているものの、人々の活動は縄文時代から開始され、定住的に生活し遺構を構築するのは古代以降で、古代と中世の二時期に最も多くの人が生活したと言える。中でも、古代に於いては、瓦塔などが小規模寺院などをさすものならば、近隣の人々も信仰のために訪れた県西部の拠点的・中心的な村落の一であるとも考えられる。また、それを経済的に支えた有力な人の存在が予測できる。

最後に、調査並びに遺物及び資料整理と報告書作成などにご協力くださいました方々に謝意を表します。

調査年		遺跡名	調査主体他
1908年	明治41年	城ヶ平横穴古墳群	井上江花　窪美昌保
1981年	昭和56年	木舟城跡	福岡町教育委員会　遺構の有無確認
1982年	昭和57年	下向田古墳群	福岡町教育委員会　試掘調査
1983年	昭和58年	下向田古墳群	福岡町教育委員会　録保存調査
1984年	昭和59年	下向田古墳群	福岡町教育委員会　試掘調査
1987年	昭和62年	木舟城跡	福岡町教育委員会　試掘調査
1988年	昭和63年	上野　A遺跡	福岡町教育委員会　本調査
1992年	平成4年	能越自動車道A－03遺跡	県センター　試掘調査　石名田・木舟遺跡と命名
		能越自動車道05遺跡	県センター　試掘調査　開ほつ、大滝遺跡と命名
		能越自動車道06遺跡	県センター　試掘調査　江尻遺跡、簑島遺跡と命名
		能越自動車道07遺跡	県センター　試掘調査　下老子遺跡と命名
1993年	平成5年	開ほつ大滝遺跡	県センター　本調査
		石名田木舟遺跡	県センター　本調査
		西中・大滝No.1遺跡（石名田木舟遺跡）	福岡町教育委員会　試掘調査
		西中・大滝No.2遺跡（木舟北遺跡）	福岡町教育委員会　試掘調査
		西中・大滝No.3遺跡（大滝遺跡）	福岡町教育委員会　試掘調査

表12　福岡町遺跡調査一覧

Ⅳ　研究成果

1　石名田木舟遺跡出土の宗教遺物について

富山県埋蔵文化財センター
橋　本　正　春

本遺跡出土の瓦塔は、卍崩し表現の高欄を廻し、初層階に阿弥陀三尊像を飾る瓦塔とまとめられる。そして、この瓦塔は、全体が復元できないながらも全国的に見て最古・最大の可能性のある瓦塔である。そして、同時に使用されたかは不明ながらも、県内初といえる大量の金属模倣仏具などの出土をみた。そこで、以下に個々の事項について判明したことについてみてみる。

1　阿弥陀三尊像

阿弥陀三尊像については、別稿に、大脇氏の考察があるので、そこで触れられなかった事柄などを中心にまとめる。

同笵仏像　本遺跡出土仏像は、兵庫県三木市「正法寺山」出土の仏像の一つと同笵と判明した＜注12＞（第５・12、図版７・14)。

「正法寺山」遺跡は、兵庫県の南に位置する三木市にあり、三木市の西で加古川左岸の丘陵沿にある。遺跡からは、仏像三点が出土し、その出土地点は神社裏の古墳もしくは経塚状の盛り上がり部分中央(発見当時すでに窪んでいる)から出た＜注13＞とのことであり、仏像は阿弥陀三尊像1体・菩薩独尊1体・坐像千体仏(上下２段10体一単位)一部破片の三様である。なかでも阿弥陀三尊像には、出土当時金箔が塗布されていたらしく、瓦塔の初層階内部にまつられたと現在では推定されている〔三木市史1970・辰馬考古資料館1982〕。

この阿弥陀三尊像の寸法を計測し比較してみると、本遺跡例は僅かに小さい。例えば、中尊台座下端から光背上端まででは４㎜少なく、他の部位間の寸法でも僅かづつ少なくなる。正方寺山例の台座の整形及び表現はきれいで、特に蓮弁の表現が明確である。このような差異は、焼成時の焼き方・使用粘土・焼きしまりなどの差異により、台座などの特徴の差異は押し込めた粘土の剥がれ方によるものである。仏像の形状などは、酷似しており同笵品とする。

本県例でなく、また時期も異なり塼仏ではあるが、富山県を含む北陸地方と兵庫県（播磨）との交流を示す例があるので参考までにここに記しておく。同笵例は、石川県七尾市能登町野崎の光顕寺伝世の塼仏１点（如来座像、12世紀、平安末期）と兵庫県新宮町段之上白山神社伝世品である三仏像のうちの一と同笵と判明している。そして、これらの塼仏の出土状況は、珠洲地域の陶製仏像と似ており、村堂・村社の伝世などであり、広大な敷地を持つ本格的な木造建築寺院からの出土ではないらしい。ここでは、中世の使用階層と方法に共通の宗教基盤がうかがわれると［吉岡1989］されており、本遺跡例を考えにいれてみると、もしかするとそれ以前から同様な関係と宗教基盤があった可能性もある。そこで、これらの出土状況と同笵関係地域などは、本遺跡例を考える上で参考になると思われる。

仏像制作者　制作者などについて見てみる。富山県と兵庫県とは、直線距離にして約300kmとかなり離れており、当時の仏像製作工人が自分の意思で簡単に移動して製作したとは考えがたい。しかし、移動したことを含めて、ひとまず以下の二つの可能性を検討してみることとする。

1　仏像製作工人が移動しない。　一カ所で仏像を複数個作り、それを各地に配布する。

2　仏像製作工人が移動する。　一カ所で仏像を作成した後、笵のみを持って他地域に行き、再度製作する。

仏像の制作場所は、瓦塔出土遺跡近郊の須恵器窯跡が想定される。しかし、この三尊像は、瓦塔の一部として捉えな

ければならず、瓦塔全体を一カ所で制作した後、その大きな瓦塔を持って各地に配布したとは、考えにくい。そこで、2の仏像及び瓦塔製作工人が笵もしくは製作した仏像のみを持って移動する考え方が妥当とする。

本遺跡の場合を検討してみる。近郊の須恵器生産窯跡としては、時代が異なるかもしれないが南西には福野町安居窯跡が8㎞離れて、南東には砺波市福山窯跡が12㎞離れてある。前者からは、特殊な須恵器が、後者からは瓦塔が出土しており、本遺跡出土瓦塔を生産した可能性はある。制作工人の特定は、銘文などが無いため不明である。

仏像を表現した例　本遺跡出土の仏像は、瓦塔の初層内陣箱型壁面に表現されたもので、このような例は、兵庫県正法寺山遺跡、静岡県引左郡三ヶ日町宇志山中出土例などがある。正法寺山遺跡の瓦塔は、現時点では時期は不明としておく。静岡県三ケ日瓦塔例は、平安時代で、高さ2ｍ2㎝である（第9図、図版15)。参考例であるが、愛知県「元屋敷」例は、土製押出仏2仏並坐像を設置したと推定されており仏像の状況を示している［梶山1989］。瓦塔内陣の状況は、これらの例などから大脇氏の指摘のように、本格的な木造層塔と同様に内陣壁面4面に仏像を表現していたことが判る。本遺跡例は、箱形壁面にはめ込まれていたものがとれたと理解でき、全体は現時点で不明ながら、心柱を囲む箱形があったと推定できる。

内陣箱型　内陣箱型が判明した例は、静岡県三ヶ日町出土瓦塔例がよく知られており、箱形の一面の大きさは幅13㎝、高さ14.6㎝、厚さ0.7㎝である（図版15)。仏像は、箱形の一面のほぼ中央に二体づつ表現されており、仏像の大きさは幅2.3㎝、高さ7㎝前後で、二体分の大きさは、幅8㎝、高さ10㎝前後で、一面の2／3を占め仏像はゆったりしている。ここで、三ヶ日町例が標準的な瓦塔と仮定し、本遺跡例との比較をしてみる。仏像の大きさは三ヶ日町例仏像の約二体分に近いがやや大きくなる。また、仏像を含むはめ込み型の大きさは、三ヶ日町例箱形の一面の大きさにあてはめると約3／4を占めることになり、窮屈となる。もし、三ヶ日町例と同様の作りで周辺の余白を想定すると、本遺跡例の箱形の大きさは三ヶ日町例の約1.5倍とみることができ、幅約18㎝、高さ約23㎝程度が想像される。

天蓋　天蓋は、仏像などの上にかけて荘厳するもので、箱形天蓋が古式とされている。本遺跡出土の阿弥陀の天蓋は、宝珠を粘土を盛り上げて表現し、三山傘で縄状の玉繋ぎの瓔珞で結び、房玉を垂下させただけの単純な形であり、塼仏などでみられるような装飾性がなく、古い特徴を模倣している<注14>。

施無畏世願印と阿弥陀仏　施無畏世願印は、諸仏の通印で、来迎印の祖形と見られ、釈迦・薬師如来に多く見られる。施無畏・与願印阿弥陀仏の例としては、法隆寺橘夫人厨子内金堂製阿弥陀如来坐像並脇侍・同寺伝法堂乾漆阿弥陀如来坐像などが良く知られており、これらは7世紀後半から8世紀初奈良時代までの制作である。阿弥陀如来は、仏教の死後の世界である西方極楽浄土にあり、悟りに達した人のように現れた人で、衆生を救済するとされる仏である。阿弥陀仏の最古例は、法隆寺献納宝物中の金銅造阿弥陀三尊像で、施無畏・与願印を結び、両脇侍は観音と勢至菩薩で白鳳時代の作である<注15・16>。

年代について　同様の技法で制作された塼仏などは、7世紀から制作されていること。天蓋などは、古式様相を持つこと。これらから本遺跡出土の阿弥陀三尊像自体は、8世紀初まで遡るの可能性がある。

2　卍崩し高欄

高欄については、別稿で、松本氏の考察があるのでそこで取り上げれたことも含めてまとめる。

高欄と卍　高欄は欄干で、廻り縁のふちに付けてその形を整え、あるいは、上下階の中間に設置してその連絡を密に

するものと説明され、本格的な木造建築物の塔や金堂などの高層階と仏壇や須弥壇などに見られるものとされている。卍は、功徳・円満の意で、仏像の胸に描き吉祥万徳の相とするもので、左右両方向旋しがあると説明され、また、卍崩しは、建物の塔などに用いられるとされている。

卍崩し高欄　卍崩し高欄（第6・9～11図、図版9・15）は、本格的な木造建築物（寺院他）の塔などの二重高欄下段に見られ、飛鳥様式のみの特徴とされている。国内で、現在これが見られるのは、現存する本格的木造建築寺院と絵画などだけである。前者では、「法隆寺」五重塔と金堂と中門・「法起寺」三重塔・「法輪寺」三重塔の3寺院5建物だけであり、時期はいづれも奈良時代以前である<注17>。後者では、東大寺法華堂(三月堂)本尊不空絹索観音像付随須弥壇上縁などがあり、時期は奈良時代以後である<注18>。一方、国外では、韓国慶尚北道漆谷郡松林寺の金堂製仏舎利台座(新羅)〔金正基監修1988〕があり、時期は奈良時代以後である。このように飛鳥様式卍崩し高欄は、奈良時代以前の特徴でありながら奈良時代以後まで意匠が受け継がれており、飛鳥時代のみの特徴とはいえないようである。

そこで、本遺跡出土の卍崩し高欄をみてみると、本格的な木造層塔をできるだけ正確に模した瓦塔の一部だとすれば、飛鳥様式の意匠を持つことから飛鳥様式主流の時期とみることも可能である。しかし、他の瓦塔の卍崩し高欄を比較するためにみてみると、国内の現段階では、高欄を持つ瓦塔はあるものの、飛鳥様式卍崩し高欄を持つ瓦塔はまだ知られていないため、本遺跡例は瓦塔例としては国内初例であり、時期を決定しにくい。さらに、全体が不明であるため時期をここで特定することは差し控えておく。

高欄の位置　高欄の位置については、現存する本格的木造建築寺院などが初層以上でみられる。他に、松本氏などが指摘されるように東大寺法華堂例の台座など低い位置に付く例もある。しかし、本例が本格的な木造建築物の塔を目指し、できるだけ正確に製作されたとすれば、本格的木造建築寺院を模したものといえる。そして、本格的な木製塔は、基壇上に設置され、初重に縁を設けない例が多く、特に五重塔では少なく、中世以降でも古代以来の伝統を持つ塔は縁がない［浜島正士編1979］とされている。そこで、ここでは瓦塔の初層以上に卍崩し高欄があったと考える。また、ほぼ完全に復元されている静岡県三ヶ日や長野県菖蒲沢遺跡例などでは、初層以下の基壇上は柵状の連子が、その上の初層階以上は高欄が想定されているので、本遺跡例も同様とする。

高欄を持つ瓦塔　高欄を持つ瓦塔は、次の4例が知られている。

京都府木津「瀬後谷」遺跡例は、窯から基壇・屋蓋・高欄・相輪・露盤などが多数出土しており、一部が復元され、時期は奈良時代中頃である〔石井1992〕。高欄をみてみると、屋蓋四隅に一間づつあり、柱と架木からなり、中央部一間分を開ける。長野県塩尻市菖蒲沢遺跡では、住居跡などから瓦塔二体分が出土し、うち一体分は完全復元され、時期は8世紀中～後期頃である〔小林1991〕(図版16)。高欄は、屋蓋部上部につき、穴が一定間隔であけられている。基壇は、46～49cmの大きさで、一間約15cmの3間として中央部は開けた連子状柵が巡る。また、連子や高欄は、大部分が復元である。初層屋蓋では、一辺26cmの二間となり、一間約13cmの高欄が4面に付くものと推定されている。

このほかに、多くが高欄を差し込んでいるような痕跡があるが、本遺跡例では高欄の下部が丁寧に終わり、地覆が最下端部にあり、また、隅下端部も丁寧に終わらせており、屋蓋部に差し込んだ形跡はみられず、置かれたようである。愛知県名古屋市緑区「NN286号窯跡」例は、地覆と平桁と架木の高欄で屋根上にあり、二重高欄の下段には横連子の表現があり、東海Ⅰ期で8世紀第3四半期以前若しくは中頃である。奈良県奈良市「薬師寺」例は、二彩高欄で、時代不明(寺院は飛鳥時代末創建)である。この中で、最古例は、奈良市「薬師寺」の飛鳥時代末と思われる高欄である。

年代　年代についてみると以下のようになる。本格的な木造建築物では、飛鳥様式は大半が白鳳期までであるものの一部が奈良時代初まで続くこと。考古遺物の瓦塔は、奈良時代初期から出現し、中頃例が多い。薬師寺二彩高欄が、類

例とすれば二彩出土寺院は飛鳥時代末創建で、本遺跡例も同様であるならは奈良時代以前とできること。本遺跡の高欄出土遺構は、7世紀末から8世紀前半でおさまる見通しであること。以上、これらを総合すると、7世紀後半白鳳時代の可能性を持ち、奈良時代初もしくは8世紀前半の飛鳥様式の卍崩し組子表現を持つ、丁寧な二重高欄とまとめられる。

3　屋蓋　屋蓋破片は、小破片が2点しか出土しておらず、全体を伺うことはできない。また、上面の瓦を表現する面が剥がれている。これから判明したことは、下面の垂木幅が1.2㎝、厚さが2.4㎝以上である。これらの数値は、長野県菖蒲沢遺跡例の数値に近く、これからは一辺が約50㎝程度で同規模の屋蓋部の大きさが推定できる。

4　瓦塔

前述の1・2では、個別にみてきたが、ここでは瓦塔全体（組み上げて一体となると仮定）としてみてみる。

瓦塔　瓦塔は、「瓦製塔婆」の略で、「普遍性を帯びた実用型(中型)仏塔の一種で粘土を材料とし、これを木造高層塔婆に擬して造形化した上、窯で焼製して仕上げられたもの」とし、「基台をすえ、その中心に中心柱を立て、軸部、屋外部を交互に積み重ね、上部に相輪を充填した瓦製の中型塔婆であり、屋外にある種の目的のもとに造立された、仏教信仰上の遺物である」と規定する。また、「木製塔の模倣物でありながら、寺院の独占的形態を離れ、実用化された中型塔婆の一として、特殊な意趣を担ったもの」と石村喜英氏が説明されている〔石村1976〕。また、大型塔と小塔について石村氏は、「その寺院における大型塔婆の性格は、釈迦の真身舎利崇拝・法身舎利(経典)信仰を意味する墳墓的性格を持つ。それに対して、瓦塔(小塔)は、塔婆信仰上は深い関わりをもちながら、その受容層位を大半変え、相応に逸脱した形態と自利的目的のもとに、造立された。ここに瓦塔の特殊性がある。」と説明している〔石村1976〕。そして、瓦塔は、これまで仏教遺物でありながら、陶製であるため考古学の対象物として扱われ、仏教と密接に関係しながらも考古学者の多くは建築学的に、宗教学的に瓦塔をあまりよく検討していない感があった。また、考古遺物としての事実記載的な報告が多く、全体を捉え、仏教遺物としての研究は、数少なかったようである。ところが、最近の研究では、建築学の面からも検討が加えられ出し、木製の塔の一として、玉虫厨子や元興寺五重塔小塔など<注19>が考えられているのと同様に、瓦塔も木製塔の模型の一として扱われ、小建築物の一となり、多角的に研究されてきている。そして、瓦塔の研究史・性格・構造などについては、近年では松本修自・高崎光司両氏の詳しい論文などがある〔松本1983〕〔高崎1989〕。瓦塔の構造などについては、完全な例として、静岡県三ヶ日町例・東京都東村山例・長野県菖蒲沢例などがあり、これらを基礎にしてここで再度まとめてみる。瓦塔は、通常1.3m～2mの高さで、初層屋蓋の一辺が1尺6寸：48.5㎝程度の重層塔形式の塔婆である。層数は5層が多く、7層例もある。一方、多層とならない瓦堂及び瓦金堂もあり、須恵質と土師質の2者がある。瓦塔は、大きく基壇・軸・斗栱(組物)・屋蓋・相輪部の5部位に分けれる。それらを組むときには、基壇に中心柱を立て、基壇と軸部・屋蓋部・相輪部の順に積み重ねる。瓦塔の時期については、奈良時代から始まるとされている。

村落内寺院　瓦塔の目的や性格については、いくつかの説明がなされている。現在では、畿内などを中心とした本格的な木造建築物である寺院自体が存在する場所では仏教の信仰対象は寺院となり、それ以外の地方では瓦塔がそれにとって変わったとみている。関東地方などでは、地方寺院のあり方として村落内寺院などを想定している［須田1985・笹生1994］。また、瓦塔は、木造塔の外観と、初重部分の厨子的機能を合わせ持ち、仏塔として十分機能し得たもので、伽藍建立困難地で瓦金堂とセットで、私的な集団の信仰の対象となり、陶器工人が制作し、中国や朝鮮との関係の上で考察されるものと解されている〔松本1983〕。そして地方では、中央寺院でみられるような広大な伽藍でなく、小型堂塔や瓦塔・瓦堂を安置した建物によって構成された簡略化された寺院が想定されている〔上村1991〕。そこで、本遺跡例をみてみると、もし仮に瓦塔の高さが数m近くあった場合、その瓦塔を納めた建物は相当大きくなるため、瓦塔は屋外

に直接置かれたと考えられる。参考までに奈良時代以前の仏教の塔と金堂をみてみると、塔などは寺院の中心となっており<注20>仏教の本来の塔は、現存する法隆寺などにある多層塔(奇数階：木造高層、大型塔婆)のことである。

瓦塔出土地と種類他　瓦塔の出土地及び分布状況では、全国の瓦塔を集成した飛鳥資料館の詳細な図録がある〔飛鳥資料館1984〕。しかし、その後も全国各地で相次いで出土しているので、本書では平成6年度現在で、前掲の集成に追加資料を加えて今回新たに作成した（表2）。

出土地では、28都府県、245遺跡(地点)から出ている。地域別では、東海道地域が全体の半数を占め、次いで東山道・北陸道となる。県別では、埼玉県55遺跡が最多であり、富山県では、14遺跡から出ている。出土遺跡の種類別では、廃寺・窯跡出土例が多く、国分寺例も目立つ。これらの結果は、これまでにまとめられたものとほとんど同じ内容・状況である。そして、近年の瓦塔増加は、これまでの周知遺跡内での点数の増加と周知遺跡近辺出土例であるものが多い。また、時期などもこれまでと同内容である。ここでは、仏教の畿内からの伝播と捉え、古代の道路を重視し、その沿線国（県）を一まとまりとした。北陸道は、若狭・越前・加賀・能登・越中・越後・佐渡国（福井・石川・富山・新潟）の7国（4県）が該当する<注21>。本遺跡例は、越中国の中でももっとも加賀よりとなる。

県内の瓦塔出土地点をみてみると、白岩川以西の県西部地区にまとまり、その中でも、富山市・高岡市南部から砺波市・小矢部市の3地点に3～4遺跡が集中する地区がある。本遺跡例を含めてほかの4地点は、点在している。

瓦塔のうちで、瓦(金)堂例があり、埼玉県甘粕山遺跡・東山遺跡・千葉県谷津遺跡の3例がある。六角形例では、福島県上人壇廃寺・愛知県猿投古窯跡があり、八角例は長野県明科廃寺例がある。初層階2間例は、長野県菖蒲沢窯跡で、専用の基壇上に設置された例として静岡県三ヶ日・滋賀県衣川廃寺(推定)・千葉県萩の原遺跡例がある。建物内出土例として、埼玉県東山遺跡、方形区画内出土例として千葉県谷津・群馬県上西原例がある。富山県内の瓦塔出土例は、表11のように14例がある。最古例は、砺波市「福山窯跡」例が知られている。中でも良く残存し、復元されているのは富山市「明神遺跡Ⅲ地区」瓦塔があげられる。県内出土の瓦塔は重層（五層）の塔を想定しており、通常の大きさらしく、窯跡出土例が多い。本遺跡例は、小破片のため全体が判然としないが、現段階では集落出土の重層例といえる。ここで、瓦塔ではないが、陶製の相輪が小杉町流団№19遺跡より出土しており、相輪部の大きさなどから(奈良時代)復元すると室生寺の塔と同規模になるとされている。また、№19遺跡以外でも仏教の受容を示すものがいくつかある。そこで、時期も近く地方での仏教受容例といえ、参考となろう。

4　仏具　仏教は、飛鳥時代の538年に大陸から伝わり、国の奨励策を経て、天平時代になると国家仏教となり、特に畿内地方を中心に寺院や仏具などが盛んに作られ出す<注22>ようになる。本遺跡から出土した仏具には、奈良三彩2点などがある。奈良三彩は、分析結果から国内産奈良三彩と判明した。この三彩は、畿内から持ち込まれた可能性が高く、8世紀前半から中頃である。水瓶は、7世紀末から8世紀の第1段階の可能性がある。多嘴瓶は、8世紀中頃から後半で、東海地方とは制作方法が異なり、薬師寺西僧房跡出土灰釉陶器例に似る。合子は、8世紀第2四半期である。他に香炉・壷・鉄鉢・円面硯破片がある。年代などについて　瓦塔と共にこれら仏具類が同時に制作されたかは不明であり、時期幅を持ち、7世紀後半から8世紀中頃までに制作され仏事に使われたと言える。

5　瓦塔他の宗教遺物のまとめ

本遺跡出土瓦塔など宗教遺物をまとめてみる。

仏像　本遺跡出土仏像は、兵庫県正法寺山遺跡例と同範と判明し、仏像の制作年代は奈良時代前半との見方がある。瓦塔の一部として見た場合、奈良時代の始め頃もしくは8世紀始めとの見方がある。そこで、ここでは8世紀前半とする。

高欄　本遺跡出土高欄は、7世紀後半の可能性を持ち、奈良時代初もしくは8世紀前半と言え、飛鳥様式卍崩し組子表現を持つ、丁寧な二重組高欄である。

瓦塔　瓦塔は、阿弥陀三尊像・高欄などから、奈良時代初頃とする。しかし、飛鳥様式を持つこと、天蓋などに古様相があることなどから、奈良時代以前の可能性もある。また一方で、仏具や須恵器などの時期が奈良時代前期以後のものがある点などから、古くせず奈良時代中頃とも考えられる。ここでは、白鳳期後半から奈良時代初頃とするにとどめる。

最古の瓦塔　最古の瓦塔は、滋賀県「衣川廃寺」の瓦塔（7世紀代）[藤沢1975] で、ついで伝神奈川県三ツ沢の瓦塔（8世紀前半）・千葉県佐倉市「長熊廃寺」の瓦塔（8世紀前半）とされている [松本1983]。本遺跡例が、8世紀前半以前の可能性があるため、国内初例と並ぶ可能性をも持つ。また、県内例では、福山窯の8世紀前半例もあり、この時期には県内に仏教が入っていると認められ、この頃にこのような宗教遺物が存在していても不自然ではない。

しかし、先にも述べているが、飛鳥様式が即座に時代を限定するものならば飛鳥時代の可能性はあるが、松本氏も指摘しているように飛鳥様式の卍崩し高欄は、後世まで残っている現実がある。そして、このような特殊な遺物が出土すると、時期を少しでも古くしするふしもあるが、ここでは飛鳥時代との明確な根拠がないので飛鳥時代とは特定しない。

最大の瓦塔　最大の瓦塔としては、長野県菖蒲沢遺跡例がある。専用の基壇上に設置されたもので、基壇下からの高さは2.3mである。ところが、本遺跡例は、菖蒲沢遺跡例より大きくなる可能性があり、筆者が推定復元した通りの高さになるとすれば本遺跡例が国内最大瓦塔となるかもしれない<注23>。しかし、すべて小破片からの復元であるので、ここでは長野県菖蒲沢遺跡例に近いとする。

仏具など　一方仏具は、それより時代が少し新しくなり、8世紀中頃とし、伝世し後世まで残った瓦塔と同時に使われたかは不明であるものの、寺院などでの仏具として使用されたものといえる。また、この瓦塔が制作された後、もしくは、相前後して仏具などが制作され、当地の氏族により支えられた、小さな地方寺院(瓦塔)を中心とする大衆をも含めた地方仏教(信仰)が行われたとみたい。そして、この瓦塔制作及び寺院経営の協力者としては、「射水の臣」（その系列の人々）あたりが想定される。他に瓦塔の出土のあり方では、井戸などの後世の遺構出土のものと同時期と思われる遺構出土とがある。本遺跡でも同様であるが、瓦塔などと共に施釉陶器・仏具・製鉄関連のふいご羽口や鉄鐸などと同時に出土する遺跡が他地域でも注目されている。畿内周辺では、寺院跡などが多いが、畿内より遠い国では、一般集落が多くなり、特に関東では、其の傾向が顕著であり、また、建物となり得る遺構内出土例もあり、普通の一般集落内(村落内)寺院の様相を呈している。また、塔に上屋根をかけないで、塔自体を外に出したままであがめたとする説の根拠の一部になっている。

年代とまとめ　瓦塔の年代については、阿弥陀三尊像などが古い様相も持ちながら、また、遺構出土の伴出遺物に7世紀後半の遺物がありながら、国内の瓦塔の出現が7世紀後半からであることなどを考慮して、ここでは7世紀後半から8世紀初で、奈良時代以前の白鳳時代の可能性があるとまとめる。

<注12>　大脇氏の教示による。実物を計測。

<注13>　仏像発見者の黒田氏の教示

<注14>　井口氏、大脇氏などの教示による。天蓋は、先の事実記載でも述べたが、三山形・宝珠・傘骨の簡素な表現で、天蓋の古式様相であり、高欄の飛鳥様式同様に初期のものと見て良い。

<注15>　阿弥陀仏は、国内では、7世紀中頃から登場し、平安時代になり浄土教が盛んとなり、阿弥陀堂と共に各地で制作されるようになった。三尊形式では、両脇寺は観音菩薩と勢至菩薩が多く、施無畏与願印が多い。県内例では、見返り阿弥陀仏例の福野町安居寺・光明寺蔵例

があり、桧材で室町時代の作である。平安時代の小金銅仏例では、小矢部市植生医王院裏山の宝冠阿弥陀三尊坐像と氷見市中尾の宝冠阿弥陀如来坐像があり、宝冠阿弥陀三尊形式は東北の経塚に多い<加島1991>とされている。

<注16>　土製の阿弥陀三尊像としてみると他に塼仏などがあり、それらは以下のように説明されている。官立寺院では、大繡帳により壁面を荘厳にしているため塼仏の出土は少ない。一方、氏寺級寺院では、塼仏の出土が多く、これを大繡帳のかわりとして、塼仏に金箔などを塗り、寺院内の壁面を飾り、荘厳さなどを作り出し、堂内の本尊と共に仏世界の雰囲気をかもし出していたらしい〔久野　健1979〕。

塼仏については、倉吉市立博物館真田廣幸氏から教示を受けた。塼仏や押し出し仏などは、西方浄土極楽思想の様相を表現しようとしたもので、7世紀後半からみられ、660年代の川原寺裏山の塑像と共に出土した方形三尊像塼仏が良く知られており、一辺が20cm程度である。そしてこれらを集成した図録があり詳しい［倉吉市立博物館1990］。押出仏は、同様に造るもので、白鳳・天平時代に限られ制作され、平安時代以降例はほとんど見られない。この塼仏は、仏像と同様に礼拝像とするものと堂塔内の壁面荘厳具としたものとがある。

このように一つの型から多数の同形品が作成されるのは、それだけの需要があり、7世紀後半から流行していた。県内出土の塼仏は、小矢部市例がある。塑像最古例をみると、648年大化4年摂津四天王寺五重塔の霊鷲山像（亀田他1991）があり、塼仏同様に7世紀後半から制作されだす。

<注17>法隆寺の創建年代は、670年以後とされ、679年には金堂が、695年には五重塔などが建っている。五重塔は、方3間、高さは21.2m、方6.4mである。法起寺三重塔は、684年から造立し、706年に露盤(相輪)を作り終え、塔が完成する。高さは、23.9mである。法輪寺三重塔は、同時期である。天平建築の現存する薬師寺東塔は、730年に完成し、高さは33.63mである。

8世紀中期の738年には、海龍王寺五重小塔が完成している。元興寺極楽坊小塔は、8世紀後期奈良時代末である。室生寺五重塔は、9世紀前期平安時代初頭である。

塔は、制作材料からと種類から分類されている。材料別では、木製から文字絵まで10種類があり、形などの種類では宝きょう印塔から段塔まで18分類されている。木製塔の種類では、仏舎利などの奉安を目的とする多重塔と多宝如来をまつる多宝塔に大きく分けられる。多重塔では、最大が笠置寺・興福寺四恩院の十三塔で、次いで九・七重塔がある。多宝塔では、石山寺などがある。

<注18>　東大寺は、743年天平15年聖武天皇により官の大寺として造立され、法華堂は746年頃の創立である。他に、卍崩し高欄は、「過去現在因果経絵巻宮殿図」に描かれているとされている［佐伯1936］。

<注19>　海竜王寺五重小塔は、高さ4.14m、初重柱間77.9cm、五重は34.8cmとなり、初重の4割5部減となっている。元興寺極楽坊五重小塔は、高さ5.5m、初重柱間3間とも32.6cm、二重から1寸ずつ減らし、五重は各間20.8cmとなる。塔の相輪長さは、時代にとらわれずほぼ一定し、時代が新しくなると塔身部長さが長くなり、全体が細高くなる。室生寺五重塔は、高さ16.2m、初重方2.4mである。

<注20>　飛鳥奈良時代の寺院配置は、金堂・塔・講堂・門が主で、地方では、全建物を建てずにすます。

また、寺院としては、塔の他に金堂などの建物と回廊などが一体となっている。そして、特に奈良時代以前の寺院は、全て桧材で建立され、それ以後の寺院でも桧材が多い。このように寺院全体を桧材で作らるきまりがあったとすれば、一地方の氏族が広大な寺院を建立するだけの財力が無かったと見るのが妥当であろう。そして、これらのことなどから、広大な寺院のかわりに瓦塔を中心とした小寺院(瓦塔の上屋根程度牡)もしくは、瓦塔自体を現地に置いて信仰したとみれる。

<注21>　国郡制は、大化改新の詔からはじまり、郡司級の氏族は地方の中心的仏教受容者であったので、本遺跡出土の瓦塔を支えた人々を考える上での参考となる。

<注22>　仏教仏具は、仏具・法具・僧具などに大きく分かれ、金・銀・銅(白銅・青銅・黄銅など)製品が多い。飛鳥時代例として、法隆寺金堂内仏像と天蓋などが、天平時代例としては東大寺法華堂(三月堂)内陣などが知られている。厨子(宮殿)は、仏像や仏舎利・仏画・経典などを納置するもので、仏像安置・仏画奉懸・納経・舎利厨子がある。同様意味で厨子の一種としては、仏龕がある。仏教版画は、仏教の伝来以後、他の仏具や堂塔などと同様に発展し、仏などが彫り、刷られ、仏教の布教と堂塔内の荘厳具の一として用いられている。本遺跡では、この中の仏具と法具の一部が出土したことになる。

<注23>　瓦塔の大きさを推定復元してみる。ここで本遺跡例の瓦塔全体を推定復元して見る。また、高欄は飛鳥様式卍崩しであることと本来の塔を目指しできるだけ正確に模しているはずであるので、卍崩し高欄を持つ法隆寺を基準としてみる。本遺跡の高欄の柱高さが7.8cmで、高さと一間の長さ比率が本格的木造層塔をまねており1対2とすると15.2cmの一間が想定でき、二間なら約30cm、三間なら約45cmとなる。三間の時の屋根の張り出しを考えると基壇一辺長は約90cm近くなり、二間の時は約60cmが予想される。軸部は、内陣箱形が幅約18cm、高さ約23cm程度とするなら、初重一辺は約36cmで高欄などを含めて約54cm程度である。法隆寺の高欄は、三間が四方に巡るので、本遺跡例も同様とすると一間は約15cmと推定され、高欄の三間一辺の大きさは、約45cmと推定復元される。屋蓋などの規模は、初層が54cm程度(約2尺)となり、五層とした時の五層一辺は27cm(約1尺)程度となる。相輪部は、不明であるもののほぼ全部の瓦塔にあったとみられるので、相輪を含めた高さは平面初重柱間全体の約5倍であり、五層とすると相輪を含めた高さが3m近くなる可能性がある。一方、出土破片の復元から高欄一間長は柱長の2倍を越える可能性もあり、本来の塔の1／10模型の小塔に近い規模となる可能性もある。

ここで本遺跡例と菖蒲沢遺跡例との比較をする。菖蒲沢の高欄一間は10.7cmで、二間約22cmである。二間の時の比較では、本遺跡例が二間約30cmであり、菖蒲沢の約1.5倍となりそうで、三間では約45cmであるため2倍強となる。また、高欄の柱径では、菖蒲沢が0.7cm角で、本遺跡例が1cm角であり、ここでも規模が大きいようである。

2　瓦塔にまつられた仏像

奈良国立文化財研究所
大　脇　　潔

1　はじめに

今回出土した三尊像（巻頭カラー１、図版18）は、塼仏と同様の技法で作られたものである。しかし、いわゆる塼仏とは用途が異なり、瓦塔初層の内陣に見立てた壁面にはめ込んだものと推定される。このような例は管見によればさほど知られておらず、適切な名称もないようである。そこで、とりあえず塼仏の中に含め、その特殊な使用法のひとつとして後考をまとう。また、これ一例だけでは、なかなかその製作年代や製作地を明らかにすることもむずかしいが、幸い、おなじ原型から起こした型を用い、同様な技法で瓦塔の壁面を装飾した例が兵庫県三木市和田町の正法寺山遺跡から発見されている。[注1] そこで、まず両者の観察から得られた知見を紹介するとともに二・三の類例をあげ、あわせて瓦塔にまつられた仏像の今後の研究の見通しについてふれたいと思う。

2　三尊像の観察

三尊像をあらわす瓦塔の断片は、縦12.6㎝、横9.0㎝の大きさがあり、板状部の平均的な厚さは1.3㎝、中尊像の蓮華座での最大の厚さは2.0㎝である。表面には天蓋と三尊像をあらわしているが、そのまわりは指ナデで丁寧に仕上げている。裏面中央には指頭圧痕が残り、まわりには粗い指ナデの痕跡がある。側面の破面に残る痕跡とあわせ考えると、型に長方形の粘土板を当てて型抜きし、それをあらかじめ別に製作中であった内陣の壁の一部に開けた窓にはめ込み、接合用の粘土を足しつつ仕上げたものと思われる。この方法を仮にＡ手法と呼ぶことにしよう。

中尊　やや先端が尖り気味の二重の円形の頭光を負い、線刻で受花をあらわした蓮華座上に坐す。脚部の表現はあいまいで結跏趺坐の形を正確にあらわしてはおらず、一見すると倚像のようにも見える。しかし、足先が表現されていないので、むしろ衣文を裳懸座風にあらわしたものと理解しておきたい。頭部の表現もはっきりせず、目鼻だちも明瞭ではない。左手は左の膝頭におき、右手は肘を屈して掌を胸前におく。着衣形式は判然とせず疑問点も多いが、一応通肩風に大衣をまとったものと見られ、下半身に裙裾をつける。腹部の衣文が省略されたためか左肩から右脇へ斜めに走る衣文が目だち、菩薩像の天衣のようにも見え、そのように見ると首や腕にも装飾らしき表現があり、即如来像とは断定できない。しかし、後述するように、左に観音菩薩像、右に勢至菩薩像を従えていることなどから、一応阿弥陀如来坐像をあらわしたものと考えられる。

右脇待　円形の頭光を負い、腰をわずかに左に（中尊側）にひねって蓮華座（連弁の表現はほとんど残っていない）上に立つ。頭部と目鼻だちの表現はその存在が知れる程度に簡略化されている。右手は体側に沿って垂下するが、かすかに水瓶を持つ表現が残されており、勢至菩薩をあらわしたものであることがわかる。左手は肘を屈し掌を胸前におく。両肩に天衣を掛け体側に沿って垂下、下半身には蓮肉上面にまで至る折り返し一段の裳をつける。

左脇待　これも円形の頭光を負い、蓮華座上にほぼ直立する像である。頭部には三方への隆起が認められ、三面頭飾をあらわしたもののようである。眼・鼻・口・耳の表現は簡単ではあるが他の像にくらべればもっとも整っている。左手は体側に沿って垂下し、右手は肘を屈して掌を胸前におく。これまた両肩に天衣を掛け、下半身には裳をつける。両足の五指と蓮華座の受花は、型から抜いた後に線刻であらわしている。観音菩薩と思われる。

天蓋　三尊像の頭上には、瓔珞を飾る天蓋がある。上方が瓦塔壁体にはめ込まれた際の指ナデによって一部擦り消され

ているが、他の塼仏・押出仏などの例から推定すると、頂部に大形の宝珠を飾り、そこから左右にのびる蓋の先端にも小形の宝珠を飾る天蓋と思われる。さらに天蓋からは、玉を弧状に連ね、それぞれの取り付け部には房状の飾りを先端につけた大形の垂飾が5組、弧状に垂れ下がる玉飾りの最下部には小さな垂飾を4組飾る。

三尊像の製作年代　この像に似た三尊形式の塼仏[注2]や押出仏[注3]は、わが国から出土したものだけでも、およそ16形式ほどが知られている。その多くは、中尊を倚像とし、坐像とするのは本像を含め4例だけである。また、7世紀末までに原型が製作されたと考えられる三尊形式の塼仏や押出仏と比較すると、中尊の坐像形式や着衣形式に代表されるように、図様全体にあいまいな表現がめだつ点がまず指摘できよう。したがって、原型の製作年代は8世紀に入るのではないかと思われる。直接比較できる例は少なく、材質も規模も異なるが奈良県奈良市大和田町の滝寺磨崖仏[注4]に一脈通じる表現が認められ、年代を考える上で参考になると思われる。

なお本像の製作は、陽刻原型から起こした土製の雌型によると思われるが、図様のあいまいな点が多いことから、数回の踏み返しの過程を経た可能性も考えられる。また、他の瓦塔には、内陣の四壁に数種類の如来像や菩薩像をあらわした例が多く、石名田木舟遺跡でもこれ以外の仏像をあらわした断片が将来発見される可能性が高い。

3　瓦塔にまつられた仏像の類例

瓦塔の軸部初層に仏像をあらわした例は、たしかにその数が少ない。しかし、本格的な木造層塔の初層内部にまつられた塔本塑像や塔本四仏とおなじように、稚拙とはいえ信仰の対象を瓦塔の中に表現した例として注目され、瓦塔の用途を考える際、見過ごすことのできない貴重な資料といえる。以下、管見に入った二・三の例について紹介する。

(1)　兵庫県三木市和田町正法寺山遺跡出土瓦塔　加古川左岸の丘陵から出土した瓦塔で、軸部と屋蓋部の断片がある。軸部の断片のうち、3点に型から起こした仏像がみられる。[注5]

断片A（図版19－3）は三尊像と天蓋をあらわし、石名田木舟遺跡出土例とおなじ原型から起こした型から製作したと思われるもので、出土した時には金箔が残っていたと伝えられている。断片は縦10.5㎝、横8㎝のほぼ長方形を呈し、左右と上辺に指ナデと剥離痕が残っているので、これもA手法で製作したものと推定される。型への粘土の押し込み方の強弱にもよるのであろうが、仏像の細部には石名田木舟遺跡例にくらべわずかに不鮮明な箇所が認められる。また細部には微妙な違いもあるが、ほぼ同笵と認定してさしつかえない作品である。

断片B（図版19－4）は、菩薩像の胸から上だけを残す例であるが、塼仏や押出仏におなじ原型から起こしたとみられる作品が6例知られており、筆者はかつてこの一群を同原型資料E群と呼んだことがある。[注6]

これらを参考にすると、この菩薩像は、円形の頭光を負い、蓮華座上に直立する次のような観音菩薩立像に復元できる。頭光は上方と左右に火焔光を、内部に蓮華文を配していたこと、頭上には左右に花文を、中央に大きな化仏を飾る頭飾をつけていたこと、右手は肘を屈し、胸前で掌を前方にして五指をのばし、左手はほぼまっすぐ下げて水瓶を握っていたこと、両肩には垂髪がかかり、その下から天衣を体側に沿ってひるがえしていたこと、下半身には裳をつけ、腰紐中央の花文から二条の瓔珞をまっすぐ飾っていたこと、などである。この他に、胸飾・腕釧などをつけ、小像ながらかなり詳細的確に観音菩薩像をあらわした作品であり、その原型が最初に作られた時期は7世紀末と推定される。本像は、これらの同原型資料と比較すると、頭光の蓮華文が消えていること、化仏や顔立ちの表現があいまいになっている点などに、型の踏み返しによる図像の省略と改変がうかがえ、同原型資料中もっとも後出する作品と考えられる。

なお、本像下半の剥離部分から判断すると、その貼り付けの手法は断片Aとは異なり、壁体の一部を浅く彫りくぼめ、そこへ型から起こした薄い仏像部分を貼り付け、周囲を指ナデして仕上げたものと考えられる。これをB手法と仮称する。

断片世紀（図版19－５）は、化仏形の千仏像を上方にあらわし、下に別の仏像を貼り付けた痕跡を残す。千仏像は、円形の身光と頭光を負う如来坐像を簡単に表現したもので、上下２段に５体づつ計10体の千仏像を一連の型から起こしたものである。まわりは指ナデが加えられているので判然としないが、下半の別の仏像の剥離痕跡からすると、この千仏像もＢ手法によって貼り付けたものと推定できる。このような千仏像は、押出仏や塼仏に類例が多いが、同原型資料といえる例は指摘できない。

以上、Ａ・Ｂ・世紀３断片から推し量ると、正法寺山遺跡出土の瓦塔初層にも、軸部とは別に製作された内陣があり、その四壁に阿弥陀三尊像や観音菩薩像、千体仏や他の尊像を適宜配した形が復元できる。

⑵　静岡県引佐郡三ヶ日町宇志山中出土瓦塔例　この瓦塔は、相輪部をのぞく各部の断片をもとにほぼ完形に復元された数少ない例で、奈良国立博物館に昭和41年から展示されよく知られている。[注7]

仏像は、初層内に納めた箱形の内陣の壁面に型抜きしてあらわす。壁面の内側を観察すると、仏像の部分だけがくぼんでおり、壁体の外側に型を当て、内側から指で押して仏像の形を浮き出させたものと思われる。これを世紀手法と呼ぼう。内陣は、高さ14.6㎝、幅13.0㎝、厚さ0.7㎝の粘土板４枚を組み立てた底の無い箱形につくられており、そのうちの３面に仏像の一部が残る。一番残りが良い面には、高さ７㎝、幅2.3㎝の菩薩立像と、もう１体の仏像の一部が残る。むかって左の１体はほぼ完形であるが、むかって右の仏像は、台座の下端と頭部・頭光の一部だけが残り、両者が同じ型から起こされたものかどうかは不明である。菩薩立像は円形の頭光を負い蓮華座上にほぼ直立し、右手は胸前にあげ、左手に水瓶をもつ。後述する愛知県音楽寺廃寺出土例と同原型資料である。[注8]他の２面には天蓋の一部が残るだけであり、４壁にどのように仏像が配置されていたかを復元することは困難であるが、２～３種類の型を使用して１面に２体づつ仏像をあらわしたものではないかと想像される。なお、この瓦塔の製作年代については、これまで平安時代と考えられてきたが、猿投窯の黒笹８号窯出土のものに形態が似ているなどの点から、奈良時代の770年ごろを中心とする年代が与えられている。[注9]

⑶　愛知県海部郡甚目寺町新居屋遺跡出土瓦塔　白鳳時代の寺院址である法性寺廃寺から出土した瓦塔の、内陣と思われる断片上に2体の仏像を型抜きしてあらわす。[注10]両者とも、仏像の周囲を長方形の板状に整形し、仏像部分を内陣の壁体に貼り付けた状態にあらわす特徴がある。これをＤ手法と仮称しておこう。むかって右の仏像は、正法寺山遺跡出土の断片Ｂに残る菩薩立像と同じ原型から起こした同原型資料のＥ群に属す。しかし、化仏の大きさや火炎光の位置に若干違いが認められ、その型の複製は正法寺山遺跡例や三重県天華寺廃寺出土の塼仏例[注11]とは別の過程を辿ったものと考えられる。むかって左の仏像は、天蓋の下に頭光をつけ、蓮華座上に直立する如来立像をあらわすが、今のところこれと同じ原型から作られた塼仏や押出仏は知られていない。

⑷　愛知県江南市村久野音楽寺廃寺出土瓦塔　音楽寺廃寺は、白鳳時代に創建された寺院址で、法起寺式の伽藍配置をもつと考えられている。瓦塔の大形破片とともに、仏像を型抜きした３点の断片が発見されている。[注12]塼仏とみなされているようであるが、断片周辺の割れかたと同原型資料の存在から、これも瓦塔初層の内陣を飾ったものであろう。

断片Ａは、菩薩立像の上半身を残すもので、正法寺山遺跡出土の断片Ｂや新居屋遺跡例とおなじ原型から起こした型からつくられたもので、同原型資料Ｅ群に属す。３者とも細かな差異があるが、新居屋遺跡例が原型に最も近く、音楽寺廃寺例がそれに次ぎ、正法寺山遺跡例は型の複製過程を異にすることは先述したとおりである。

断片Ｂは、菩薩立像の全身が残るもので、三ヵ日町出土瓦塔と同原型資料である。これもさほど図様が鮮明ではないが、左手に水瓶を持っていることが三ヵ日町出土瓦塔よりはっきりしている。仏像をあらわす長方形の部分が壁面より一段高く作られており、新居屋遺跡例とおなじＤ手法によるものと考えられる。

断片Ｃは、蓮華座上に結跏趺坐し偏袒右肩に大衣をまとう坐像をあらわしたもので、上方に天蓋を飾り、頭光と身光を負い両手を衣中に納めた化仏形にあらわす。はれぼったい表情に特徴がある他に、右腕に腕釧と臂釧をつけたとみられる表現があって注目される。今のところ、これとおなじ原型からつくられた塼仏や押出仏は見いだされていない。

(5) 愛知県西加茂郡三好町黒笹8号窯出土の土製仏像　瓦塔屋蓋部の大きな破片とともに、高さ8.6cmの土製仏像と思われるものが出土している。[注13] その表現はきわめて簡単であり、左手に水瓶と思われる袋状のものを持っていなければ、仏像とは誰も思わないほどのものである。右手は軽く曲げて前方に伸ばし、目鼻だちも簡単にではあるが線刻であらわしている。瓦塔に立体的に表現された仏像を安置する例があったことを示す貴重な一例といえよう。

(6) 愛知県名古屋市緑区鳴海町ＮＮ259号窯出土の塼仏型　平安時代の灰釉陶や緑釉陶素地・須恵器を焼成した窯の、窯体掘方から出土した塼仏型が１点知られている。[注14] 縦4.5cm、横3.9cmの小さなもので、天蓋の下に結跏趺坐し身光と頭光を負う如来坐像を陰刻する。この窯で大量の塼仏を生産した形跡もなく、近くの窯で生産された瓦塔に附属する仏像の製作に使用されたものが混入したものかと想像される。これも、同原型資料は知られていない。

(7) 長野県飯田市竜丘前林廃寺出土瓦塔　[注15] 瓦塔の破片とともに、線刻で高さ20cmほどの仏像をあらわした須恵質の板状断片が17片ほど発見されている。これも瓦塔の内陣に仏像を表現した例とみられる。

4　まとめにかえて

今回の三尊像の発見を契機とした検討の結果、瓦塔にまつられた仏像の存在が明らかになるとともに、今後の研究の見通しについても若干の手がかりを得たので簡単にまとめておきたい。

(1) 石名田木舟遺跡で発見された瓦塔にまつられた仏像と、その関連資料の存在によって、これまでの瓦塔研究の中で見逃されてきたいくつかの課題が明らかになった。そのひとつは、瓦塔の初層に様々な方法で表現された仏像をまつることが決して特殊な例ではなく、とくに、東海・北陸地方以西ではかなり普遍的なものであったという見通しが立てられた点にある。

(2) 奈良時代の宝亀年間（770～780）に建立された西大寺の東塔には、釈迦・阿弥陀・宝生・阿閦如来の４体の如来坐像が安置されていたと伝えられている。このような本格的な木造層塔の初層内陣に安置された塔本四仏を模して、瓦塔の場合も、内陣壁体の４面に三尊像、あるいは如来の坐像や立像、菩薩立像・千体仏など、さまざまな仏像がまつられたのであろう。仏像を表現した瓦塔は、塔の外観だけでなく、より本格的に木造塔を模倣しようとして作られたものであり、その代用品としての性格がより強く感じられる。火舎・水瓶・香炉などの仏教的色彩の強い遺物も伴出しており、この瓦塔が出土した石名田木舟遺跡のどこかに、この瓦塔をまつる小規模な寺院が存在したことは疑いない。

(3) 瓦塔にまつられた仏像の表現形式には、１、型を利用して浮き彫り風に仏像をあらわす方法、２、稚拙な土製ではあるが、立体的に仏像を造形する方法、３、線刻で壁体に仏像をあらわす方法があることが判明した。この他にも墨描きなどの方法や、残りにくい材質でつくられた仏像の存在も当然想像される。また瓦塔だけでなく、近年その存在が明らかになった「瓦堂」・「瓦金堂」にも、その本尊としての仏像が必要である。いかなる材質のどのような仏像であったのかの検討が必要であろう。

(4) 型を利用して仏像を瓦塔に表現する方法を細分すると、A～D4手法があることが判明した。正法寺山遺跡の瓦塔では、このうちのA・B両手法が共存しており、必ずしも手法の違いが製作時期や製作地の違いに結び付くか否かは不明であるが、新資料発見の際には注意する必要があろう。また、同原型資料の仏像をあらわす場合は、その軸部や屋蓋部の表現型式や技法についてこれまでの研究成果[注16・17]にもとづく再検討が必要である。この作業によって、従来の瓦塔の製作年代や製作地をより詳しく論じることができると思われるからである。

(5) 型を利用して仏像をあらわす瓦塔の製作地のひとつが、猿投山古窯址群にあることははっきりした。ここから東海地方を中心に瓦塔が供給されたのであろうが、一方、越中と播磨、直線距離にして300キロ近く離れたふたつの瓦塔を結ぶ環があるのかどうかという、はなはだ興味深い問題が残されることになった。両者がいつ、どこで、誰によって作られたのか？この答はすぐには得られそうもないが、そのためにも、このふたつの瓦塔についてのさまざまな観点からの研究が必要と思われる。

注・参考文献

1 辰馬考古資料館編 『兵庫の古代寺院跡Ⅰ 昭和57年度秋季展』 1982年
2 大脇潔 「塼仏とその製作年代」『特別展 塼仏 －土と火から生まれた仏たち－』 倉吉博物館 1990年
3 奈良国立博物館編 『押出仏と仏像型』 1983年
4 奈良市教育委員会 『奈良市石造遺物調査報告書』 1989年
5 前掲注1文献
6 大脇潔 「塼仏と押出仏の同原型資料－夏見廃寺の塼仏を中心として－」『MUSEUM』第418号 東京国立博物館 1986年
7 稲垣晋也 「静岡県引佐郡三ヵ日町宇志山中発見瓦塔の復元について」『考古学雑誌』第53巻－第1号 日本考古学会 1967年
8 名古屋市博物館 『発掘された東海の古代 律令制下の国々』1994年
9 奈良国立博物館 『奈良国立博物館名品図録 増補版』1993年 三ヵ日町出土瓦塔の調査に際しては奈良国立博物館の井口喜晴氏に時間を割いていただくとともに、多くの御教示を得ました。記して感謝の意を表します。
10 名古屋市博物館 『尾張の古代寺院と瓦』 1985年
11 三重県教育委員会 『昭和五四年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』 1980年
12 前掲注8文献
13 愛知県教育委員会 『愛知県猿投山西南麓古窯址群黒笹地区古窯址分布現状調査報告』 1956年
14 名古屋市教育委員会 『緑区鳴海町字赤松所在 NN－259号窯跡発掘調査報告書』 1989年
15 遮那真周・遮那藤麻呂 「伊那谷南部における初期仏教文化とその歴史的背景」『長野県考古学会誌』49号 1984年
16 松本修自 「小さな建築 －瓦塔の一考察－」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所 1983年
17 高崎光司 「瓦塔小考」『考古学雑誌』第74巻－第3号 日本考古学会 1989年

3　石名田木舟遺跡出土の瓦塔について

東京国立文化財研究所
松　本　修　自

出土した瓦塔片は、次の三種である。

a．屋蓋部分

b．仏像部分

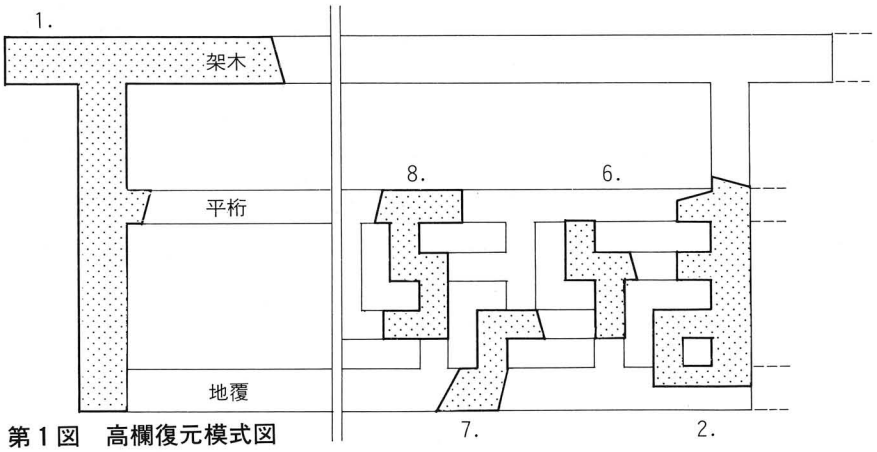
c．高欄部分

このうちaは2点で、表現は通有のものとかわらず、小片であることもあって、特に顕著な特色は見いだせない。第5図の1は、下面に垂木を、上面は大きく剥離していて解りにくいが、おそらく瓦葺きを、それぞれ表していると考えられる。2も同様だが、端面から突出している角柱状の部分は隅木（しばしば隅棟と一体になる。）の表現であり、屋根の隅部分の破片と知られる。

bの仏像部分は、塼仏状の浮き彫りの三尊がほぼ完形で残り、その大きさと、他の個体と隣接する様子のないことから、塔の初重内部に単独で納められた仏像であろうと推定される。三ヶ日出土例(奈良国立博物館蔵)からすると、心柱を囲む形に置かれる、内陣を模した角筒形の壁体に装着されたのであろう。通常瓦塔の初重には、四面中央に扉口を模した開口部があるので、そこから拝するように仏像も各面一体、計四体であった可能性もある。像の表現はかなり精巧で、このようなものを持つ類例は兵庫・正法寺山出土例等がわずかに知られるのみである。正法寺山例は金箔を押しているが、本例にはその形跡はない。しかしながら、同氾の可能性を含め、質の高さと、同種の意匠が広く伝播していたことを示すものとして、この発見の意義は大きい。

cの高欄部分は8点の破片がある。現在までの出土例には見られない形態の特色を有しており、「卍崩し」の組子を意匠としたものと考えられる。古代建築の高欄は、通常束柱と三条の横材（架木・平桁・地覆）から成り、最上の架木と平桁の間は開放とし、平桁と地覆の間に横連子や、まれにある「卍崩し」の組子をいれる。破片には、平桁・地覆間にさらに二条の横材と、それらをつなぐ縦材とがみとめられ、「卍崩しの」組子を表わそうとしたものである可能性が高い。

第1図は、高欄の断片を、卍崩しのパターンに模式的に当てはめ、復元したものである。6や7のように遊離した角部分があるのがこの意匠に特徴的である。ただし接続の痕跡はかならずしもパターンと完全には一致せず、また、1には平桁と地覆との間に材の取りついた痕跡がないので、異なった2種のものがあるとも考えられる。また、卍崩しの組子を構成する断片の大きさがまちまちで、さらに複数の個体があった可能性もあるが、製品の性格からいって、仮に一個体の各面を取ってもさほど正確に寸法が一定していたとは思われず、また焼きひずみも当然有り得るので、この点の解明には断片数が不足しているとしておかざるを得ない。しかしこの種のものとしては規模も比較的大きく、架木を支える部分には、斗の表現もわずかながら識別される



第1図　高欄復元模式図

など、表現もある程度の精度を持つものであると推察される。ただすでに述べたように、「卍崩し」の意匠そのものが正確に写しきれていないのは、制作工人の認識の限界であり、止むを得ないところであろう。

高欄の位置を復元する手がかりはないが、瀬後谷・菖蒲沢出土例では屋蓋上内側、台輪状の造り出し部分に装着の痕跡が残り、本例もそれと同様、実際の塔のように初重を除く各重の軸部をめぐるように置かれたものと推定するのが自然である。ただし、建物にではなく、基壇に高欄が着く可能性も有り得るのではないか、という私見も提出しておきたい。土製瓦塔基壇の出土例は瀬後谷遺跡にあるのみであるが、断片では壁体と粉らわしく、他にも有り得たであろう。また、堂内に置かれたであろうその調度的な規模からすると、高欄は基壇にあってこそふさわしいものとも考えられる。

さて、瓦塔の表現は時代とともに変化し、地域差も大きいことがすでに指摘されているが（注１）、高欄を持つものとしては、名古屋市NN286号窯跡（猿投古窯跡群）、木津町瀬後谷遺跡、塩尻市菖蒲沢窯跡と発見が相次ぎ、本例を加えて中部から北陸にかけての地域圏が浮かび上がって来た。しかし奈良市薬師寺出土の二彩高欄の存在（瓦塔とは特定できない）や、仏像が共通する三木市正法寺山出土の例を考慮すると、これはやはり畿内・播磨等仏教先進地の周辺の影響圏とみるべきかも知れない。いずれにせよ、高欄さらにはその組子までを表現していることは、瓦塔がかなり実物を指向していることの一つの証しであろう。参考として朝鮮半島における、工芸品に卍崩し高欄を用いた一例を挙げる（第２図）。統一新羅時代の遺品で、塼積の塔内に納入された仏舎利の荘厳具である。この場合は金銅製なので、切り抜きによって比較的容易に成形がなされたと思われるが、土製品でこの意匠を再現した背景には、かなりの恣意が働いたと考えられるべきである。

最後に、「卍崩し」の意匠と年代の問題であるが、現存建築遺構では、たしかに法隆寺・法起寺の「飛鳥様式」にのみ見られるものである。しかし、一方では東大寺法華堂本尊（天平時代）の台座の高欄にも用いられており（第３図）、必ずしも飛鳥時代の意匠と限定することはできない。むしろこの意匠が時間的にある程度長く、また地域的にも広く用いられ、瓦塔への採用はそれを反映したものと見るべきであろう。

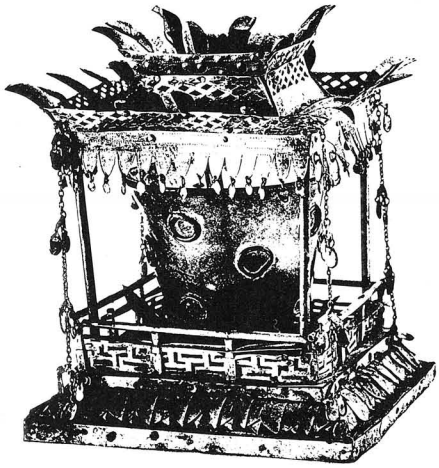
注及び参考文献

（注１）　高崎光司　「瓦塔小考」『考古学雑誌』74巻３号（1989）

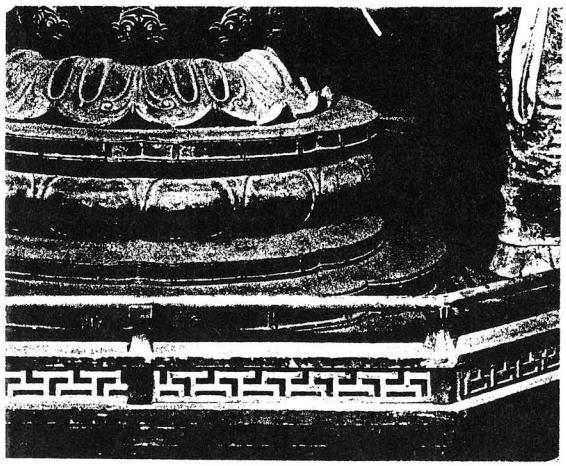
第１図　高欄復元図　架木　平桁　地覆

第２図　東大寺法華堂本尊台座高欄

第３図　松林寺五層塼塔内舎利荘厳具　Ｈ：14.2、Ｗ：12.7㎝、統一新羅時代（ソウル国立中央博物館）



第２図　松林寺五層塼内舎利装厳具
Ｈ：14.2㎝、Ｗ：12.7㎝、統一新組時代
（ソウル国立中央博物館）



第３図　東大寺法華堂本尊
台座高欄

4　石名田木舟遺跡出土奈良三彩分析結果
X線マイクロアナライザー付走査型電子顕微鏡分析結果

国立歴史民俗博物館　斎藤　努
東京学芸大学大学院　山本　さぎり

1　分析法

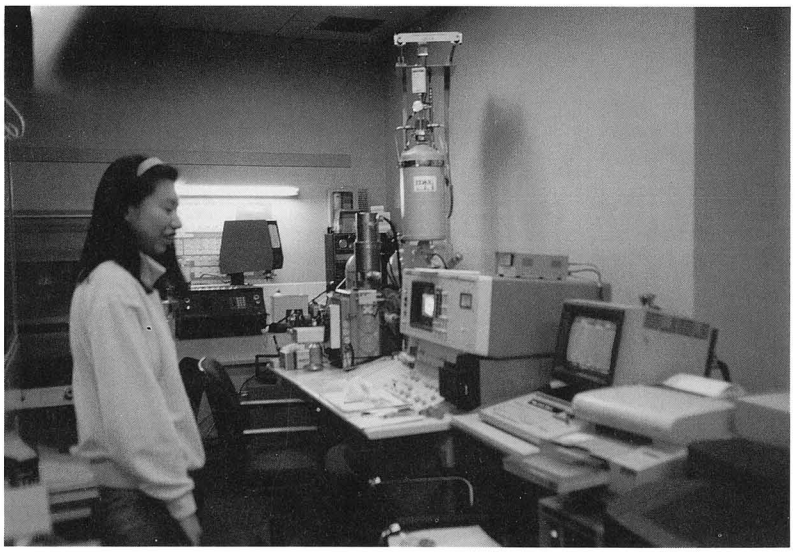
導電性カーボンテープに微少量の試料粉末を付着させ、国立歴史民俗博物館設置のX線マイクロアナライザー付走査型電子顕微鏡(SEM－EDS) を用いて主成分元素の迅速定量分析を行った。使用した装置は、日本電子製JSM－820およびPhilips製PV9550である。走査型電子顕微鏡の倍率を数十倍～100倍程度に設定し、観察視野内にある試料粉末に電子線を照射し、試料から出てくる特性X線をX線マイクロアナライザーで検出する。この特性X線に対して補正計算を行うことで元素の濃度が算出され、観察視野内の平均組成を得る。

電子線の加速電圧は20kvに設定し、特性X線の積算時間を100 ℓsec.にして測定を行った。

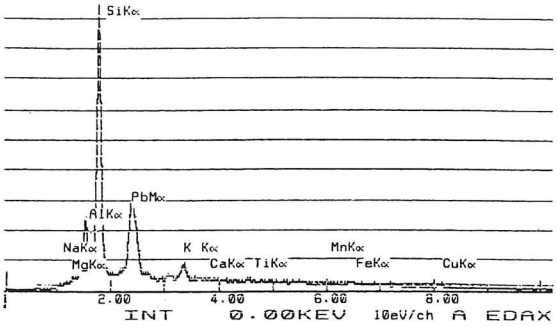
2　石名田木舟遺跡出土奈良三彩分析結果

	資料番号		Na_2O	MgO	Al_2O_3	SiO_2	K_2O	CaO	TiO_2	MnO	Fe_2O_3	PbO	CuO	P_2O_5
分析資料１	釉薬	緑	0.0	0.0	12.2	54.7	2.1	0.0	0.0	0.0	0.3	30.2	0.5	
第５図５：火舎獣脚		白	0.0	0.0	15.9	56.8	2.7	0.3	1.1	0.0	1.7	21.5		
	胎土		0.1	0.1	26.6	63.8	4.0	0.6	1.5	0.2	3.2			
分析資料２	釉薬	緑	0.0	0.0	11.1	51.5	1.2	0.2	0.3	0.0	2.2	33.0	0.5	
第５図４：水瓶		茶	0.9	0.7	22.6	53.3	4.4	1.8	1.3	0.7	14.4			
	胎土		0.0	0.0	26.1	65.4	3.5	0.0	1.3	0.0	3.7			
分析資料３	灰釉		0.6	2.4	15.7	51.2	2.9	22.3	0.9	0.6	3.4			
図版９の３：合子	胎土		0.4	1.1	23.4	62.9	3.4	1.0	1.3	0.0	6.6			
分析資料４	灰釉		0.5	4.2	22.9	40.8	3.2	1.5	3.5	0.4	23.1			
図版11の６：壺	胎土		0.0	1.1	26.6	59.5	4.1	0.9	0.9	0.0	6.8			
分析資料５	熔融物		0.0	0.3	37.9	21.7	0.4	5.8	2.5	0.2	3.5			27.9
図版11の12：坩堝蓋	胎土		0.5	1.6	22.8	62.0	4.0	1.3	1.0	0.1	6.8			

分析結果１　分析資料１～５



10-MAR-95 09:49:21 QUANTITATIVE
RATE= 1355CPS TIME= 100LSEC
FS= 3406CNT PRST= 100LSEC
A =Kibune No.1 950309



Kibune Ryokuyuu 950309
"O " STOICHIOMETRY
VALENCE RATIO(NA)= 0.5
VALENCE RATIO(MG)= 1.0
VALENCE RATIO(AL)= 1.5
VALENCE RATIO(SI)= 2.0
VALENCE RATIO(PB)= 1.0
VALENCE RATIO(K)= 0.5
VALENCE RATIO(CA)= 1.0
VALENCE RATIO(TI)= 2.0
VALENCE RATIO(MN)= 1.0
VALENCE RATIO(FE)= 1.5
VALENCE RATIO(CU)= 1.0
KV=20.0 TILT= 0.0 TKOFF=40.0
BKG PT1= 3.0 BKG PT2=13.0
NOST
09-MAR-95

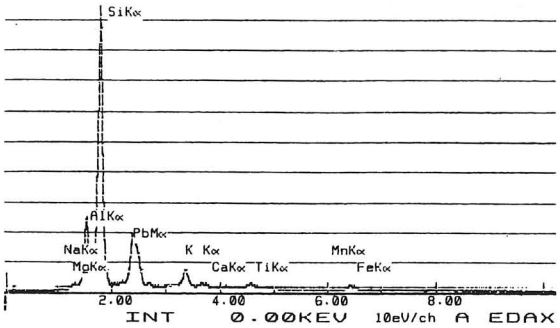
CONCENTRATION

	WT.%	AT.%	"O ".%	%S.E.
NAK	0.00	0.00	0.00	0.00
MGK	0.00	0.00	0.00	0.00
ALK	6.46	6.49	12.21	2.08
SIK	25.57	24.68	54.70	0.69
PBM	28.04	3.67	30.20	1.53
K K	1.71	1.18	2.06	5.27
CAK	0.00	0.00	0.00	0.00
TIK	0.00	0.00	0.00	0.00
MNK	0.00	0.00	0.00	0.00
FEK	0.20	0.10	0.29	52.25
CUK	0.43	0.19	0.54	34.64
O	37.59	63.69		

	100.00			

1

09-MAR-95 18:03:02 QUANTITATIVE
RATE= 440CPS TIME= 100LSEC
FS= 6755CNT PRST= 100LSEC
A =Kibune No.1 950309



Kibune No.1 950309
"O " STOICHIOMETRY
VALENCE RATIO(NA)= 0.5
VALENCE RATIO(MG)= 1.0
VALENCE RATIO(AL)= 1.5
VALENCE RATIO(SI)= 2.0
VALENCE RATIO(PB)= 1.0
VALENCE RATIO(K)= 0.5
VALENCE RATIO(CA)= 1.0
VALENCE RATIO(TI)= 2.0
VALENCE RATIO(MN)= 1.0
VALENCE RATIO(FE)= 1.5
KV=20.0 TILT= 0.0 TKOFF=40.0
BKG PT1= 3.1 BKG PT2=14.0
NOST
09-MAR-95

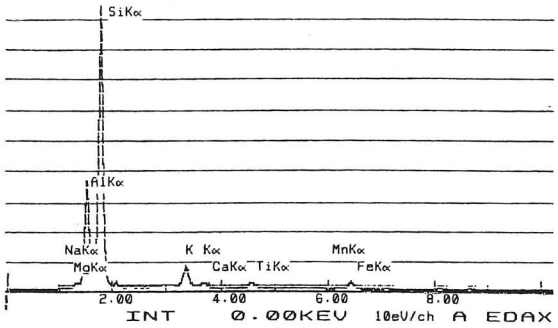
CONCENTRATION

	WT.%	AT.%	"O ".%	%S.E.
NAK	0.00	0.00	0.00	0.00
MGK	0.00	0.00	0.00	0.00
ALK	8.44	7.82	15.94	1.03
SIK	26.57	23.64	56.84	0.45
PBM	19.94	2.41	21.48	1.25
K K	2.25	1.44	2.71	2.36
CAK	0.22	0.13	0.30	18.74
TIK	0.64	0.33	1.07	7.79
MNK	0.00	0.00	0.00	0.00
FEK	1.16	0.52	1.66	5.62
O	40.79	63.71		

	100.00			

2

09-MAR-95 17:15:30 QUANTITATIVE
RATE= 421CPS TIME= 100LSEC
FS= 8321CNT PRST= 100LSEC
A =Kibune No.1 950309



Kibune No.1 950309
"O " STOICHIOMETRY
VALENCE RATIO(NA)= 0.5
VALENCE RATIO(MG)= 1.0
VALENCE RATIO(AL)= 1.5
VALENCE RATIO(SI)= 2.0
VALENCE RATIO(K)= 0.5
VALENCE RATIO(CA)= 1.0
VALENCE RATIO(TI)= 2.0
VALENCE RATIO(MN)= 1.0
VALENCE RATIO(FE)= 1.5
KV=20.0 TILT= 0.0 TKOFF=40.0
BKG PT1= 3.0 BKG PT2=14.0
NOST
09-MAR-95

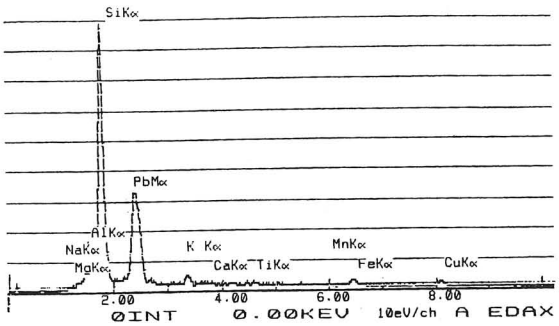
CONCENTRATION

	WT.%	AT.%	"O ".%	%S.E.
NAK	0.04	0.04	0.05	245.66
MGK	0.06	0.05	0.09	98.57
ALK	14.08	10.85	26.60	0.67
SIK	29.83	22.09	63.81	0.40
K K	3.30	1.76	3.98	1.57
CAK	0.40	0.21	0.56	8.84
TIK	0.92	0.40	1.54	4.74
MNK	0.12	0.05	0.16	35.98
FEK	2.25	0.84	3.21	2.92
O	49.01	63.72		

	100.00			

3

EDAX READY
RATE= 219CPS TIME= 100LSEC
FS= 4869CNT PRST= 100LSEC
A =Kibune No.2 950309



Kibune No.2 950309
"O " STOICHIOMETRY
VALENCE RATIO(NA)= 0.5
VALENCE RATIO(MG)= 1.0
VALENCE RATIO(AL)= 1.5
VALENCE RATIO(SI)= 2.0
VALENCE RATIO(PB)= 1.0
VALENCE RATIO(K)= 0.5
VALENCE RATIO(CA)= 1.0
VALENCE RATIO(TI)= 2.0
VALENCE RATIO(MN)= 1.0
VALENCE RATIO(FE)= 1.5
VALENCE RATIO(CU)= 1.0
KV=20.0 TILT= 0.0 TKOFF=40.0
BKG PT1= 3.1 BKG PT2=14.0
NOST
09-MAR-95

CONCENTRATION

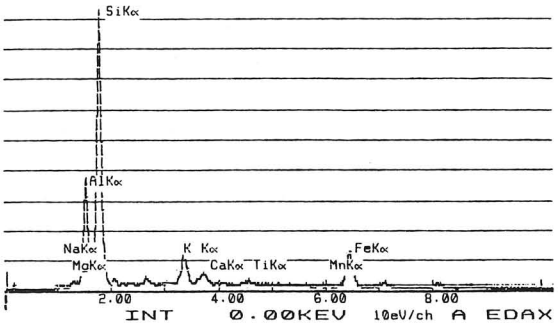
	WT.%	AT.%	"O ".%	%S.E.
NAK	0.00	0.00	0.00	0.00
MGK	0.00	0.00	0.00	0.00
ALK	5.85	6.11	11.05	2.01
SIK	24.06	24.16	51.51	0.65
PBM	30.67	4.17	33.04	1.27
K K	1.03	0.74	1.24	7.33
CAK	0.11	0.08	0.15	62.63
TIK	0.16	0.10	0.27	48.61
MNK	0.00	0.00	0.00	0.00
FEK	1.56	0.79	2.23	6.61
CUK	0.41	0.16	0.51	33.50
O	36.14	63.67		

	100.00			

4

分析結果２　分析資料１：１～３　分析資料２：３

09-MAR-95 16:09:43 QUANTITATIVE
RATE= 1863CPS TIME= 100LSEC
FS= 5172/ 5172 PRST= 100LSEC
A =Kibune No.2 950309



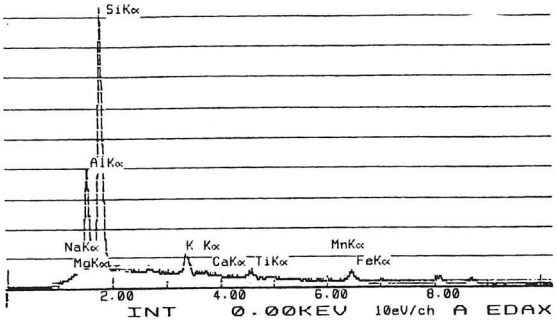
Kibune No.2 950309
"O " STOICHIOMETRY
VALENCE RATIO(NA)= 0.5
VALENCE RATIO(MG)= 1.0
VALENCE RATIO(AL)= 1.5
VALENCE RATIO(SI)= 2.0
VALENCE RATIO(K)= 0.5
VALENCE RATIO(CA)= 1.0
VALENCE RATIO(TI)= 2.0
VALENCE RATIO(MN)= 1.0
VALENCE RATIO(FE)= 1.5
KV=20.0 TILT= 0.0 TKOFF=40.0
BKG PT1= 3.0 BKG PT2=14.0
NOST
09-MAR-95

CONCENTRATION

	WT.%	AT.%	"O ".%	%S.E.
NAK	0.67	0.64	0.91	18.84
MGK	0.42	0.38	0.69	16.93
ALK	11.97	9.71	22.61	0.87
SIK	24.89	19.40	53.26	0.51
K K	3.66	2.05	4.40	1.64
CAK	1.27	0.69	1.77	3.70
TIK	0.79	0.36	1.32	6.19
MNK	0.50	0.20	0.65	11.43
FEK	10.06	3.95	14.39	1.23
O	45.77	62.63		
	100.00			

5

09-MAR-95 17:25:02 QUANTITATIVE
RATE= 660CPS TIME= 100LSEC
FS= 5009CNT PRST= 100LSEC
A =Kibune No.2 950309



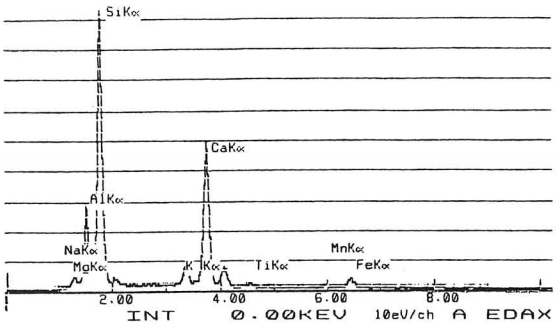
Kibune No.2 950309
"O " STOICHIOMETRY
VALENCE RATIO(NA)= 0.5
VALENCE RATIO(MG)= 1.0
VALENCE RATIO(AL)= 1.5
VALENCE RATIO(SI)= 2.0
VALENCE RATIO(K)= 0.5
VALENCE RATIO(CA)= 1.0
VALENCE RATIO(TI)= 2.0
VALENCE RATIO(MN)= 1.0
VALENCE RATIO(FE)= 1.5
KV=20.0 TILT= 0.0 TKOFF=40.0
BKG PT1= 2.2 BKG PT2=14.0
NOST
09-MAR-95

CONCENTRATION

	WT.%	AT.%	"O ".%	%S.E.
NAK	0.00	0.00	0.00	0.00
MGK	0.00	0.00	0.00	0.00
ALK	13.84	10.63	26.14	1.10
SIK	30.57	22.57	65.41	0.57
K K	2.93	1.55	3.53	3.35
CAK	0.00	0.00	0.00	0.00
TIK	0.76	0.33	1.26	13.22
MNK	0.00	0.00	0.00	0.00
FEK	2.56	0.95	3.66	5.31
O	49.34	63.96		
	100.00			

6

09-MAR-95 16:57:28 QUANTITATIVE
RATE= 0CPS TIME= 100LSEC
FS= 6082CNT PRST= 100LSEC
A =Kibune No.3 950309



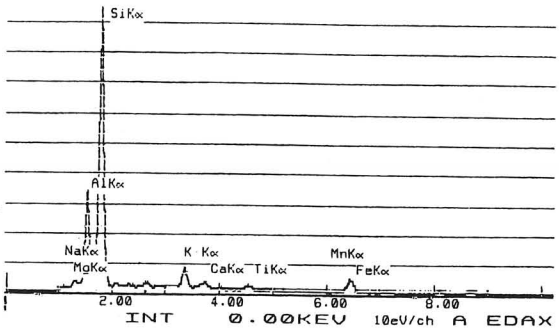
CONCENTRATION

	WT.%	AT.%	"O ".%	%S.E.
NAK	0.42	0.40	0.56	25.13
MGK	1.47	1.34	2.44	4.68
ALK	8.31	6.82	15.70	0.98
SIK	23.94	18.86	51.22	0.47
K K	2.38	1.35	2.87	1.92
CAK	15.94	8.80	22.30	0.60
TIK	0.51	0.24	0.85	8.10
MNK	0.48	0.19	0.62	10.13
FEK	2.40	0.95	3.43	2.85
O	44.14	61.05		
	100.00			

Kibune No.3 950309
"O " STOICHIOMETRY
VALENCE RATIO(NA)= 0.5
VALENCE RATIO(MG)= 1.0
VALENCE RATIO(AL)= 1.5
VALENCE RATIO(SI)= 2.0
VALENCE RATIO(K)= 0.5
VALENCE RATIO(CA)= 1.0
VALENCE RATIO(TI)= 2.0
VALENCE RATIO(MN)= 1.0
VALENCE RATIO(FE)= 1.5
KV=20.0 TILT= 0.0 TKOFF=40.0
BKG PT1= 3.0 BKG PT2=14.0
NOST
09-MAR-95

7

09-MAR-95 17:35:09 QUANTITATIVE
RATE= 389CPS TIME= 100LSEC
FS= 7804CNT PRST= 100LSEC
A =Kibune No.3 950309



Kibune No.3 950309
"O " STOICHIOMETRY
VALENCE RATIO(NA)= 0.5
VALENCE RATIO(MG)= 1.0
VALENCE RATIO(AL)= 1.5
VALENCE RATIO(SI)= 2.0
VALENCE RATIO(K)= 0.5
VALENCE RATIO(CA)= 1.0
VALENCE RATIO(TI)= 2.0
VALENCE RATIO(MN)= 1.0
VALENCE RATIO(FE)= 1.5
KV=20.0 TILT= 0.0 TKOFF=40.0
BKG PT1= 3.1 BKG PT2=14.0
NOST
09-MAR-95

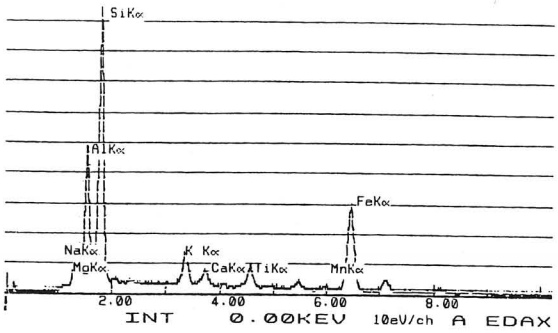
CONCENTRATION

	WT.%	AT.%	"O ".%	%S.E.
NAK	0.30	0.28	0.41	40.43
MGK	0.69	0.60	1.14	10.55
ALK	12.36	9.63	23.36	0.78
SIK	29.41	22.00	62.91	0.42
K K	2.81	1.51	3.39	1.93
CAK	0.71	0.37	0.99	6.06
TIK	0.75	0.33	1.25	6.63
MNK	0.00	0.00	0.00	0.00
FEK	4.59	1.73	6.56	1.94
O	48.39	63.56		
	100.00			

8

分析結果3 分析資料2：5・6 分析資料3：7・8

09-MAR-95 16:20:13 QUANTITATIVE
RATE= 0CPS TIME= 100LSEC
FS= 4380CNT PRST= 100LSEC
A =Kibune No.4 950309



Kibune No.4 950309
"O " STOICHIOMETRY
VALENCE RATIO(NA)= 0.5
VALENCE RATIO(MG)= 1.0
VALENCE RATIO(AL)= 1.5
VALENCE RATIO(SI)= 2.0
VALENCE RATIO(K)= 0.5
VALENCE RATIO(CA)= 1.0
VALENCE RATIO(TI)= 2.0
VALENCE RATIO(MN)= 1.0
VALENCE RATIO(FE)= 1.5
KV=20.0 TILT= 0.0 TKOFF=40.0
BKG PT1= 2.4 BKG PT2=14.0
NOST
09-MAR-95

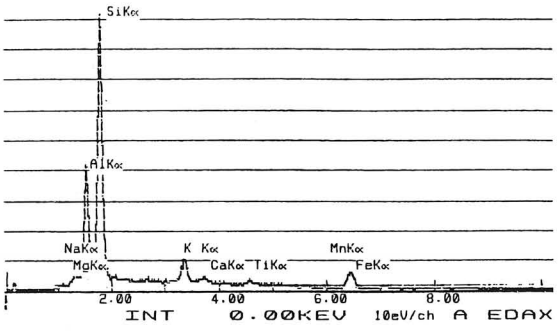
CONCENTRATION

	WT.%	AT.%	"O ".%	%S.E.
NAK	0.35	0.35	0.48	34.91
MGK	2.52	2.35	4.18	3.36
ALK	12.11	10.18	22.88	0.82
SIK	19.07	15.40	40.79	0.57
K K	2.65	1.54	3.19	1.87
CAK	1.05	0.60	1.47	3.87
TIK	2.10	0.99	3.51	2.54
MNK	0.31	0.13	0.40	16.25
FEK	16.15	6.56	23.09	0.84
O	43.68	61.91		

	100.00			

9

09-MAR-95 17:42:35 QUANTITATIVE
RATE= 0CPS TIME= 100LSEC
FS= 4801CNT PRST= 100LSEC
A =Kibune No.4 950309



Kibune No.4 950309
"O " STOICHIOMETRY
VALENCE RATIO(NA)= 0.5
VALENCE RATIO(MG)= 1.0
VALENCE RATIO(AL)= 1.5
VALENCE RATIO(SI)= 2.0
VALENCE RATIO(K)= 0.5
VALENCE RATIO(CA)= 1.0
VALENCE RATIO(TI)= 2.0
VALENCE RATIO(MN)= 1.0
VALENCE RATIO(FE)= 1.5
KV=20.0 TILT= 0.0 TKOFF=40.0
BKG PT1= 3.1 BKG PT2=14.0
NOST
09-MAR-95

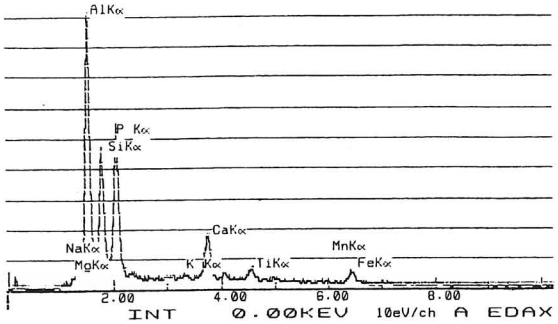
CONCENTRATION

	WT.%	AT.%	"O ".%	%S.E.
NAK	0.00	0.00	0.00	0.00
MGK	0.67	0.58	1.11	14.96
ALK	14.10	11.01	26.63	0.91
SIK	27.81	20.87	59.49	0.55
K K	3.43	1.85	4.13	2.18
CAK	0.67	0.35	0.94	8.70
TIK	0.55	0.24	0.91	12.06
MNK	0.00	0.00	0.00	0.00
FEK	4.75	1.79	6.79	2.45
O	48.03	63.30		

	100.00			

10

09-MAR-95 18:20:41 QUANTITATIVE
RATE= 63CPS TIME= 100LSEC
FS= 2152CNT PRST= 100LSEC
A =Kibune rutsubo-futa 950309



Kibune rutsubo-futa 950309
"O " STOICHIOMETRY
VALENCE RATIO(NA)= 0.5
VALENCE RATIO(MG)= 1.0
VALENCE RATIO(AL)= 1.5
VALENCE RATIO(SI)= 2.0
VALENCE RATIO(P)= 2.5
VALENCE RATIO(K)= 0.5
VALENCE RATIO(CA)= 1.0
VALENCE RATIO(TI)= 2.0
VALENCE RATIO(MN)= 1.0
VALENCE RATIO(FE)= 1.5
KV=20.0 TILT= 0.0 TKOFF=40.0
BKG PT1= 3.0 BKG PT2=14.0
NOST
09-MAR-95

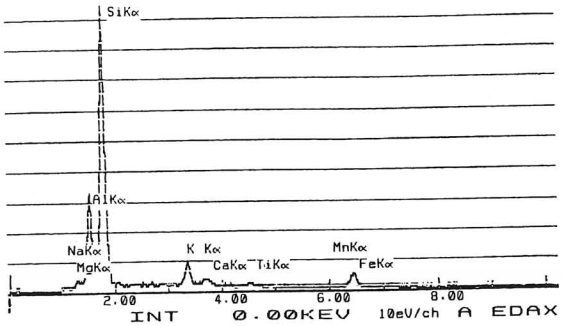
CONCENTRATION

	WT.%	AT.%	"O ".%	%S.E.
NAK	0.00	0.00	0.00	0.00
MGK	0.19	0.16	0.31	55.30
ALK	20.04	15.62	37.86	0.84
SIK	10.15	7.60	21.71	1.28
P K	12.15	8.25	27.85	1.13
K K	0.29	0.15	0.35	21.33
CAK	4.11	2.16	5.75	2.17
TIK	1.48	0.65	2.47	5.64
MNK	0.17	0.07	0.22	50.47
FEK	2.44	0.92	3.48	4.74
O	48.99	64.41		

	100.00			

11

09-MAR-95 18:29:19 QUANTITATIVE
RATE= 0CPS TIME= 100LSEC
FS= 6131CNT PRST= 100LSEC
A =Kibune rutsubo-futa 950309



Kibune rutsubo-futa 950309
"O " STOICHIOMETRY
VALENCE RATIO(NA)= 0.5
VALENCE RATIO(MG)= 1.0
VALENCE RATIO(AL)= 1.5
VALENCE RATIO(SI)= 2.0
VALENCE RATIO(K)= 0.5
VALENCE RATIO(CA)= 1.0
VALENCE RATIO(TI)= 2.0
VALENCE RATIO(MN)= 1.0
VALENCE RATIO(FE)= 1.5
KV=20.0 TILT= 0.0 TKOFF=40.0
BKG PT1= 3.0 BKG PT2=14.0
NOST
09-MAR-95

CONCENTRATION

	WT.%	AT.%	"O ".%	%S.E.
NAK	0.40	0.36	0.54	32.24
MGK	0.94	0.81	1.55	8.34
ALK	12.05	9.42	22.77	0.87
SIK	28.97	21.76	61.98	0.47
K K	3.31	1.79	3.99	1.84
CAK	0.94	0.49	1.31	5.03
TIK	0.59	0.26	0.98	8.60
MNK	0.06	0.02	0.08	85.91
FEK	4.75	1.79	6.79	2.04
O	47.99	63.28		

	100.00			

12

分析結果４　分析資料４：９・10　分析資料５：11・12

5　石名田木舟遺跡地震跡

通産省工業技術院地質調査所
寒　川　　旭

1　地震考古学とは

遺跡の発掘調査は、私達の祖先の暮らしぶりや生活環境を復元するために行われる。だから、人間の生活にかかわる様々なものが顔を出すはずである。過去の地震も例外ではない。そして、運よく地震の痕跡が発見されると、考古学の遺構や遺物との前後関係から、痕跡をもたらした地震の年代を限定することができる。

日本の場合、地震に関する膨大な資料が年代順に集められているから、資料の記述と対比することによって、地震跡形成の年月日と時刻をさぐりあてることも可能である。

勿論、他の遺構と同じように、地震の痕跡を立体的に掘削して詳しく観察することができる。さらに、地震に伴う被害やその後の生活の変化など、多方面にわたって検討することもできる。

このような観点から、遺跡で見出される地震の痕跡を総合的に研究する分野である「地震考古学」が誕生した。地震の予知だけでなく、歴史の中で地震を位置づけるユニークな研究でもある。1）

2　液状化現象とは

遺跡で最もよく検出されるのは液状化現象の痕跡である。この現象は、地表からさほど深くない所にゆる詰まりの砂（礫）が堆積し、地下水で満たされている状態で次のような過程を経て発生する。

地下の砂粒は、通常は、お互いに支えあって安定している。そこへ、激しい地震動が加わると支えがはずれ、それぞれの粒子がすき間を小さくしてより安定するように移動する。このため、すき間を満たしている地下水が圧迫されて水圧が急上昇する。やがて、水圧の高まった水が砂粒や周囲からの土圧を支えるようになり、地層全体が液体の性質を持つようになる（液状化)。さらに、水・砂が上位にある地層を引き裂きながら「噴砂」として上昇することになる。

この現象は、近代都市の諸機能に著しい被害を与え、防災上注目されている。また、液状化現象の存在を確認することは、過去に震度Ⅴ以上の激しい地震動が存在したことを証明することにもなる。

3　遺跡で見られる液状化の痕跡

図1は遺跡で検出される液状化跡を模式化したものである。2）

ａは、地震当時の地表面に噴き出して広がった（噴砂）がよく残っているもの。溝・住居跡・水田などのくぼみによく見られる。噴砂の直下には地震直前の地面が保存されている。

ｂは噴砂が浸食されて残っていないもの。噴砂は降雨などですぐ消失するので、多くの場合、bのような形で見出される。

地震の発生した年代は、ａ・ｂ共にⅡ層堆積後でⅠ層堆積前に限定される。また、bのように遺構の埋土を引き裂いていれば、この遺構が埋まってからの地震とわかる。この場所で激しい地震をおこした古文書の記録があれば、地震の年月日や時刻までわかることがある。

ａ・ｂのように砂のつまった割れ目を砂脈という。この砂脈が地震当時の地震面まで達しなかったものがｃ・ｄである。砂脈が地表まで達したかどうか判定することが、地震の時期を決める場合、特に重要になる。

液状化した地層の動きは、Ⅲ層のなかで観察できる。地下水を砂が混じりあって激しく流れ動いた場所では、奇妙な構造(模様)が残っている。地層の一部が、大きくかきまぜられたような擾乱構造、砂の筋が上へむかって細くのびる柱状構造、いくつものⅢを横にならべたようなⅢ状構造、すべて水と砂が激しく流動したことを示す構造である。

一連の砂層や礫層であっても、液状化現象によって、全体がおなじように乱れるのではない。地層の一部が激しく乱

されていても、他のところでは、堆積したままの構造がそのまま残っていることが多い。Ⅲ層下部には堆積当時の構造がよく残っているが、上部ではこれが消えて新しく液状化に特有な構造がみられる。地震動の強さや地質的な条件が微妙に影響しあって地層の乱れかたがきまる。

4　石名田木舟遺跡の液状化跡

(1)　平面形

1994年度の発掘調査では、東西方向に平行する２列の砂脈群が検出された(図２)。本稿では、それぞれの砂脈をａ・ｂ・ｃと名付けて記載を行う。

ａは東西から西北西－東南東方向にゆるやかな曲線を描きながら、約2.2mの長さでのびている。砂脈の幅は最大５㎝で、内部は混入物の無い細砂粒で構成されているが、砂脈の西端では粒径が小さくなり、極細粒砂で構成されるようになる。また、一部でシルトの小ブロックを取り込んでいる。

ｂは、ａの西端から北西40㎝の位置を起点として検出される。そして、東西から西南西－東北東に向かってゆるやかな曲線を描きながら、少なくとも1.2m以上の長さでのびている。途中で土器とぶつかり、これを避けるように「くの字」に折れ曲がっている。砂脈の内部は細～極細砂脈で構成されている。

ｃはａの1.6m南に平行している。概ね東西にのびる線上に発達しており、厳密には８本の砂脈（ｃ１～ｃ８）から構成される砂脈群である。この砂脈群全体の長さは、3.6m以上で、個々の砂脈の長さは、最も短いものが8cm、最も長いものが1.3m以上である。砂脈内は粗粒砂で構成されているが、ｃ２の内部には長径８㎜の礫がみられる。

(2)　断面形

砂脈ｂの西端において断面形を観察した（図３)。

本稿では、説明の便宜上、地層を上位から７区分した。これによると、厚さ38㎝の盛土層（Ⅰ層)、厚さ８㎝の灰褐色シルト層（Ⅱ層)、厚さ２㎝の黄褐色シルト層（Ⅲ層)、厚さ28㎝の濃褐色シルト層（Ⅳ層)、厚さ23㎝の極細粒～細粒砂層（Ⅴ層)、厚さ15㎝の細～中粒砂層（Ⅵ層)、厚さ5㎝以上の砂礫層（Ⅶ層)となる。

砂脈ｂは幅４㎝で、内部はⅥ層より供給された細～中粒砂で満たされている。また、砂脈の上部では細粒砂の比率が多くなり、Ⅳ層由来のシルトの小ブロックが多く認められる。

砂脈はⅡ～Ⅴ層を引き裂いているが、Ⅰ層堆積前に上端を浸食されている。このため、Ⅵ層の液状化をもたらした地震は、Ⅱ層堆積後でⅠ層堆積前に発生したことがわかる。

この他、Ⅴ層の上端から2本の砂脈が上昇している（ｂ１・ｂ２とする）が、ｂ１はⅡ層内で、ｂ２はⅣ層内で途切れている。共に、当時の地層面まで達しなかったものと思える。

また、Ⅶ層は最大径10㎝の亜円礫で構成される（地層全体の１～２割程度の比率で粗粒砂もみられる）が、その上端に図１で示した柱状構造が認められる。このため、Ⅶ層内でも液状化が発生し、比較的軽い粗粒砂がわずかに上昇したものと思える。

この図からは、Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ層の液状化が確認できるが、最も激しい液状化はⅥ層で生じている。

砂脈群ｃの西端においても断面形を観察した（図４)。

この図では、地層を上位から5区分した。これによると、厚さ65㎝の盛土層(Ⅰ´層)、厚さ25㎝の濃灰褐色シルト層(Ⅳ´層)、厚さ30㎝の細粒砂層（Ⅴ´層)、厚さ９㎝の粗粒砂層（Ⅵ´層)、厚さ10㎝以上の砂礫層（Ⅶ'層）となる。

砂脈は幅２㎝で、Ⅵ´層より供給された粗粒砂で構成されていた。また、砂脈はⅣ´・Ⅴ´両層を引き裂き、Ⅰ´層には上端を削られていた。ここでは、Ⅵ´層で液状化が生じて噴砂を発生させたことになる。

図５は液状化した砂の粒径加積曲線である。これによると、いづれも特に液状化しやすい粒度組成を示すことがわかる。

(3)　地震の時期

図３・４において、Ⅱ～Ⅳ層とⅣ´層に古代及び中世の遺物が含まれている。砂脈がこれらを引き裂くことより、地震の発生した年代は室町時代以降に限定できる。

考古学的に求められた地震跡の形成時期の範囲で、この地域に激しい地震動をもたらしたことが確実な大地震が2つある。1586（天正13）年１月18日の天正地震と、1858年４月６日の飛越地震である。３）

天正地震は、岐阜県から富山県にかけて北北西－南南東方向にのびる阿寺断層系と御母衣断層系などの活動によって生じた大型の地震で、中部地域の西部や近畿地域の東部で激しい被害が生じている。

特に、岐阜県大野郡白川村に存在した帰雲城が、裏山（帰雲山）の地滑りによって襲いかかった土石流にのまれ、城下町もろとも一瞬にして地上から姿を消した事件は、当時の人々に大きな衝撃を与えた。

富山県の福岡町と小矢部市の境界付近には前田秀継の居城（木舟城）を中心に城下町が発達していた。しかし、「地震ありて貴舟の城をゆり崩、右近の子息又次郎に住す（『富樫家々譜』）」、「木舟の城を三丈ばかりゆりしづめたり、家たふるる事数しらず（『三壺聞記』）」という記録のように、この地震による被害のため、城は壊れ、城下の人々も小矢部市の今石動や高岡市の木舟などへと移転した。

1993年に富山県文化振興財団が調査を行った福岡町の開発大滝遺跡では、木舟城に関わる鍛冶関連遺構が顔をのぞかせ、木舟城下町の存在と地震に伴う移転が具体的な形で検証された。ここでは、天正地震によると考えられる砂脈も検出されている。４）

婦中町の友坂遺跡では、古代の遺構を引き裂きながら北東－南西方向にのびる砂脈(最大幅15cm)が多く検出された。近世の遺構・包含層に先端を削られているので、1586年の地震に伴う痕跡の可能性が強い。５）

1858年の地震は、岐阜県の北部から富山県の南東部にかけて東北東－西南西方向にのびる跡津川断層の活動によって生じたものである。

地震と共に、断層の東端付近にある大鳶山と小鳶山が崩れ、常願寺川の上流を塞き止めた。二週間後から二回にわたる決潰が生じ、川沿いの村々は泥洪水に襲われることになった。

地震に伴う液状化現象の記録は富山平野一帯にみられ、高岡市でも「河原町はことの外大きく、その上、地面が所々割れ、そこから水と砂を吹き出した（『木町委細帳』）」、小矢部市の今石動でも、「家十五軒斗つぶれ（中略）町中割れ、其中より水をふき出し申候（『諸品吉凶異変公事自他雑記』）」と書かれている。

前述の開発大滝遺跡では、16世紀頃の遺構とその埋土を引き裂く、多くの砂脈が検出され、この地震の産物と考えられる。

この他、1799年6月29日に、金沢市街地を襲う激しい地震（金沢地震）が発生した。１）３）６）
金沢市の普正寺高畠遺跡では、この地震に伴う液状化の痕跡が見出だされている。1)しかし、「今度之地震(中略)倶利伽羅峠を越えて越中は軽し（『北国地震記』）」の記述のように、富山平野では震度がかなり小さくなっているようである。

このような状況から、石名田木舟遺跡で検出された液状化跡は、1586年の天正地震又は1858年の飛越地震のいずれかによって形成されたものと考えられる。

本稿をまとめるに当たり、富山県埋蔵文化財センターの斎藤　隆氏・橋本正春氏には多くの御教示を頂きました。また、福岡町教育委員会の藤田辰昭氏には有益な御助力を頂きました。心から感謝いたします。

注及び参考文献

1） 寒川　旭 （1992）「地震考古学－遺跡が語る地震の歴史－」 中公新書

2） 田中　琢・佐原　真 （1994）「発掘を科学する」 岩波新書

3） 宇佐見龍夫 （1987）「新編　日本被害地震総覧」 東京大学出版会

文部省震災予防評議会編 （1941） 「増訂　大日本地震史料　第一巻」 鳴鳳社

東京大学地震研究所編 （1986） 「新収　日本地震史料　第5巻　別巻4」 日本電気協会

4） 2）および富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 （1993・1994） 「埋蔵文化財年報(5)・(6)」

5） 婦中町教育委員会 （1993） 富山県婦中町　友坂遺跡　発掘調査報告Ⅱ

6） 寒川　旭 （1986） 「寛政11年（1799年）金沢地震による被害と活断層地震39」

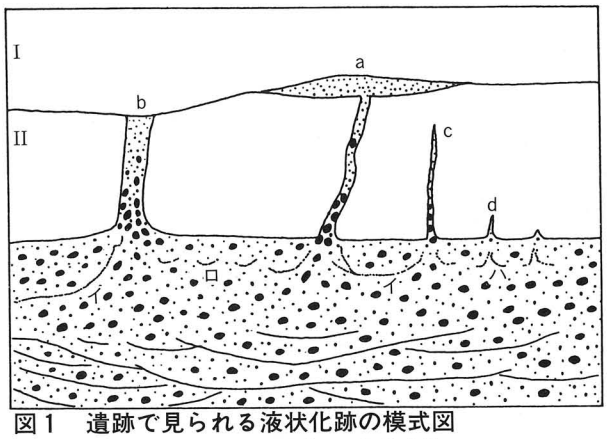


図１　遺跡で見られる液状化跡の模式図

イ擾乱構造　ロ四状構造　ハ柱状構造

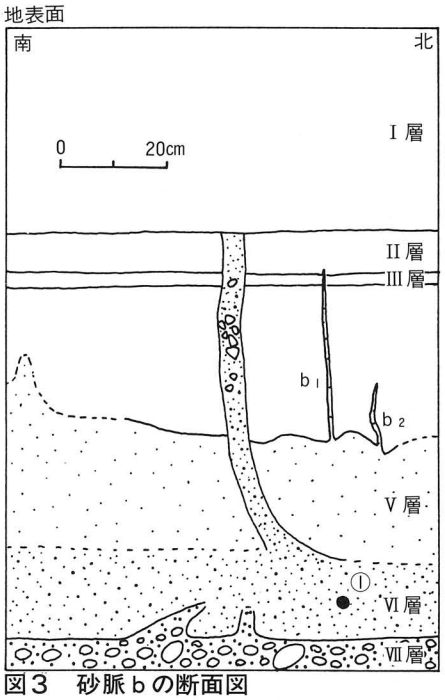


図３　砂脈ｂの断面図

（黒丸印は粒度分析試料採取位置）

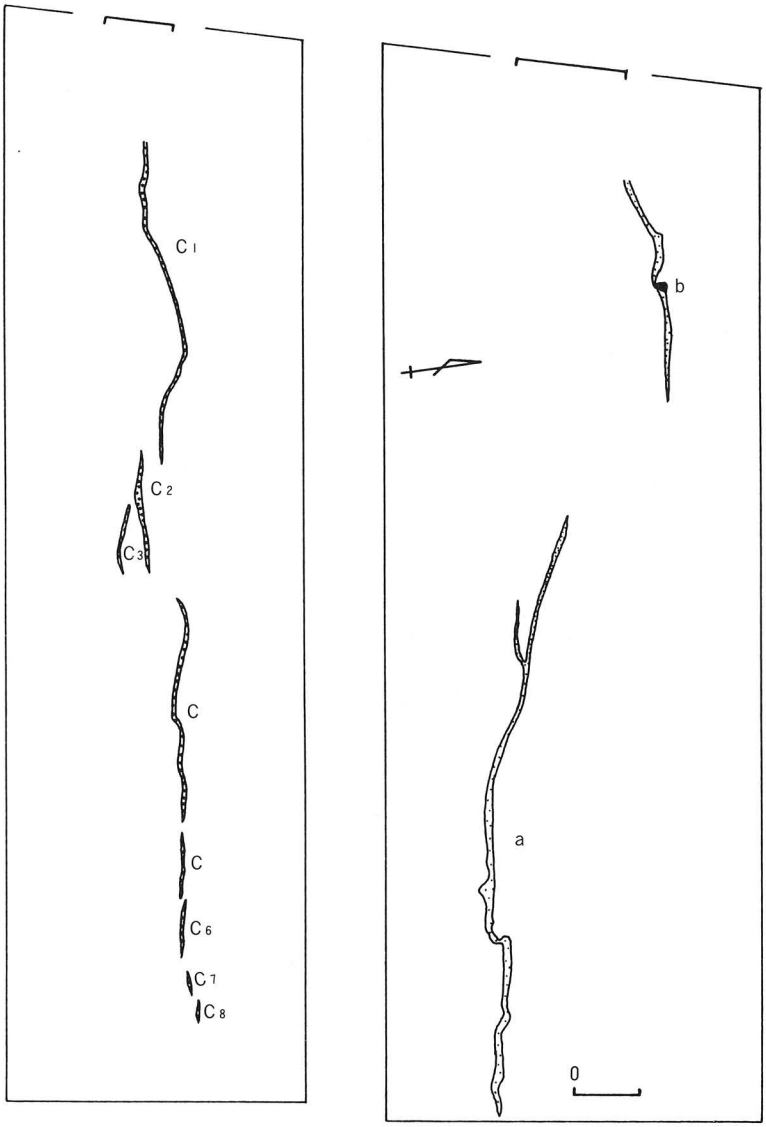


図２　砂脈の平面図

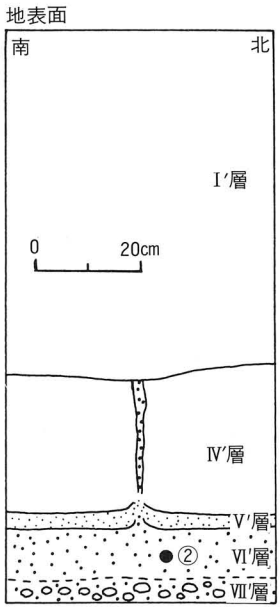


図４　砂脈Ｃの断面図

（黒丸印は粒度分析試料採取位置）

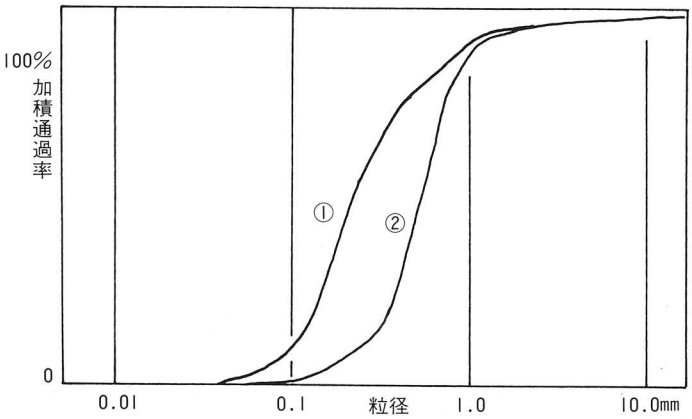


図５　液状化した地層の粒径加積曲線

V　参考文献

瓦塔他文献

あ
飛鳥資料館　1985 『山田寺』
飛鳥資料館　1975 『飛鳥の寺院遺跡』
飛鳥資料館　1984 『小建築の世界』
朝日町教育委員会　1988 『縄生廃寺跡発掘調査報告』
青木豊昭　1982 「室谷廃寺」『今立町誌第一巻本編』
天野　努他　1975 『八千代市村上遺跡群』 房総考古学資料刊行会
天野　努他　1981 『公津原』 Ⅱ　千葉県教育委員会
安藤鴻基　1979 「房総の瓦塔」『木下別所廃寺跡第二次調査概報』 千葉県教育委員会
秋田喜一　1956 「羽咋郡押水町発見資料二点に就いて」『石川考古学研究会会誌』 第8号
い
茨城県　1985 『古代の寺－台渡里廃寺跡』『茨城県史原始古代編』
茨城県歴史館　1977 『特別展　茨城の古瓦』
茨城県立歴史館　1994 『東国の古代仏教』
石岡市教育委員会　1980・81 『茨城廃寺跡Ⅰ・Ⅱ』
石田茂作　1934 「佛教の初期文化」『岩波講座日本の歴史』 国史研究会編号
石田茂作　1950 「飛鳥奈良時代」『日本考古学入門』
石村喜英　1966 「瓦塔設立の意趣」『日本歴史考古学論叢』
石村喜英　1971 「瓦塔と泥塔」『新版　考古学講座　8　特論（上）』
石村喜英　1976 「瓦塔」『新版　仏教考古学講座　第3巻　塔・塔婆』 雄山閣
伊東信雄他　1961 『陸奥国分寺跡』（財）河北文化事業団
稲垣晋也　1966 「静岡県引佐郡三ヶ日町宇志山中発見瓦塔の復元について」『考古学雑誌』 第53巻第1号　日本考古学会
稲垣晋也　1970 『新版　考古学講座7』
稲垣晋也　1976 「遺物」『新版仏教考古学講座』 第1巻総説所収
石川県埋蔵文化財センター　1988 『辰口西部遺跡跡群Ⅰ』
石川県埋蔵文化財センター　1988 『寺家遺跡発掘調査報告Ⅱ』
池野正男　1988 「射水丘陵における9・10世紀の須恵器窯跡」『大境』 12号　富山考古学会
池田大助・相京邦彦　1986 「谷津遺跡の調査」『千葉急行線内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』 財団法人千葉県文化財センター
いわき市教育委員会　1989 『夏井廃寺跡Ⅲ』
出河裕典　1995 「信濃の瓦塔再考　－近年の出土例を中心にして－」『信濃』第47巻第4号　信濃史学会
石井清司　1992 「3．木津地区所在遺跡(1)瀬後谷遺跡」『京都府遺跡調査概報第51冊』 ㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター
う
上田市立信濃国分寺資料館　1984 『信濃の古代寺院』
海野道義他　1979 『江原台』 江原台第1遺跡発掘調査団
上村和直　1991 「瓦製塔の性格」『季刊考古学　第34号』 雄山閣
お
岡山県教育委員会　1978 『大海廃寺緊急発掘調査報告書』
御調町教育委員会　1989 『本郷平廃寺』
近江昌司　1973 「備前熊山仏教遺跡考」『天理大学学報』 第85号
大谷女子大学資料館　1983 『札馬』
小野市教育委員会　1977 『播磨広渡寺廃寺跡発掘調査報告』
岡崎市教育委員会　1982 「真福寺東谷遺跡」
大竹憲治　「福島県郡山五番遺跡出土瓦塔の新資料」史峰第14号
大岩好昭・高木博彦　1978 『房総の古瓦』千葉県立房総風土記の丘
小矢部市教育委員会　1991 『富山県小矢部市能越自動車道関係遺跡群試掘調査報告』
か
金沢大学考古学研究会　1976 『能美丘陵および能登島の野外調査』
神田義雄他　1952 「瓦塔について－千葉県印旛郡長熊廃寺址発掘調査報告」 銅鐸第9号
各務原市埋蔵文化財調査センター　1993 『野口廃寺A地区の発掘調査報告書』
柏原市歴史資料館　1985 『柏原の古代寺院址』
川上　元　1973 「上田市唐臼出土の瓦塔」『上小考古』　5
神奈川県立博物館　1984 『神奈川の古瓦』
金山弘明　1991 『松任市横江荘遺跡－昭和62年度～平成2年度－』 松任市教育委員会
梶山　勝　1989 「津島市神守元屋敷遺跡内採集の土製宝塔について」『名古屋市博物館紀要第12巻』
き
紀伊風土記の丘管理事務局　1992 『紀伊の古代寺院－出土瓦を中心として－』
金正基　1961 「英國陶製模型塔二例」 国立博物館 『美術資料』 第3号
く
倉吉市教育委員会　1971 『伯耆国分寺跡発掘調査報告』
黒埼町教育委員会　1982 『緒立八幡神社遺跡』
久保常晴他　1952 「千葉県印幡郡長熊廃寺址発掘報告」『銅鐸』 第9号　立正大学考古学会
群馬県歴史博物館　1981 『群馬の古代寺院と古瓦』
こ
小村　茂編　1983 『戸津』 小松市教育委員会
小林高範　「富山市明神遺跡Ⅲ地区出土の瓦塔について」『富山市考古資料館報』№21　富山市考古資料館
小林久雄他　1960 「肥後国陣内廃寺の瓦塔」『東方古代研究9号』
小森秀三他　1978 『弓波廃寺範囲確認発掘調査報告』 富山県教育委員会
小島俊彰・舟崎久雄　1973 『小矢部市小森谷遺跡調査報告書』 富山県教育委員会
五島美術館　1978 『日本の陶硯』 五島美術館展覧会図録№98
小林康男　1991 「第Ⅴ章　遺物　第2節瓦塔他」『菖蒲沢遺跡発掘調査報告』 塩尻市教育委員会
さ
佐伯啓造　1936 『法隆寺建築読本』
佐藤克巳・高木博彦　1974 「木下廃寺の古瓦」『ふさ』第5・6合併号　ふさの会
埼玉県立歴史資料館　1994 『埼玉県の瓦塔』
埼玉県教育委員会　1993 『埼玉県児玉郡美里町東山遺跡出土瓦塔・瓦堂解体修復報告書』
埼玉県立博物館　1991 『音のかたち』
埼玉県立歴史資料館　1992 『天上へ向かうかたち　－さまざまな塔－』
坂詰秀一　1958 「瓦塔についての一考察」 貝塚　79
嵯峨井亮　1970 「石川県羽咋郡高松町出土の瓦塔と同押水町出土の鉄鉢形須恵器について」『石川県考古学研究会会誌』第13号　石川考古学研究会
笹生　衛　1994 「古代仏教信仰の一側面　－房総における8・9世紀の事例を中心に－」『古代文化第46巻第12号』
斉藤　隆　1981 「北代遺跡と吉田文俊」『富山市考古資料館報№5』 富山市考古資料館
し
滋賀県教育委員会　1975 『衣川廃寺発掘調査報告』
島根県立八雲立つ風土記の丘　1980 『山陰の国府と律令時代』
島田市教育委員会　1980 「竹林寺廃寺跡」
塩尻市立博物館　1994 『古代・中世の祈りの世界』
清水庄吉　1969 「石川県鶴来町知気寺出土の陶硯」『石川考古学研究会会誌12号』 石川考古学研究会
す
須田　勉　1985 「平安初期における村落内寺院の形態」『古代深叢Ⅱ』
須賀川市教育委員会　1976 『上人壇廃寺跡Ⅰ』
せ
泉南市教育委員会　1987 『海会寺』
善端　直他　1991 「七尾市池崎上手遺跡採集の古代瓦について」『石川考古』 第207号
関　雅之・本間嘉晴　1975 『浜田遺跡』 真野町教育委員会
た
高井悌三郎　1964 『常陸台渡廃寺跡・八幡瓦窯跡』
高井悌三郎　1966 『摂津伊丹廃寺跡』 伊丹市教育委員会
高井悌三郎　1978 「茨城の古瓦について」 茨城歴史館館報第5号
武田宗久　1953 「王朝時代」『千葉市誌』 千葉市
滝口　宏　1972 『下総龍角寺調査報告』 千葉県教育委員会
滝口　宏　1974 「国分寺造立の発」『市川市史』 第2巻古代・中世・

近世　吉川弘文館
滝口　宏他　1961『印幡手賀』早稲田大学考古学研究室
玉口時雄　1975『健田遺跡発掘調査報告書』千葉県教育委員会
高堀勝喜他　1971「史跡末松廃寺」石川県野々市町教育委員会　末松廃寺調査団
但馬国分寺跡発掘調査団　1975『但馬国分寺跡Ⅰ』兵庫県城崎郡日高町教育委員会
㈶辰馬考古資料館　1982『昭和57年度　秋季展－兵庫の古代寺院跡Ⅰ－』
多摩ニュータウン遺跡調査会　1966『多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅱ』
谷内硯央他　1987『柳田シャコデ廃寺跡』石川県羽咋市教育委員会
高崎光司　1989「瓦塔小考」『考古学雑誌』第74巻第3号　日本考古学会
田中照久　1983「宮崎村の窯業」『福井県窯業誌』福井県窯業誌刊行会
一志茂樹・小松　陵他　1959「塩尻市下大門の瓦塔遺跡」信濃第11巻第8号
伊達宗泰　1955「室町時代の瓦製塔について」古代学研究12号
田嶋明人　1973「柳田古窯跡群」『羽咋市史　原始・古代編』羽咋市
高堀勝喜　1955「先史文化」九学会編『能登』所収
高堀勝喜　1965「縄文文化の発展と地域性－北陸－」『日本の考古学Ⅱ』
ち
千葉県教育委員会　1987『佐倉市長熊廃寺跡確認調査報告書』
千葉文化財保護協会　1987『佐倉市長熊廃寺跡確認調査報告書』
千葉県文化財センター　1993『歴史時代(1)』房総考古学ライブラリー7
つ
津山郷土博物館　1992『美作の白鳳寺院』
て
出越茂和・小西昌志他　1993『上荒屋遺跡（二）奈良・平安時代(1)』金沢市教育委員会
と
豊川市教育委員会　1989『三河国分寺跡』
栃木県立博物館　1986『ほりだされた下野の古代』
栃木県教育委員会　1973『下野薬師寺跡発掘調査報告』
栃木県教育委員会　1985～1993『下野国分寺跡』
栃木県教育委員会　1993『東山道の国分寺』
富山県教育委員会　1986『富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群第8次緊急発掘調査概要　№18遺跡B地区　№19遺跡』
富山県教育委員会　1974『富山県埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』「井波町高瀬遺跡」
富山県埋蔵文化財センター　1993『富山県埋蔵文化財包蔵地地図』
富山県埋蔵文化財センター　1993『富山県埋蔵文化財センター年報　平成4年度』
富山県文化振興財団　1993『能越自動車道関係埋蔵文化財包蔵地調査報告－小矢部市～福岡町間』
富山県文化振興財団　1994『埋蔵文化財年報(2)　平成5年度』
砺波市教育委員会　1978『富山県礪波市檀野遺跡群予備調査概要』
礪波市　1990『礪波市史資料編1考古・古代・中世』
富山市教育委員会　1987『長岡杉林遺跡』
豊巻幸正他　1985「東寺原地区」『永吉台遺跡群』財団法人君津郡市文化財センター
徳島県教育委員会　1962『石井』
土肥富士夫他　1985『池崎窯跡』七尾市教育委員会
戸根与八郎他　1975『上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書』新潟県教育委員会
富山県　1976『富山県史　通史編1　原始・古代』「富山県埋蔵文化財包蔵地地図富山県埋蔵文化財センター1993」
富山県　1972『富山県史　考古編』
な
名古屋市教育委員会　1986『ＮＮ286号窯跡発掘調査概要報告書』
名古屋市博物館　1985『尾張の古代寺院と瓦』
名古屋市博物館　1994『発掘された東海の古代』
中村　浩　1985『須恵器の造形とその変遷』ミューゼアム　第416号
奈良国立博物館　1961『天平の地宝』
奈良国立博物館　1992『山辺の道の考古学』
奈良国立博物館　1980『特別展　国分寺』
奈良国立文化財研究所飛鳥資料館　1984『小建築の世界』
七尾市教育委員会　1989『史跡能登国分寺跡　－第五・六・七次発掘調査報告書－』
七尾市教育委員会　1990『史跡能登国分寺跡　－第八次発掘調査報告書－』
七尾市教育委員会　1991『史跡能登国分寺跡　－第九次発掘調査報告書－』
七尾市教育委員会　1973『能登国分寺跡発掘調査報告』
七尾市　1970『七尾市史資料編集四巻』七尾市史教育委員会
長野県教育委員会　1989『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3』
奈良国立文化財研究所　1976『平城宮発掘調査報告』
に
日本古文化研究所　1937『雪野寺址発掘調査報告』
日本文化財研究所　1977『千葉県荻ノ原遺跡』
新潟県教育委員会　1984『上新バイパス関係遺跡発掘調査報告』Ⅰ
日進町教育委員会　1978『愛知県日進町折戸80号窯発掘調査報告書』
西井龍儀　1968「小矢部市松尾談議所発見の瓦塔状破片」『大境』第4号　富山考古学会
西井龍儀　1991「小矢部市蓮沼地内発見の瓦塔破片」『富山考古学会連絡誌』9
入善町教育委員会　1975『入善町じょうべのま遺跡発掘調査概要3』
ぬ
沼沢　豊他　1982『成東町真行寺廃寺跡確認調査報告』千葉教育委員会
の
野々市町教育委員会・末松廃寺調査団　1971『史跡末松廃寺』
野上丈助他　1982『陶邑Ⅴ』大阪府教育委員会
は
林　和男　1985「信濃の瓦塔」『信濃47巻第1号』
原　嘉藤　1955「長野県東筑摩郡明科町明科廃寺址について」『信濃第7巻第7号』
羽曳野市教育委員会　1986『野中寺』
原田憲二郎　1994「古代の石造相輪についての一考察」『文化財学論集』所収
原川雄二他　1977「いわき市金山窯跡群出土遺物について」『福島考古18号』
浜島正士編　1979「塔の建築」『日本の美術№158』
橋本正春　1994『富山県大門町　串田新遺跡Ⅶ』大門町教育委員会
橋本澄夫・田嶋明人他　1971『法皇山横穴古墳群』加賀市教育委員会
ひ
広島県　1980『広島県史　原始・古代』
平田天秋他　1976『高松町箕打・みやの古窯』石川県教育委員会・みやの古窯跡発掘調査委員会
ふ
福岡町　1969『福岡町史』
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　1994『年報－8－平成4年度』
福井県　1986『福井県史』資料編13－考古－
福島県　1964「福島県史第6巻」
文化財保護委員会　1967『四天王寺』
藤原良志　1973「高岡市蓮華寺出土の風字硯」『歴史考古九・十合併号』
双葉町教育委員会　1978～1980『郡山五番遺跡』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ
ほ
本間嘉晴・椎名仙卓　1958「佐渡小木半島周辺の考古学的調査」『南佐渡』新潟県教育委員会
本間嘉晴他　1972「小泊発見古瓦の文様に就て」『佐渡史苑2』
本間嘉晴　1953「佐渡新発見の陶硯について」『越佐研究五・六号併号』
三木市　1970『三木市史』
ま
松崎寿和　1981『広島県の考古学』
松本修自　1983「小さな建築」『文化財論叢』
松下正司編　1970『安芸横見廃寺の調査Ⅰ』広島県教育委員会
丸子　亘　1959「唐招提寺出土の瓦塔片」『立正考古23号』

み
水村伸行　1993「丹生古窯跡群佐々生支群出土資料を中心とした若干の考察－特に8世紀前半代の編年を中心に－」『福井考古学会会誌』第11号　福井考古学会
三重県教育委員会　1972『中ノ庄遺跡発掘調査報告』
宮　昌之　1982「勝呂廃寺」『埼玉県古代寺院跡調査報告書』
宮下栄仁・平田天秋　1984『花見月遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
宮城県多賀城跡調査研究所　1980『多賀城と古代東北』
光江　章　1986『東郷台遺跡』（川原井廃寺跡）財団法人君津郡市文化財センター
や
八雲立つ風土記の丘資料館　1978『古代の島根』
山本新平　1976『史跡　三栖廃寺塔跡　保存管理計画策定報告書』
よ
吉岡康暢　1971「平安後期地方寺院の一例」『津幡町史』石川県津幡町役場
吉岡康暢　1966「輪島市の考古学的調査　第一報（稲舟古窯址）」『石川考古学研究会会誌10号』石川考古学研究会
吉岡康暢　1975「北陸の陶硯」『日本の陶硯』五島美術館展覧会図録№98
吉岡康暢監修　1989『珠洲の名陶』珠洲市立珠洲焼資料館
義則敏彦　1990「中世の埼仏－西播磨を中心として－」『今里幾次先生古稀記念播磨考古学論叢』今里幾次先生古稀記念論文集刊行会
わ
涌谷町黄金山神社　1960『天平産金遺跡』
和歌山県教育委員会　1977『佐野廃寺発掘調査概要』

町内既住調査関係文献

「西中・大滝№3遺跡（大滝遺跡）　開ほつ大滝遺跡　石名田木舟遺跡　西中・大滝№1遺跡（石名田木舟遺跡）能越自動車道関連発掘調査　能越自動車道Ａ－０３遺跡　能越自動車道０５遺跡能越自動車道０６遺跡　能越自動車道０７遺跡」『能越自動車道関連発掘調査　平成５年度年報』富山県埋蔵文化財センター　1994
「木舟城跡」『昭和56年度一覧』富山県教育委員会　1982
「木舟城跡」『昭和62年度年報』富山県埋蔵文化財センター　1988
「上野Ａ遺跡」『昭和63年度年報』富山県埋蔵文化財センター　1989
『上野Ａ遺跡』福岡町教育委員会　1990
「下向田古墳群」『昭和57年度一覧』富山県教育委員会　1983
「下向田古墳群」『昭和58年度一覧』富山県教育委員会　1984
「下向田古墳群」『昭和59年度一覧』富山県教育委員会　1985
『平成３年度年報』富山県埋蔵文化財センター　1992
『平成４年度年報』富山県埋蔵文化財センター　1993
『平成５年度年報』富山県埋蔵文化財センター　1994

表１　石名田木舟遺跡　遺構一覧

番号	種類番号	形状	時期	出土遺物他
1	SK 1	方？	中世	木製品（下駄・漆製品他）
2	SK 2	方	中世	須恵器（杯蓋）　土師器（椀）　木製品　種子
3	SK 3	方	中世	土師器（甕）　木製品　陶磁器　種子
4	SK 4	方？	中世	須恵器（甕）　木製品　SD1の上
5	SK 5	方？	中世？	SD1の上
6	SK 6	円	中世	土師器（甕）　木製品
7	SK 7	方	中世	土師器（甕）　木製品（将棋駒：王将他）
8	SK 8	不整	中世	木製品
9	SK 9	円	古代	須恵器（杯蓋）　土師器（甕・椀・赤彩土器）
10	SK 10	円	古代	須恵器（杯蓋・甕）　土師器（甕・椀）　木製品　穴２個
11	SK 11	不整	古代	須恵器（杯蓋）　土師器（甕）
12	SK 12	不整	古代	須恵器（杯蓋）　土師器（甕）　木製品　穴２個
13	SK 13	不整	中世	須恵器（杯蓋・杯身・甕）　土師器（甕）　越前　SK14・15と接する
14	SK 14	不整	中世？	SK13・15と接する
15	SK 15	不整	中世	土師器（甕・椀）　土師質小皿　SK13・15と接する
16	SK 16	不整	中世？	
17	SK 17	不整	古代	須恵器（杯身）　土師器（赤彩土器）
18	SK 18	正方	中世	須恵器（杯蓋）　木製品　内部の隅に棒状製品を建て、それをさらに棒状製品で四角く組む
19	SK 19	長方	中世	須恵器（甕）石製品（墓石状石製品3個：内２個は接合と石臼）　北側半分に廃棄状態で重なり合う
20	SE 20	長方	古代	当初SK20　須恵器（瓦塔：阿弥陀三尊「像」・杯蓋・杯身・甕）　土師器（甕・椀・赤彩土器）　土師質小皿珠洲　木製品　（井戸枠）　種子
21	SK 21	円	古代？	柱穴？
22	SK 22	円	古代？	柱穴？
23	SK 23	円	古代？	穴２個
24	SK 24	円	古代？	柱穴？
25	SK 25	円	古代？	柱穴？
26	SK 26	円	古代？	柱穴？
27	SK 27	長方	古代？	
28	SK 28	長方	古代	土師器
29	SK 29	円	古代？	柱穴？
30	SK 30	方形	古代？	
31	SK 31	円	古代	土師器（甕・椀）　柱穴？
32	SK 32	円	古代？	柱穴？
33	SK 33	円	古代？	
34	SK 34	不整	古代	土師器（甕）
35	SK 35	長方	古代	土師器（椀）　フイゴ羽口
36	SK 36	長方	中世	須恵器（杯身・壷）　土師器（鍋・赤彩土器）土師質小皿（有付着物）越前　珠洲　木製品　石　穴２個　穴内部隅に棒状製品を建て、それをさらに棒状製品で四角く組む
37	SK 37	長方	古代？	
38	SK 38	円	古代	須恵器（杯蓋・杯身・甕）
39	SK 39	円	古代	土師器（甕）
40	SK 40	長方	古代	須恵器（杯蓋）
41	SK 41	長方	古代	土師器（甕）
42	SK 42	長方	古代	須恵器（杯身）
43	SK 43	長方	古代	土師器（甕）
44	SK 44	長方	古代	須恵器（杯身・甕）　土師器（甕・高杯）
45	SK 45	長方	古代？	
46	SK 46	長方	古代	須恵器（甕）
47	SK 47	円	中世？	木製品
48	SK 48	長方	古代？	
49	SK 49	方形	古代？	
50	SK 50	方形	古代？	
51	SK 51	不整	中世	須恵器（杯身）　土師器（甕）　珠洲
52	SK 52	方形	古代？	
53	SK 53	円	古代？	
54	SK 54	方形	古代？	
55	SK 55	長方	古代？	
56	SK 56	円	古代	須恵器（甕）　土師器（甕）　土師質小皿（糸切底）　木製品
57	SK 57	方形	古代	土師器（甕）　フイゴ羽口
58	SK 58	方形	古代	土師器（甕・赤彩土器）
59	SK 59	方形	古代	須恵器（杯身）　土師器（甕）
60	SK 60	方形	古代	土師器（甕・赤彩土器）
61	SK 61	方形	中世	須恵器（杯身）　土師器（甕）　フイゴ羽口　陶磁器
62	SK 62	不整	古代	土師器（甕）　南側破壊

63	SK 63	長方	古代	須恵器（杯蓋・壷）　土師器（甕）　陶磁器　種子
64	SK 64	円	古代	土師器（甕・赤彩土器）
65	SK 65	方形	古代	須恵器（杯身）　土師器（甕・椀）
66	SK 66	方形	古代	土師器（甕）
67	SK 67	円	中世	須恵器（甕）　土師器（甕）　珠洲
68	SK 68	円	古代	土師器（甕）
69	SK 68	不整	古代？	
70	SK 70	不整	古代	須恵器（瓦塔：飛鳥様式卍崩高欄部材・杯蓋・杯身・甕）土師器（甕・椀・赤彩土器）　製塩土器　SDと接する
71	SK 71	不整	古代	須恵器（杯身・壷）　土師器（甕・椀）
72	SK 72	円	古代	須恵器（杯蓋）　土師器（甕・椀）
73	SK 73	不整	古代	須恵器（杯蓋）　土師器（甕）　土師質小皿
74	SK 74	長方	古代	土師器（甕）
75	SK 75	不整	古代	須恵器（杯蓋・杯身）　土師器（甕・赤彩土器）
76	SK 76	不整	古代	須恵器（杯蓋・杯身・壷）　土師器（甕・椀・高杯・赤彩土器）　製塩土器　フイゴ羽口
77	SK 77		中世	土師質小皿（有付着物）　越前　珠洲　木製品
78	SK 78	長方	古代	須恵器（壷）　土師器
79	SK 79	長方	古代？	SK80内の南
80	SK 80	長方	古代	須恵器（杯蓋）　土師器（甕）
81	SK101	円	古代	須恵器（甕）　土師器（椀）
82	SK102		古代	土師器（甕）
82	SK103		古代	須恵器（杯身・甕）　土師器（甕）　土師質小皿
83	SK201		古代	須恵器（甕）　土師器
84	SK202		古代	土師器（甕）
85	SK204		古代	土師器（甕・赤彩土器）
86	SK205		古代	須恵器（杯蓋）　土師器（甕）
87	SK206		古代	土師器（甕）
88	P 1	円	古代？	
89	P 2	円	古代？	
90	P 3	円	古代？	
91	P 4	円	古代	須恵器（杯蓋）　土師器（甕・椀）
92	P 5	円	古代	土師器
93	P 6	円	古代	土師器
94	P 7	円	古代？	
95	P 8	円	古代	須恵器（杯蓋）　土師器（赤彩土器）
96	P 9	円	古代	土師器（甕）
97	P 10	円	古代	土師器（甕）
98	P 11	長方	古代？	
99	P 12	円	古代	土師器（甕・赤彩土器）
100	P 13	円	古代	須恵器（壷）　土師器
101	P 14	円	古代	土師器（甕）
102	P 15	円	古代	土師器（甕）
103	P 16	円	古代	土師器（甕）
104	P 17	長方	古代？	
105	P 18	円	古代	土師器（甕）
106	P 19	円	古代？	
107	P 20	円	古代？	
108	P 21	円	中世	土師質小皿
109	P 22	円	古代？	
110	P 23	長方	古代？	
111	P 24	円	古代	土師器（甕）
112	P 25	円	古代	土師器（甕・赤彩土器）　製塩土器
113	P 26	円	古代	須恵器（壷）　土師器（椀）　製塩土器
114	P 27	円	古代？	
115	P 28	円	古代	土師器（椀）
116	P 29	円	古代	土師器（椀）
117	P 30	円	古代	土師器
118	P 31	円	古代？	
119	P 32	円	古代？	
120	P 33	円	古代？	
121	P 34	円	古代？	
122	P 35	円	古代？	
123	P 36	円	古代？	
124	P 37	円	古代	土師器
125	P 38	円	古代？	
126	P 39	円	古代	須恵器（杯蓋）　土師器（甕）
127	P 40	円	古代？	
128	P 41	円	古代	須恵器（杯身）
129	P 42	円	古代？	
130	P 43	円	中世	木製品
131	P 44	円	古代？	
132	P 45	円	古代？	
133	P 46	円	古代	土師器
134	P 47	円	古代？	
135	P 48	円	古代	土師器（甕）
136	P 49	長方	古代	土師器（甕）
137	P 50	長方	古代	土師器
138	P 51	円	古代？	
139	P 52		古代	須恵器（杯蓋・杯身）　土師器（甕・椀）
140	P 53	円	古代	土師器（甕・赤彩土器）
141	P 54	円	古代？	
142	P 55	円	古代？	
143	P 56	円	古代	須恵器（杯蓋・杯身）　土師器（甕・赤彩土器）
144	P 57	円	古代	土師器（甕・椀・赤彩土器）
145	P 58	円	古代？	
146	P 59		古代	土師器（甕）
147	P 60	円	古代？	
148	P 61	円	古代	土師器（甕）
149	P 62	長方	古代	土師器（甕）
150	P 63	円	古代	土師器（甕）
151	P 64	長方	古代	土師器（甕・椀）
152	P 65	円	古代？	
153	P 66	円	古代	土師器（椀：有付着物）
154	P 67	円	古代	土師器（甕・赤彩土器）
155	P 68	円	古代？	
156	P 69	円	古代	土師器（甕・赤彩土器）
157	P 70	円	古代	土師器（甕）
158	P 71	円	古代	須恵器（甕）　土師器（甕・椀・土製品）
159	P 72	円	古代	土師器（甕）
160	P 73	円	古代？	
161	P 74	長方	古代？	
162	P 75		古代	土師器（甕・椀・赤彩土器）
163	P 76	円	古代	土師器（甕）　SB2に接する
164	P 77	円	古代	須恵器（壷）　SB2内
165	P 78	長方	古代？	
166	P 79		古代？	
167	P 80	長方	古代？	
168	P 81	円	古代	土師器（椀）　製塩土器　SB2に接する
169	P 82	円	中世	土師器（甕）　越前
170	P 83			
171	P 84	円	古代	須恵器（杯身）　土師器（椀）
172	P 85	円	古代？	
173	P 86	円	古代？	
174	P 87	円	古代？	
175	P 88	円	古代	土師器（甕）
176	P 89	円	古代？	
177	P 90	円	古代	須恵器（杯蓋）　土師器（椀：糸切）

178	P	91	円	古代？	
179	P	92		古代？	
180	P	93		古代？	
181	P	94		古代？	
182	P	95		古代？	
183	P	96		古代？	
184	P	97		古代？	
185	P	98		古代？	
186	P	99		古代？	
187	P	100		古代？	
189	P	101	円	古代？	
190	P	102	円	古代？	
191	P	103	円	古代？	
192	P	104		古代	須恵器（杯蓋）
193	P	105		古代？	
194	SD	1	東西	中世	木製品（将棋駒：金将）
195	SD	2	南北	中世	須恵器（杯身・壷）　土師器（甕・椀）　越前
196	SD	10	南北	中世	須恵器（杯蓋）　土師器（甕・椀・内黒土器）　製塩土器
197	SD	101	東西	古代	
198	SB	1		古代	須恵器（瓦塔：飛鳥様式卍崩表現高欄部材・杯蓋・杯身・甕）　土師器（甕・椀・小型土器）　製塩土器　木製品　炭化物
199	SB1P1		円	古代	土師器（甕・椀）
200	SB1P2		円	古代	土師器（甕）
201	SB1P3		円	古代	土師器（甕・小型土器）
202	SB1P4		円	古代	土師器（甕・椀・錘）　製塩土器
203	SB1P5		円	古代	土師器（甕）
204	SB1P6		円	古代	土師器（甕）
205	SB1P7		円	古代	土師器
206	SB1P9		円	古代	土師器（甕・椀）
207	SB1P10		円	古代	土師器（甕）
208	SB1P11		円	古代	土師器
209	SB1P12		円	古代	土師器
210	SB1P33		円	古代	土師器
211	SB1P100		円	古代	土師器（甕）
212	SB1P101		円	古代	土師器（甕）
213	SB1P103		円	古代	土師器（甕）
214	SB1P104		円	古代	土師器（甕）
215	SB	2	円	古代	須恵器（杯蓋・杯身・甕・壷）　土師器（甕・椀・赤彩土器）
216	SB2P1		円	古代	土師器（甕）
217	SB2P3		円	古代	土師器（甕・椀）
218	SB2P4		円	古代	須恵器（杯身）　土師器（甕・内黒土器）　製塩土器
219	SB2P5		円	古代	土師器（甕・椀）
220	SB2P6		円	古代	土師器（甕・赤彩土器）
221	SB2P7		円	古代	土師器（甕・椀）　製塩土器
222	SB2P8		円	古代	土師器（甕・椀）　越前

表２　瓦塔出土地名表

畿内　8　京都府　1　大阪府　3　奈良県　4

東海道　119　三重県　2　愛知県　23　静岡県　4　神奈川県　4　埼玉県　55　千葉県　29　東京都　2

東山道　75　滋賀県　1　岐阜県　3　長野県　15　群馬県　41　栃木県　2　茨城県　6　福島県　5　宮城県　2

北陸道　41　福井県　4　石川県　19　富山県　14　新潟県　4　**山陰道**　2　兵庫県　2

山陽道　4　岡山県　1　広島県　1　和歌山県　1　徳島県　1　**西海道**　4　福岡県　3　熊本県　1　**全　国**　245遺跡

所在地	遺跡名
京都府	
木津町瀬後谷	
大阪府	
豊中市勝部	
東大阪市四条町	神感寺跡
柏原市旭ヶ丘２丁目	五十村廃寺
奈良県	
奈良市法蓮町多聞山	
奈良市法華寺町	法華寺
奈良市西ノ京	薬師寺
奈良市西ノ京	唐招提寺
三重県	
四日市市上海老町	岡山古窯址群１号窯
一志郡三雲村	中ノ庄
愛知県	
岡崎市真福寺	東福寺東谷
岡崎市	矢作川河床
一宮市丹陽町	重吉城跡
豊田市保見町六反田	
江南市村久野	音楽寺跡
江南市小杁町	
稲沢市長野町	塔の越
稲沢市大矢町	大矢
西春日井郡西春町	弥勒寺廃寺跡
葉栗郡木曽川町	門間
海部郡甚目寺町本郷	清林寺
海部郡甚目寺町新居屋	
西加茂郡三好町	猿投古窯（黒笹８号窯ほか）
渥美郡田原町	渥美半島古窯址群
愛知郡日進町	折戸82号窯
愛知郡日進町	折戸80号窯
名古屋市緑区	神沢古窯
名古屋市緑区	NN―286窯跡
春日井市長塚町	勝川
海部郡佐織町	諸桑廃寺跡
犬山市勝部	勝部廃寺跡
豊田市舞木	舞木廃寺
豊橋市牟呂町	市道
静岡県	
熱海市伊豆山寺山堀坂	
三島市三原ヶ原	
島田市舟木南原	竹林寺跡
引佐郡三ヶ日町宇志	大畠
神奈川県	
横浜市神奈川区三ツ沢（推定）	伝三ツ沢貝塚
川崎市高津区野川	影向寺跡
川崎市多摩区岡上	岡上廃寺
小田原市千代	千代廃寺
埼玉県	
浦和市上木崎	上木崎３
浦和市上木崎	上木崎
川越市吉田	鯨井新田
川越市郭町	川越城
川越市	下川原
所沢市早稲田大学校内	お伊勢山
狭山市笹井八木	東八木
狭山市笹井宮地上	宮地
入間市上小谷田	森坂
上福岡市川崎	川崎
坂戸市石井	勝呂廃寺
坂戸市旧三芳野付近	三芳野
坂戸市竹の内花	稲荷前Ａ
坂戸市三福寺	三福寺
坂戸市	不明
日高市女影字若宮	若宮
日高市女影字姥田	姥田
日高市台の上	台
日高市高岡	高岡廃寺
日高市山根字下大寺	大寺廃寺
東松山市唐子	妙昌寺
東松山市	青鳥城跡
比企郡嵐山町大蔵字行司免	行司免
比企郡嵐山町	宮の裏
比企郡鳩山町今宿小用	興長寺寺院跡
比企郡鳩山町泉井	新沼
比企郡鳩山町柳原	柳原Ａ
比企郡鳩山町大橋	虫草山窯
比企郡鳩山町大橋	小谷Ｂ窯
比企郡鳩山町赤塚	鳩山180
比企郡鳩山町赤沼	
比企郡滑川町字用土庵	用土庵Ｂ
比企郡滑川町字笊山	中尾
比企郡玉川村	東光寺
比企郡都幾川村多武部峰山	多武峰
早稲田大学本庄校地内	浅見山Ⅰ
児玉郡児玉町秋山	般若寺跡
児玉郡児玉町塩谷	真鏡寺後
児玉郡児玉町河内寺山	寺山
児玉郡児玉町秋山	堂平
児玉郡美里町木部	木部
児玉郡美里町関	富士山台
児玉郡美里町東山	東山
児玉郡美里町木部	駒衣廃寺
玉郡神川町元阿保	皂樹原・桧下
児玉郡児玉町	橋
熊谷市西別府	西別府
深谷市本田谷	前
深谷市上野台字割山	割山
大里郡寄居町金屋	高柿山

所在地	遺跡名
大里郡岡部町岡部	白山
大里郡岡部町本郷	藤の木
大里郡花園町北飯塚鐘撞堂山	北飯塚
大里郡江南町柴の八幡辻	柴
大里郡江南町	寺内廃寺
千葉県	
千葉市小中台町	谷津
千葉市千葉寺町	千葉寺跡
市川市国分	下総国分尼寺跡
成田市囲護台	
佐倉市長熊	長熊廃寺跡
佐倉市六崎	
市原市上高根	萩ノ原A
市原市上高根	萩ノ原B
八千代市村上	村上
印旛郡栄町	龍角寺跡
印旛郡印西町別所	木下別所廃寺跡
印旛郡印西町	大塚前
印旛郡印西町浦部	
印旛郡印旛村岩戸西方	
印旛郡印旛村山田	
山武郡芝山町	山田廃寺跡
安房郡千倉町	健田
公津原	Ｌｏｃ．14
印幡郡山田村字浅間山	
	六拾部A
	六拾部B
	江原台
	白幡前A
	白幡前B
	真行寺廃寺跡
	荻生道
	谷津A
	谷津B
	孟地A
	孟地B
	東寺原
	東郷台A
	東郷台B
東京都	
東村山市回田	
多摩市貝取	多摩ニュータウン
滋賀県	
大津市堅田衣川町西羅	衣川廃寺
岐阜県	
各務原市蘇原	野口廃寺A地区
各務原市須衛町	太田１号古窯
可児市	身隠山古墳
長野県	
上田市手塚堰ノ口	
東筑摩郡明科町	明科廃寺
長野市若槻徳間	
長野市稲田	稲添
長野市田牧	田牧居帰
長野市塩崎	篠ノ井
更埴市八幡青木	青木
更埴市雨宮	屋代
上田市常磐城唐臼	唐臼
上田市国分	信濃国分寺跡
上田市手塚	堰ノ口一
上田市下室賀	岳の鼻
松本市蟻ヶ崎城山腰	城山腰
松本市島立北栗	北栗
松本市島立高綱中学校	高綱中学校
松本市芳川	平田本郷
塩尻市広丘吉田川西	吉田川西
塩尻市塩尻大門	大門　一

所在地	遺跡名
飯田市毛賀	毛賀御射山
飯田市竜丘前林	前林廃寺
塩尻市片丘	菖蒲沢窯跡
塩尻市大門	大門
佐久市	聖原
群馬県	
前橋市上泉町次郎房	
前橋市上泉新田塚	
前橋市上泉町檜峯	
前橋市亀泉町本郷	
前橋市田口町	
前橋市上細井町薬師	
前橋市上細井町五十嵐	
高崎市大八木町	融通寺
桐生市菱町	風穴
桐生市菱町１丁目	細田
伊勢崎市上植木本町関下	上植木廃寺
伊勢崎市豊城町	権現山南
伊勢崎市昭和町	
伊勢崎市茂呂	
太田市東金井入金井	
太田市東金井南金井	
太田市吉沢瀧山	
太田市矢田堀小丸山	小丸山
安中市高別当井戸ヵ谷	
安中市大秋間自性寺	
安中市下の尻	
勢多郡大胡町茂木	天神風呂(茂木寺院跡)
勢多郡赤城村龍沢	龍沢
勢多郡赤城村諏訪上	諏訪上瓦塔散布地
勢多郡新里村武井内出東	
勢多郡新里村武井田場	
勢多郡新里村武井上武井	
勢多郡新里村新川	
群馬郡群馬町菅谷大房	
群馬郡群馬町東国分	上野国分寺跡
吾妻郡長野原町長野原	
利根郡昭和村森下宮原	
佐波郡境町伊与久	十三宝塚
佐波郡赤堀村今井御伊勢坂	
佐波郡赤堀村今井	
佐波郡赤堀村下触	稲荷廃寺
佐波郡東村東小保方下	
新田郡新田町中江田本郷	
新田郡新田町村田新生	入谷
新田郡笠懸村鹿山際	
新田郡笠懸村鹿堀底	
新田郡笠懸村西鹿田	
栃木県	
宇都宮市瓦谷町	欠ノ上窯跡
河内郡上三川町	薄市
茨城県	
水戸市渡里町	台渡里廃寺
結城市山川新宿	山川廃寺跡
水戸市	薬師平
行方郡玉造町	井上廃寺跡
水戸市	木葉下窯跡群
新治郡桜村	九重廃寺跡（東岡）
福島県	
いわき市東田町	金山瓦窯跡
白河市船田中道	下総塚古墳
須賀川市上人壇	上人壇廃寺
双葉郡双葉町郡山	郡山五番
いわき市平下大越	夏井廃寺
宮城県	
仙台市木下	陸奥国分寺跡
多賀城市市川・高崎	多賀城廃寺跡

所在地	遺跡名
福井県	
丹生郡朝日町	佐々生1号窯跡
丹生郡宮崎村	樫津6号窯跡
丹生郡宮崎村	舟場1号窯跡
丹生郡宮崎村	鉢状1号窯跡
石川県	
七尾市国分町	能登国分寺跡
七尾市池崎町	池崎１号窯跡
七尾市池崎町	池崎須恵窯址
石川郡野々市町	末松廃寺跡
河北郡津幡町	加茂廃寺跡
羽咋郡志雄町小浦	子浦蓮華山
羽咋郡押水町	押水中学校庭
小松市二ッ梨町	二ッ梨グミノキバラ窯跡
石川郡辰口町	下開発E
松任市横江	横江荘
金沢市上荒屋	上荒屋
河北郡高松町	若緑イナバ山２号窯跡
河北郡高松町	元女１号窯跡
羽咋郡寺家	寺家
羽咋郡柳田	柳田シャコデ廃寺跡
鹿島市鳥屋町	花見月
鹿島市鳥屋町	花見月N地点
七尾市池崎町	池崎A地点
七尾市池崎町	池崎上手
富山県	
立山町上末	上末窯跡
富山市山本	室住池窯跡
富山市山本	明神遺跡Ⅲ地区
富山市杉林	長岡杉林
氷見市伊勢大町	岩上
砺波市上和田	松山
砺波市福山	福山１号窯跡
砺波市増山	増山№５地区
高岡市常国	常国狐塚
井波町高瀬	高瀬
福岡町木舟	石名田木舟
小矢部市蓮沼	蓮沼千場
小矢部市松尾	松尾談議所
小矢部市杉谷	杉谷内床ノ山
新潟県	
佐渡郡真野町国分寺	佐渡国分寺
佐渡郡羽茂町	小泊窯址群
上越市今池	今池
西浦原郡黒崎町	緒立
兵庫県	
三木市和田町	正法寺山
小野市広渡町	広渡寺廃寺跡
岡山県	
英田郡作東町	江見廃寺
広島県	
深安郡神辺町上竹田	川谷
和歌山県	
有田郡吉備町土生	土生池２号窯
徳島県	
名西郡石井町浦屋下浦	石井廃寺
福岡県	
筑紫野市宝満山	
太宰府市般若寺	般若寺跡
北九州市小倉区	ドギバ窯跡群（天観寺山窯跡群）
熊本県	
下益城郡城南町道ノ上北前田	陣内廃寺

遺跡名では、遺跡を省略した。（例）石名田木舟遺跡：石名田木舟　廃寺・窯・城跡などは、そのまま表現した。一遺跡に2個以上ある時は、A・Bなどとした。出土地不明のものなどは、所在地のみ記載した。遺跡や遺物を代表すると思われる主な参考文献から作成し、原文に忠実に記載したつもりである。これらの表記は、表3～11までも同様である。

表3　相輪関係地名表

畿内	10	京都府	1	大阪府	3	奈良県	6												
東海道	10	三重県	1	愛知県	2	神奈川県	1	埼玉県	2	千葉県	3	山梨県	1						
東山道	15	滋賀県	4	岐阜県	1	群馬県	1	栃木県	2	茨城県	6	宮城県	1						
北陸道	5	福井県	2	石川県	2	富山県	1			**山陰道**	9	兵庫県	6	鳥取県	1	島根県	2		
山陽道	3	広島県	1	和歌山県	1	徳島県	1			**西海道**	1	福岡県	1			**全　国**	53遺跡		

所在地	遺跡名
京都府	
相楽郡加茂町	山城国分寺跡
北桑田郡京北町	岡上廃寺
大阪府	
羽曳野市野々上	野中寺
大阪市天王寺区	四天王寺
泉南市信南	海会寺跡
柏原市国分東条町	河内国分寺跡
枚方市	九頭神廃寺
堺市	陶邑古窯群MT5―1号
奈良県	
桜井市山田	山田寺
奈良市山町白	山村廃寺(トドコロ廃寺)
北葛城郡王子町	西安寺跡
生駒郡斑鳩町	法隆寺
生駒郡斑鳩町	定林寺
高市郡明日香村	豊浦寺
高市郡明日香村	栗原寺跡
三重県	
三重郡朝日町	縄生廃寺
愛知県	
豊川市八幡町	三河国分寺跡
江南市久野	音楽寺
神奈川県	
海老名市国分	相模国分寺跡
埼玉県	
坂戸市	勝呂廃寺
入間市日高町	高岡寺院跡
児玉郡児玉町	寺山廃寺跡
千葉県	
市原市上高根	荻ノ原遺跡
木更津市大寺	大寺廃寺
市原市国分寺	上総国分寺
山梨県	
東八代郡一宮町	甲斐国分寺跡

所在地	遺跡名
滋賀県	
浦生郡竜王町	雪野寺
草津市下物町	花摘寺廃寺
栗東郡栗東町	狛坂寺跡
東浅井郡琵琶町	満願寺廃寺
岐阜県	
大垣市青野町	美濃国分寺跡
群馬県	
藤岡市金井	風呂ヶ谷窯跡
栃木県	
下都賀郡国分寺町	下野国分寺
河内郡南河内町	下野薬師寺
茨城県	
つくば市	筑波廃寺
稲敷郡江戸崎町	下居山廃寺
真壁郡協和町	新治廃寺
結城市矢畑	結城廃寺
石岡市見地	茨城廃寺
真壁郡真壁町山尾	山尾権現山廃寺（真壁廃寺）
	中台遺跡
宮城県	
遠田郡涌谷町	黄金山神社
仙台市木ノ下	陸奥国分寺跡
福井県	
福井市小浜氏国分	若狭国分寺跡
今立郡今立町	室谷廃寺
石川県	
七尾市池崎町	池崎窯跡
小松市戸津町ヨの部	戸津31号線
富山県	
射水郡小杉町青井谷字丸山	小杉流通業務団地内№19
兵庫県	
伊丹市緑ヶ丘4丁目	伊丹廃寺

所在地	遺跡名
加古川市志方町	札馬47号窯跡
加古川市	中西廃寺
姫路市多田	多田廃寺
姫路市御国野町	播磨国分寺跡
龍野市	中井廃寺
小野市河合町	河合廃寺
加古川市	石守廃寺
城崎郡日高町	但馬国分寺
加古川市	西條廃寺
鳥取県	
倉吉市	伯耆国分尼寺
島根県	
大田市波根町	天王平廃寺
仁多郡仁多町高田字本堂	高田廃寺
岡山県	
浅口郡鴨方町	阿倍山
久米郡久米町	久米廃寺
英田郡佐東町	大海廃寺
広島県	
福山市津之郷町	廃和光寺
豊田郡本郷町	横見廃寺
三次市三次町本郷	平廃寺
御調郡御調町	本郷平廃寺
和歌山県	
田辺市下三栖	三栖廃寺
伊都郡かつらぎ町	佐野廃寺
徳島県	
	立光寺跡
福岡県	
太宰府市	観世音寺境内

表4　奈良三彩出土地名表

畿内	60	京都府	13	大阪府	3	奈良県	44												
東海道	20	三重県	2	愛知県	1	神奈川県	2	埼玉県	2	千葉県	11	東京都	1	山梨県	1				
東山道	27	滋賀県	2	岐阜県	1	長野県	4	群馬県	9	栃木県	2	茨城県	6	福島県	2	宮城県	1		
北陸道	4	福井県	2	石川県	1	富山県	1			**山陰道**	7	兵庫県	4	鳥取県	1	島根県	2		
山陽道	14	岡山県	6	広島県	3	和歌山県	3	徳島県	1	香川県	1			**西海道**	5	福岡県	3	大分県	2
全　国	137遺跡																		

所在地	遺跡名
京都府	
京都市南区	西寺跡
京都市北区	北野廃寺
京都市伏見区	長岡京左京四条四坊
長岡市開田	長岡京五条二坊
都城	十二坪
向日市寺戸町	宝菩提院廃寺
加茂町	山城国分市
城陽市平川	平川廃寺
城陽市久世	久世廃寺
木津町	上津
大阪府	
茨木市安威	大職冠山
大阪市天王寺区	四天王寺
富田林市	新堂廃寺
新堂	
柏原市高井田	鳥坂寺
奈良県	
桜井市阿倍	安倍寺

所在地	遺跡名
桜井市大福	大福
明日香村	坂田寺
山辺郡都祁村	土師器山
山辺郡都祁村	小治田安万呂墓
吉野郡天川村	大峰山寺
七条町	伝
佐紀町～奈良坂	佐保山
平城京	大安寺
平城京	薬師寺
平城京	西大寺

所在地	遺跡名
平城京	西隆寺
平城京	法華寺
平城京	東大寺
平城京	興福寺一乗院
平城京	姫寺
斑鳩町	法隆寺
佐紀町	平城京
左京22地点	平城京
右京4地点	平城京

所在地	遺跡名
三重県	
鳥羽市神島	神島八代神社
明和町	斎宮
愛知県	
豊橋市石巻平野	滝ノ平ｃ二号墳
神奈川県	
川崎市登戸	登戸
平塚市	四之宮下ノ郷
埼玉県	
坂戸町	山田
鶴ヶ町	若葉台
千葉県	
市原市惣社	上総国分寺
市原市国分	上総国分尼寺
市原市字山田橋	坊作
市原市字山王街道	荒久
市原市	不入３号窯
成田市荒海	江地山
八千代市萱田	白幡前
佐原市本矢作	東野
鴨川市江見町	東上牧
館山市国分	安房国分寺
栄町	向台
東京都	
多摩市貝取	多摩ニュータウン・No.264
滋賀県	
大津市南滋賀町	南滋賀廃寺
大津市穴太二丁目	穴太廃寺
岐阜県	
恵那市長島町	正家廃寺
長野県	
松本市神村	下神
箕輪町	中道
佐久市前山	前山中道
上田市	信濃国分寺
群馬県	
境町	十三宝塚
前橋市泉町	檜峯
元総社町	上野国分寺
青梨子町	中島
青梨子町	清里南部
富岡市総社町	山王廃寺
	伝　貫前神社蔵
伊勢崎市	上植木廃寺
藤岡市中	中
福島県	
郡山市小田原	七ツ池
富岡町	小浜代
宮城県	
多賀城市市川	市川橋
石川県	
羽咋市寺家	寺家
富山県	
福岡町木舟	石名田木舟
兵庫県	
島町	丹波三ツ塚
山南町生田	生田
尼崎市猪名寺	猪名寺廃寺
姫寺市辻井	辻井廃寺
岡山県	
岡山市賞田	賞田廃寺
赤田	幡多廃寺
一宮町	神力寺
笹岡市大飛島洲	大飛島
津山市南幸畑	美作国府
熊山町	熊山戒壇
坂出市櫃石	櫃石島
西条市中野	真導廃寺
福山市走島町	宇治島北の浜
広島県	
吉田町	明官地廃寺
和歌山県	
高野口町	北名古曽
打田町東国分	紀伊国分寺
和歌山市	上野廃寺
福岡県	
玄海町	沖之島
筑紫野市水上	宝満山
早良郡	伝
宇佐山市南宇佐	弥勒寺
大分県	
寺植田	伝

表５　多嘴瓶出土地名表

畿内　10　京都府　2　大阪府　1　奈良県　7　　**東海道**　4　愛知県　2　千葉県　1　東京都　1
東山道　2　滋賀県　1　岐阜県　1　　**北陸道**　2　福井県　1　富山県　1　　**山陽道**　1　和歌山県　1
全　国　19遺跡

所在地	遺跡名
京都府	
京都市北区	北野廃寺
向日市寺戸町	宝菩提院廃寺
大阪府	
大阪市天王寺区	四天王寺
奈良県	
佐紀町～奈良坂	佐保山
平城京	薬師寺
平城京	法華寺
平城京	姫寺
斑鳩町	法隆寺
佐紀町	平城京
左京六条三坊十三坪	平城京
愛知県	
名古屋市中区	尾張元興寺跡
	黒笹36号窯
千葉県	
市原市	不入３号窯
東京都	
調布市	上石原遺跡
滋賀県	
大津市南滋賀町	南滋賀廃寺
岐阜県	
国府町	
福井県	
	野中3号窯
富山県	
福岡町木舟	石名田木舟
和歌山県	
和歌山市	上野廃寺

表６　埼仏出土地名表

畿内　49　京都府　7　大阪府　11　奈良県　31　　**東海道**　12　三重県　6　愛知県　5　神奈川県　1
東山道　8　滋賀県　5　長野県　1　茨城県　1　福島県　1　宮城県　1
北陸道　5　福井県　2　石川県　1　富山県　1　新潟県　1
山陰道　5　兵庫県　1　島根県　4　　**山陽道**　8　広島県　3　岡山県　1　和歌山県　3　香川県　1
西海道　2　福岡県　1　大分県　1　　**全　国**　89遺跡

所在地	遺跡名
京都府	
京都市右京区太秦蜂岡町	広隆寺
京都市右京区太秦峰岡町	弁天島経塚
京都市西京区大原野南春日町	南春日町廃寺
城陽市正道	正道廃寺
八幡市大字八幡荘	西山廃寺（足立廃寺）
乙訓郡大山崎町	山城国府
長岡京市	乙訓寺
奈良県	
高市郡高取町	子島寺
高市郡明日香村坂田	坂田寺
高市郡明日香村奥山	奥山久米寺
高市郡明日香村川原	川原寺
高市郡明日香村川原	川原寺裏山
高市郡明日香村橘	橘寺
高市郡高取町壺坂	南法華寺（壺坂寺）
高市郡明日香村小山	紀寺
高市郡明日香村立部	定林寺
生駒郡三郷町勢野	平隆寺
生駒郡斑鳩町法隆寺	法隆寺
桜葛城郡当麻町当麻	当麻寺
北葛城郡当麻町染野	石光寺
吉野郡吉野町山口	竜門寺
宇陀郡菟田野町駒帰	駒帰廃寺
桜井市山田	山田寺
桜井市橋本	青木廃寺
天理市石上	石上寺
天理市樽池町	樽池廃寺
橿原市下明寺	下明寺池
奈良市西大寺町藤ノ森	西隆寺
奈良市秋篠町字小阿弥陀谷	阿弥陀山寺
奈良市西大寺町	西大寺
奈良市雑司町	唐招提寺
奈良市登大路町	興福寺
奈良市北魚屋東町	奈良女子大構内
奈良市古市町	古市方形墳
御所市朝妻	朝妻廃寺
橿原市	藤原宮跡
橿原市	藤原京左京六条三坊
橿原市	藤原京右京七条一坊
大阪府	
枚方市中宮	百済寺
枚方市香里ヶ丘	中山観音寺
柏原市高井田	高井田廃寺
交野市私市	獅子窟寺裏山
羽曳野市古市	西琳寺
交野市大字倉治	岩倉開元寺跡
東大阪市上四条町	神感寺跡
和泉市坂本町	禅寂寺
柏原市大平寺	大平寺
高石市取石	大園
泉南市信達大苗代	海会寺
三重県	
名張市夏見	夏見廃寺
桑名市額田	額田廃寺
四日市市智積	智積廃寺
津市鳥居町	愛宕山古墳
一志郡嬉野町天華町	天華寺廃寺
一志嬉野町藤福寺	藤福寺

所在地	遺跡名
愛知県	
稲沢市稲島町石畑	東畑廃寺
岩倉市稲荷町	御土井廃寺
名古屋市緑区鳴海町赤松町赤	NN259号窯
小牧市大山字郷島	大山廃寺
岡崎市北野	北野廃寺
神奈川県	
小田原市千代	千代廃寺
滋賀県	
大津市滋賀里町甲	崇福寺
蒲生郡蒲生町大字石塔	石塔寺
高島郡新旭町	大宝寺
大津町穴太二丁目	穴太廃寺
大津市田上石居町	石居廃寺
長野県	
飯田市桐林宮洞	桐林宮洞
茨城県	
結城市上山川	結城廃寺
福島県	
白河市	借宿廃寺
宮城県	
仙台市木ノ下町国分寺	陸奥国分寺
福井県	
武生市五分市町	野々宮廃寺
武生市春日野町	王子保窯跡
石川県	
七尾市国分町	能登国分寺
富山県	
小矢部市松永	松永遺跡
新潟県	
三島郡寺泊町竹森	横滝山廃寺
兵庫県	
伊丹市緑ヶ丘	伊丹廃寺
三木市	正法寺山
加西市坂本	一乗寺
鳥取県	
気高郡気高町上原	上原遺跡
倉吉市大原	大原廃寺
東伯町槻下	斎尾廃寺
島根県	
安来市野方町真崎	教昊寺
岡山県	
久米郡久米町大字宮尾字唐臼	久米廃寺
広島県	
深安郡神辺町中条	寒水寺
福山市蔵王町宮ノ前	宮の前廃寺
福山市神辺町東中条字中谷	蛇円山くぐり岩
和歌山県	
伊都郡葛城町佐野	佐野廃寺
橋本市神野々	神野々廃寺
那賀郡桃山町最上	最上廃寺
香川県	
高松市東植田町下司	下司廃寺
福岡県	
	正道遺跡
大分県	
宇佐郡駅館村	虚空蔵廃寺

表 7　方形三尊塼仏出土地名表

奈良県　川原寺　川原寺裏山　橘寺　南法華寺　定林寺　当麻寺　石光寺　竜門寺　駒帰廃寺　青木廃寺　石上寺　奈良女子大構内　藤原京左京六条三坊　藤原京右京七条一坊　坂田寺　古市方形墳
京都府　広隆寺　正道廃寺　西山廃寺　乙訓寺　**大阪府**　百済寺　中山観音寺　禅寂寺　海会寺　**兵庫県**　正法寺山遺跡
三重県　夏見廃寺　智積廃寺　天華寺廃寺　**愛知県**　東畑廃寺　石居廃寺　**福島県**　借宿廃寺　**福井県**　野々宮廃寺　王子保窯跡
石川県　能登国分寺　**鳥取県**　上原遺跡　**広島県**　斎尾廃寺　寒水寺　**和歌山県**　蛇円山くぐり岩　佐野廃寺　**香川県**　下司廃寺

表 8　富山県内出土緑釉地名表

所在地	遺跡名	所在地	遺跡名	所在地	遺跡名
井波町	高瀬	高岡市	美野下	富山市	吉倉B
入善町	じょうべのま	富山市	長岡杉林	小矢部市	道林寺
大沢野町	野沢	富山市	南中田D		

表 9　北陸地方陶硯地名表

所在地	遺跡名	種類
福井県		
福井市太田町		猿面
足羽町	篠尾廃寺	円面
石川県		
加賀市勅使町	法皇山12号横穴	円面
加賀市勅使町	勅使館跡	猿面
加賀市	弓波廃寺	猿面
小松市	戸津17号窯	風字
小松市	白江チョウジャワリ	風字
小松市	白江ネンブツトウ	円面
小松市	白江サンバンワリ	風字・円面
辰口町あぞう	通称城山奥窯	円面
辰口町	湯屋B窯	円面
鶴来町	知気寺	変型
松任市横江町	横江庄家	円面
松任市	無量寺畝田	円面
金沢市	戸水C	風字・円面
宇ノ気町笠島	通称庚申塚	変型
高松町箕打	みやの窯	円面
押水町紺屋町	向野窯	円面
羽咋市柳田	五郎兵衛山窯	円面
羽咋市	寺家	円面
羽咋市	上江	円面
小松市他	漆町遺跡群	風字
輪島市稲舟町	通称カラカネ	円面
松波町	不動寺	風字
富山県		
高岡市蓮華寺町		長方
小矢部市平桜町	小森谷	変型
小矢部市	松永	円面
小矢部市	杉谷内床ノ山A	円面
砺波市	福山窯	円面
小杉町	流団No.16　2号窯	円面
小杉町	流団No.18　C地区	円面
富山市	平岡窯	円面
富山市	古沢3号窯	円面
富山市	古沢4号窯	円面
富山市	古沢5号窯	円面
富山市	金草3号窯	円面
上市町	東江上	円面
立山町	釜谷窯	円面
魚津市	佐伯	風字
入善町	じょうべのま	風字
新潟県		
新井市	栗原	円面
三和村	原山窯	円面
栄町	貝喰新田長畑	円面
豊浦町	滝沢堤下窯	円面
豊浦町	竹ご万代・天王新田曽根	円面
羽茂町小泊	堂ノ上窯	風字
羽茂町	亀畑窯	風字
羽茂町	小泊下口沢窯	変型
羽茂町大橋字西方水替場		円面
真野町新田字山方	通称庚門塚	風字
真野町豊田字小坪	浜田	円面
畑野町宮川	後山江又木	円面

表10　国分寺一覧

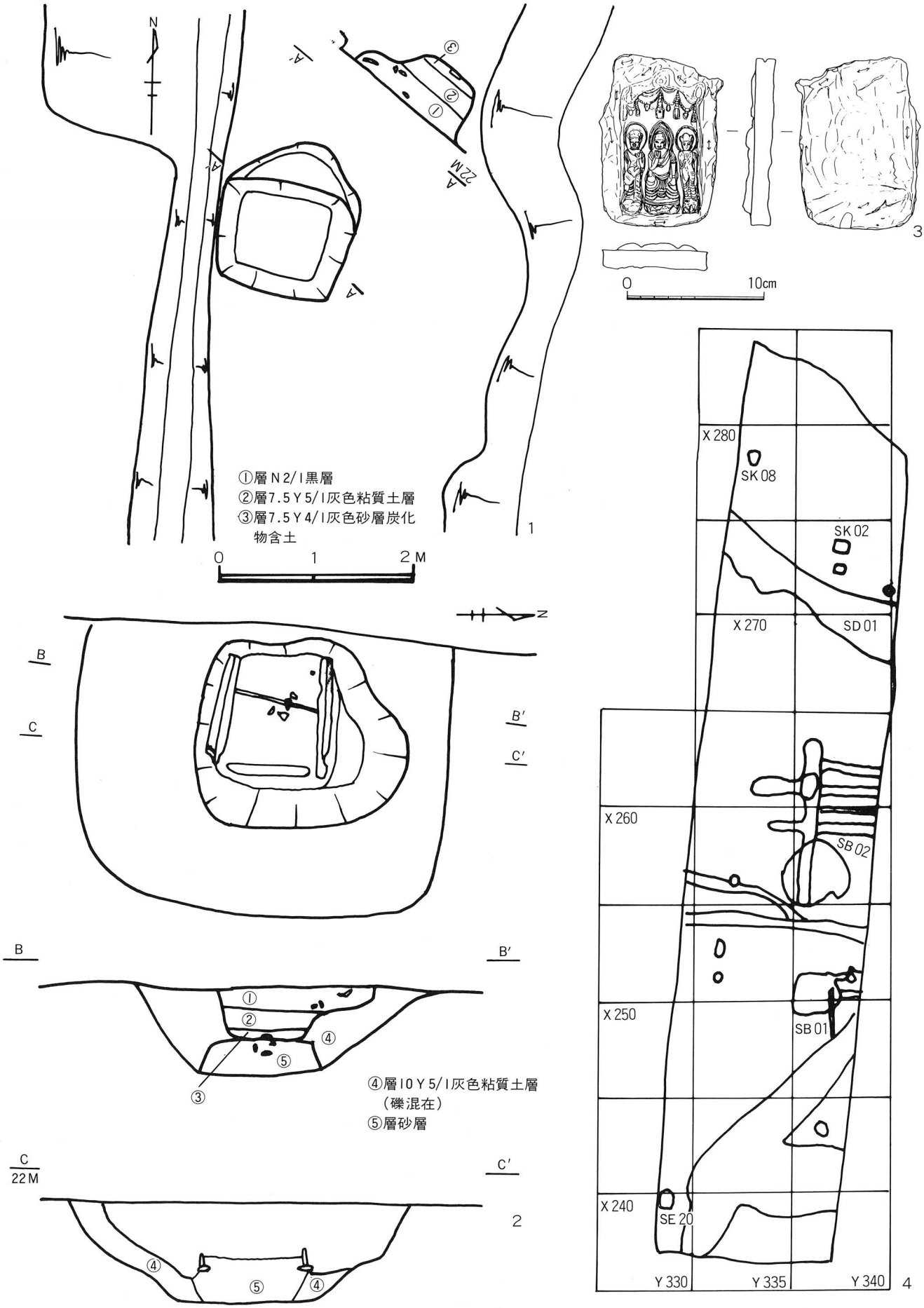
奈良県	東大寺　大和国分寺
	大和国分尼寺　法華寺
京都府	山城国分寺　山城国分尼寺
大阪府	摂津国分寺　河内国分寺
	河内国分尼寺　和泉国分寺
	三重県　伊賀国分寺　伊賀国分尼寺
	伊勢国分寺　伊勢国分尼寺
	志摩国分寺
愛知県	尾張国分寺　尾張国分尼寺
	三河国分寺　三河国分尼寺
静岡県	遠江国分寺　遠江国分尼寺
	片山廃寺（駿河国分寺）　片山廃寺（駿河国分尼寺）
	宮川瓦窯址（片山廃寺瓦窯）
	伊豆国分寺
	伊豆国分尼寺　三島市六ノ乗
山梨県	甲斐国分寺　甲斐国分尼寺
神奈川県	相模国分寺　相模国分尼寺
	千代廃寺
東京都	武蔵国分寺　武蔵国分尼寺
埼玉県	武蔵国分寺瓦窯（新久窯・新沼窯・八瀬里工房）
千葉県	安房国分寺　上総国分寺（上総国分尼寺）　下総国分寺（下総国分尼寺）
茨城県	常陸国分寺　常陸国分尼寺
滋賀県	近江国分寺（甲賀寺）近江（石山）国分寺　近江国分寺（瀬田廃寺）
岐阜県	美濃国分寺　飛騨国分寺
	飛騨国分尼寺
	長野県　信濃国分寺　信濃国分尼寺
群馬県	上野国分寺　上野国分寺
	上野国分尼寺
栃木県	下野国分寺　下野国分尼寺
	下野国分寺瓦窯（東山瓦窯）
宮城県	陸奥国分寺　陸奥国分尼寺
山形県	出羽国分寺
福井県	若狭国分寺　若狭国分尼寺
	越前国分寺
石川県	能登国分寺　能登国分尼寺
	加賀国分寺
富山県	越中国分寺
新潟県	佐渡国分寺　越後国分尼寺
兵庫県	播磨国分寺　播磨国分尼寺
岡山県	備前国分寺　備前国分尼寺
	備中国分寺　備中国分尼寺
	美作国分寺　美作国分尼寺
広島県	備後国分寺　備後国分尼寺
	安芸国分寺　安芸国分尼寺
山口県	周防国分寺　周防国分尼寺
	長門国分寺　長門国分尼寺
京都府	丹波国分寺　丹波国分尼寺
	丹後国分寺
兵庫県	但馬国分寺　但馬国分尼寺
	淡路国分寺　淡路国分尼寺
鳥取県	因幡国分寺　因幡国分尼寺
	伯耆国分寺　伯耆国分尼寺
島根県	出雲国分寺　出雲国分尼寺
	隠岐国分寺　隠岐国分尼寺
	石見国分寺　石見国分尼寺
和歌山県	紀伊国分寺
徳島県	阿波国分寺　阿波国分尼寺
香川県	讃岐国分寺　讃岐国分尼寺
愛媛県	伊予国分寺　伊予国分尼寺
高知県	土佐国分寺
福岡県	筑前国分寺　筑前国分尼寺
	筑後国分寺　筑後国分尼寺
佐賀県	肥前国分寺　肥前国分尼寺
熊本県	肥後国分寺　肥後国分尼寺
福岡県	豊前国分寺　豊前国分尼寺
大分県	豊後国分寺　豊後国分尼寺
宮崎県	日向国分寺　日向国分尼寺
鹿児島県	大隅国分寺　大隅国分尼寺
	薩摩国分寺
長崎県	壱岐国分寺　対馬国分寺

表11　富山県内瓦塔出土地名表

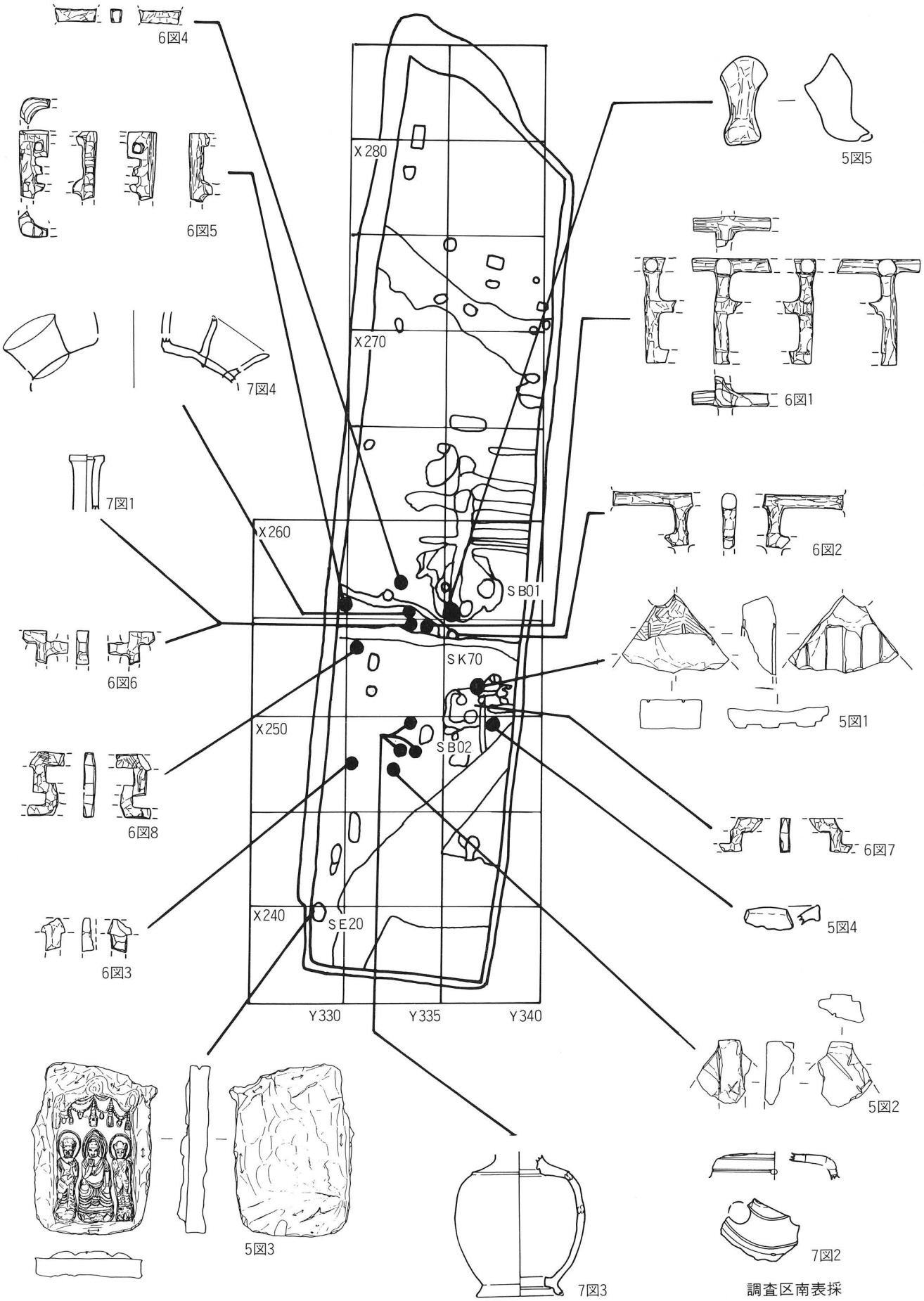
1	富山市山本	室住池Ⅰ窯跡	窯跡　2	陶塔ー
	全て土師質に焼成　屋根・行基葺　裏側の宮越は垂木？			
2	氷見市伊勢大町	岩上	集落　1	
3	礪波市上和田	松山		
4	礪波市福山	福山１号窯跡	窯跡　6	
5	小矢部市蓮沼	蓮沼千場	散布地　1	
6	小矢部市松尾	松尾談議所	散布地　6	
7	中新川郡立山町上末	上末窯跡	窯跡　1	
8	東礪波郡井波町高瀬	高瀬	荘園　6	
9	高岡市常国	常国狐塚	集落　1	奈良
10	富山市山本	明神Ⅲ地区	窯跡　30	
11	富山市杉林	長岡杉林	集落　3	
12	礪波市増山	増山№５地区	窯跡　1	屋蓋
	部の破片→６例目（当時）			
13	小矢部市杉谷	杉谷内床ノ山	散布地　5	
14	福岡町石名田木舟	石名田木舟	飛鳥様式卍崩表現	
	高欄　屋蓋部　初層階内陣（阿弥陀三尊像：同範例兵庫県三木市正法寺山）　遺跡は、小矢部市にまたがる			

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡（1/50,000）

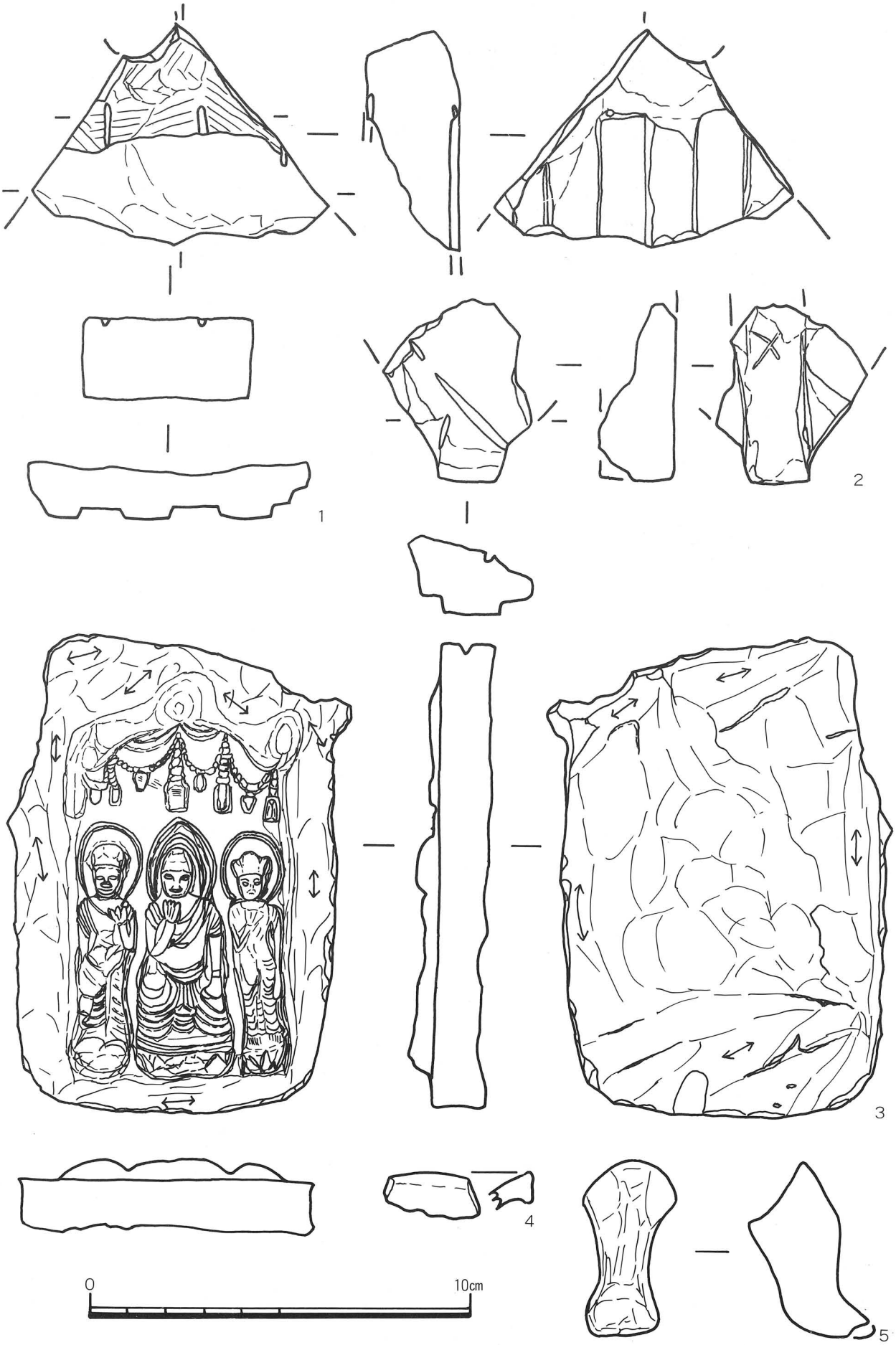
第２図　調査区割りと遺構平面図（1/300）



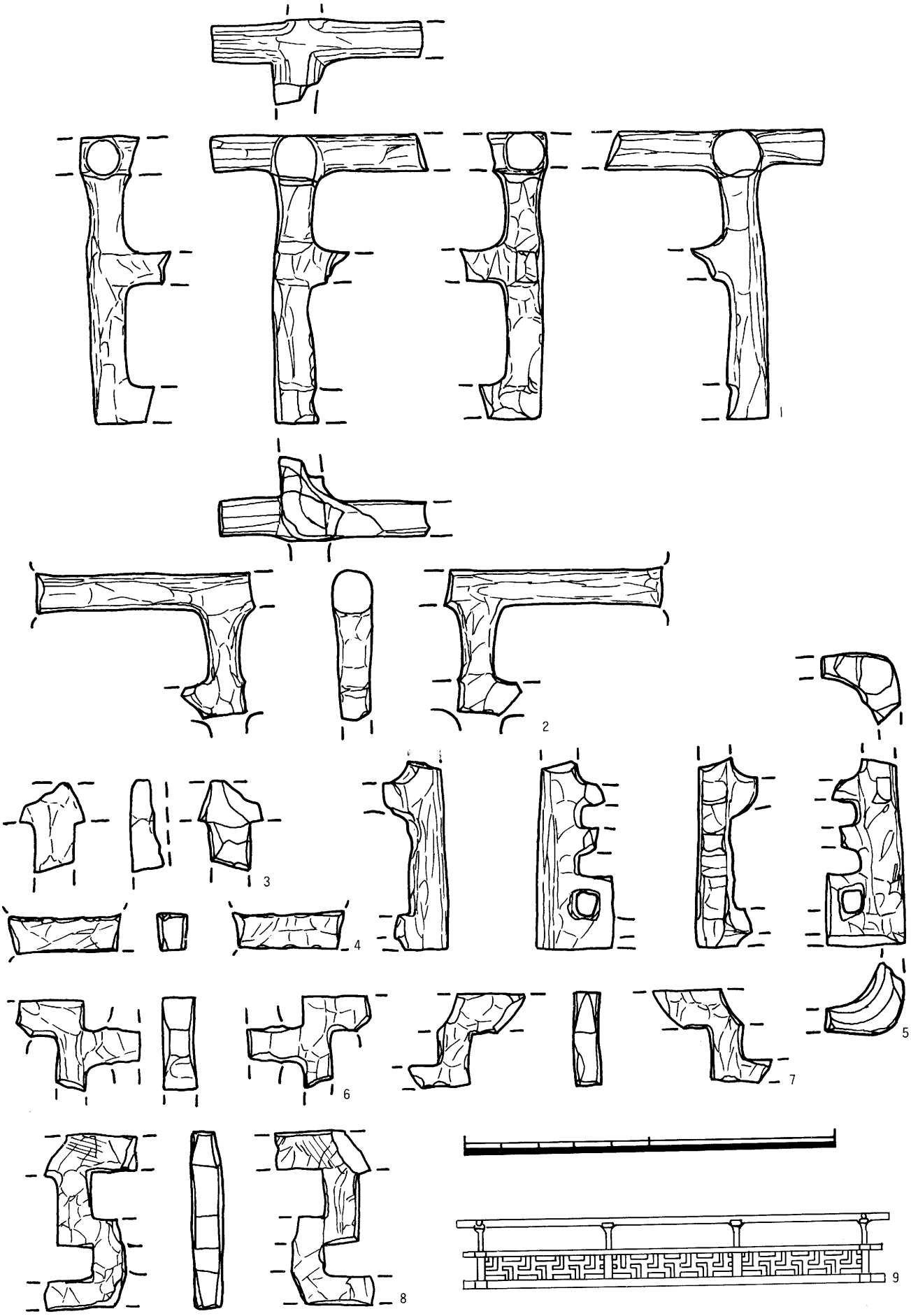
第３図　遺構実測図　１・２　ＳＥ20平面・断面図（1/100）３　ＳＥ20出土瓦塔：阿弥陀三尊像（1/4）
４　ＳＥ20出土位置と主な遺構概略図（1/600）



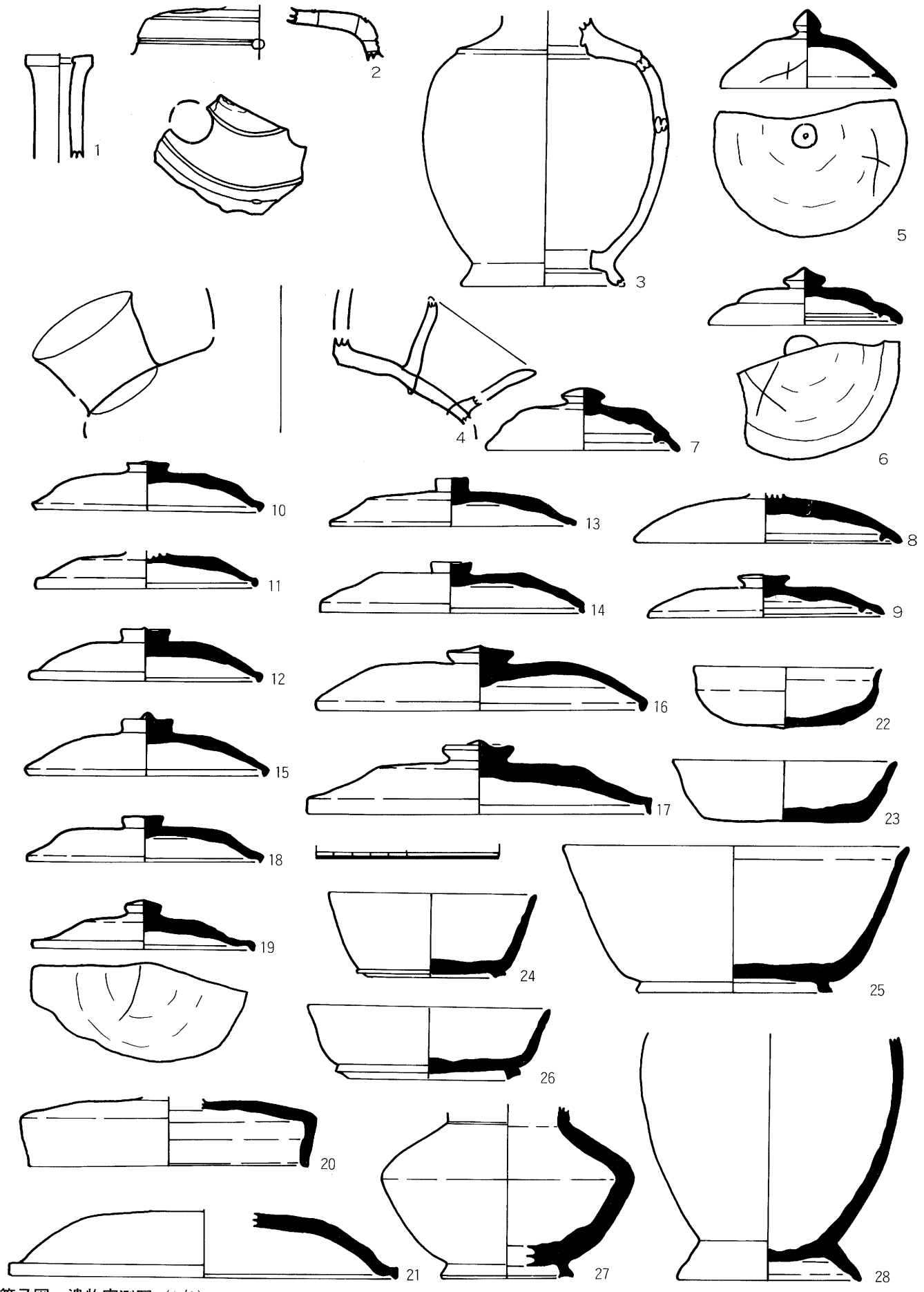
第４図　遺構実測図　瓦塔他出土位置（1/600）



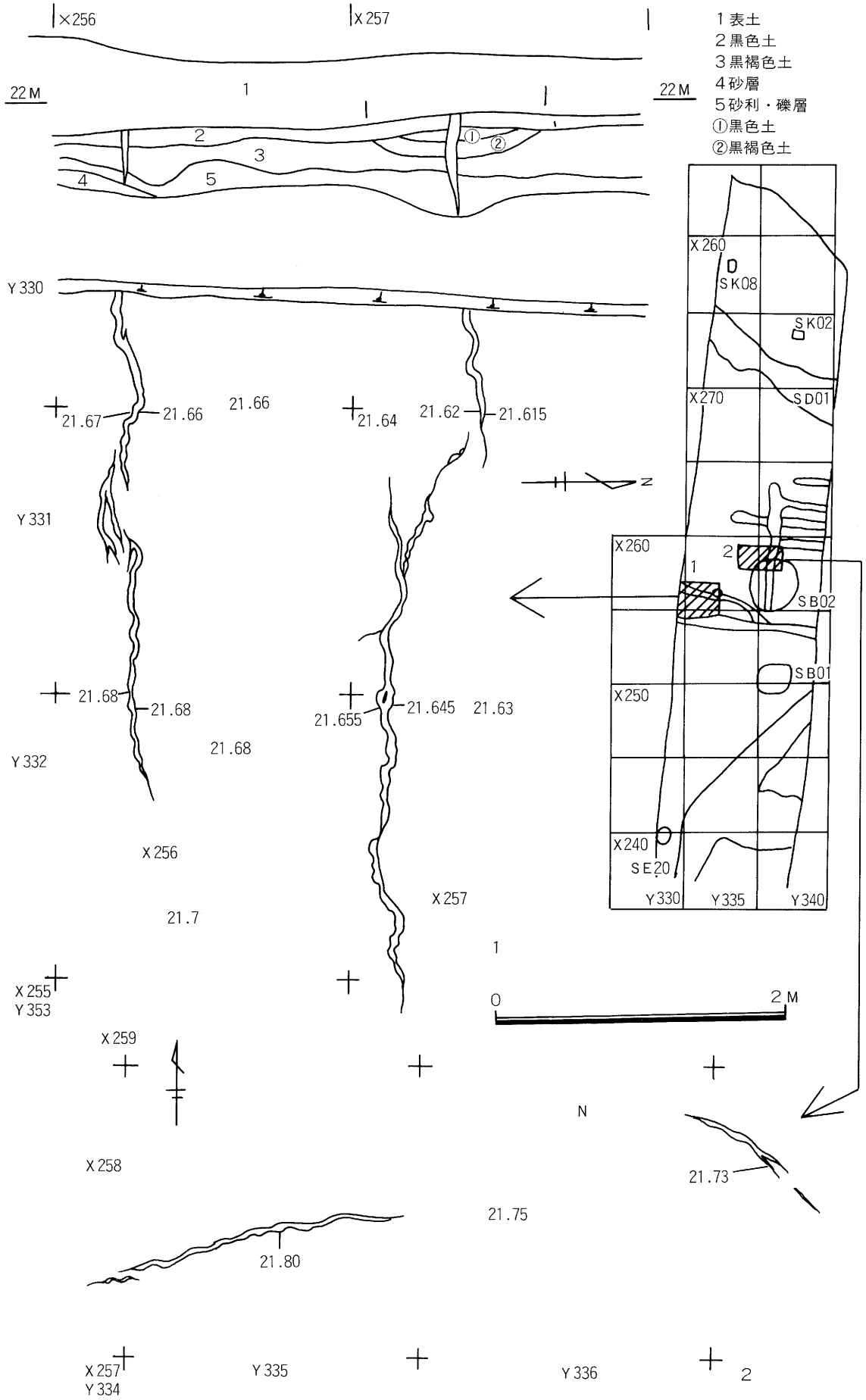
第５図　遺物実測図（2/3）　1　瓦塔：屋蓋部（X252Y338）　2　瓦塔：屋蓋部（X248Y333）　3　瓦塔：阿弥陀三尊像（ＳＥ20）
4　奈良三彩水瓶（分析資料２：X250Y331）　5　奈良三彩火舎（分析資料１：X256Y336）



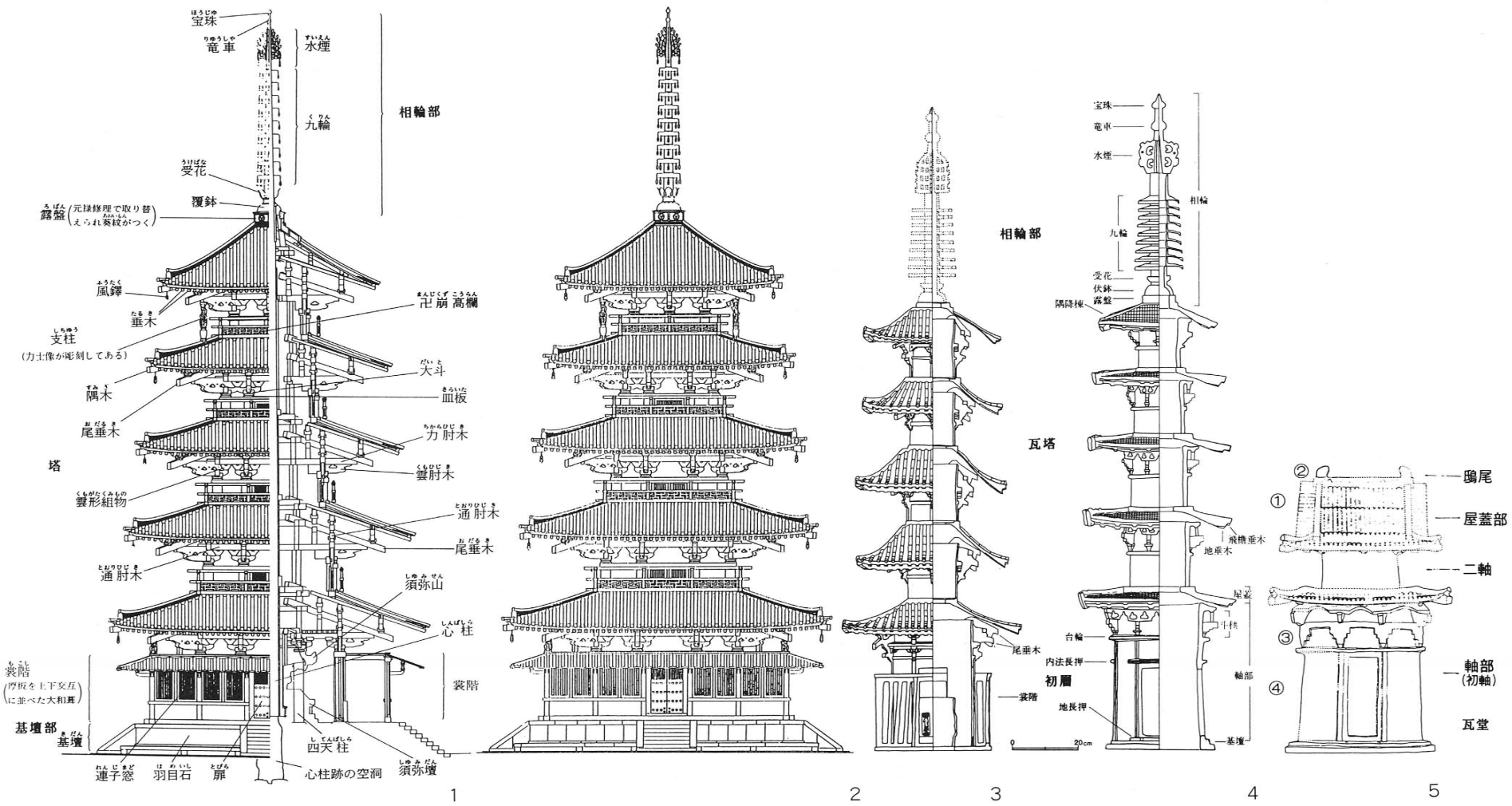
第６図　遺物実測図 (2/3)　瓦塔：飛鳥様式卍崩し高欄　1（X254Y333・X253Y331）2（XSK70）3（X248Y331）4（X257Y330）5（集中区No.53）6（X255Y334）7（SB1）8（X254Y331）9 参考　法隆寺高欄模式図



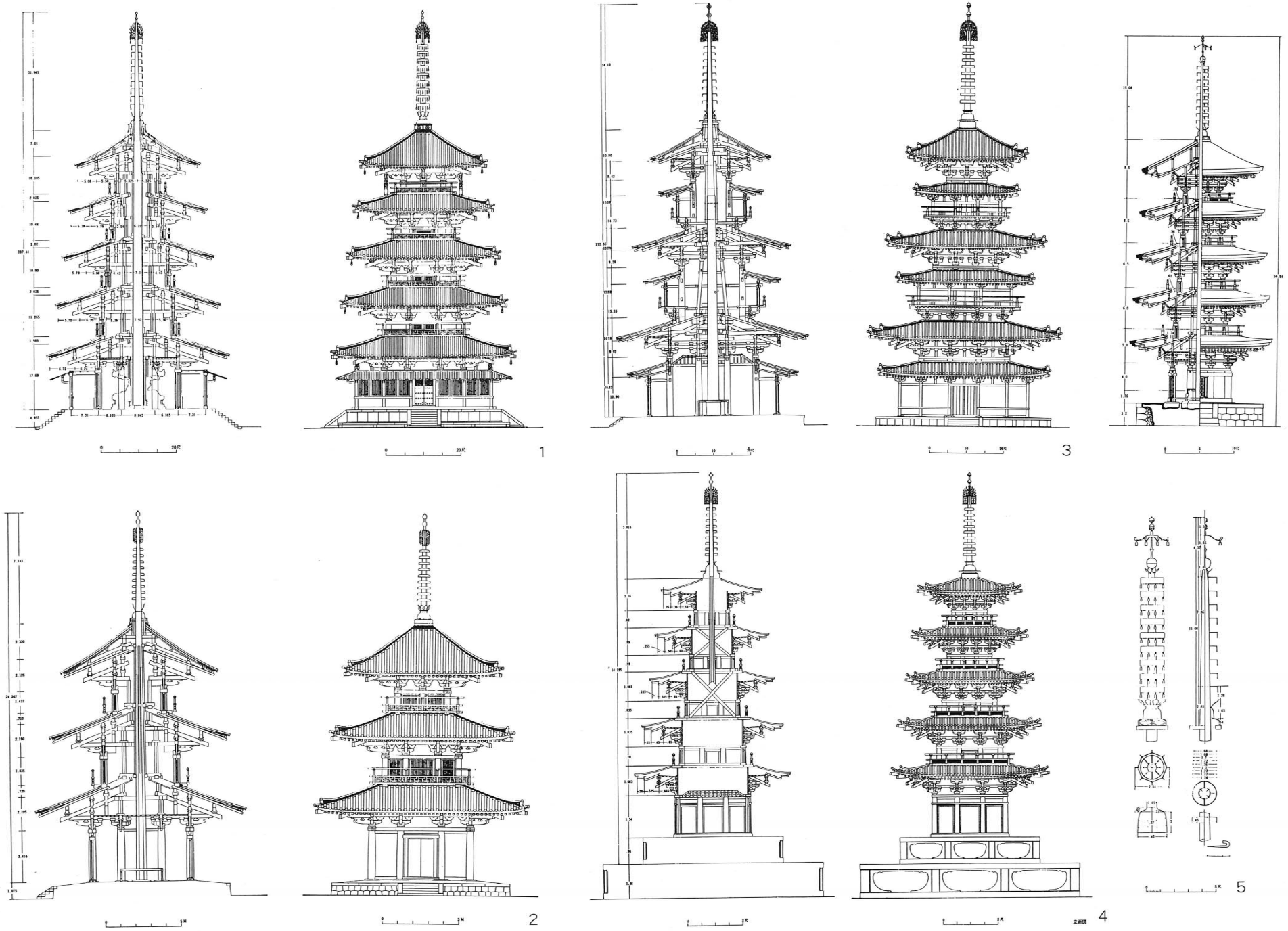
第７図　遺物実測図（1/2）　1 水瓶（X255Y333）2 香炉（表採）3 水瓶（X248Y331・X250Y338・X249Y333）4 多嘴瓶（X256Y333）5～21 須恵器蓋 5・6（SB1）7（X251Y336）8（X257Y338）9（X253Y337）10（集中区No.23）11（X253Y332）12（X243Y337）13（X252Y337）14（SD10）15（X256Y334）16（X256Y339）17（X257Y339）18（X255Y330）19（X255Y330）20（SK73）21（集中区No.6）22～26 須恵器杯身 22（集中区No.67）23（集中区No.17）24（X249Y333）25（集中区No.16）26（X247Y335）27・28 須恵器壺 27（X248Y336）28（X250Y334）



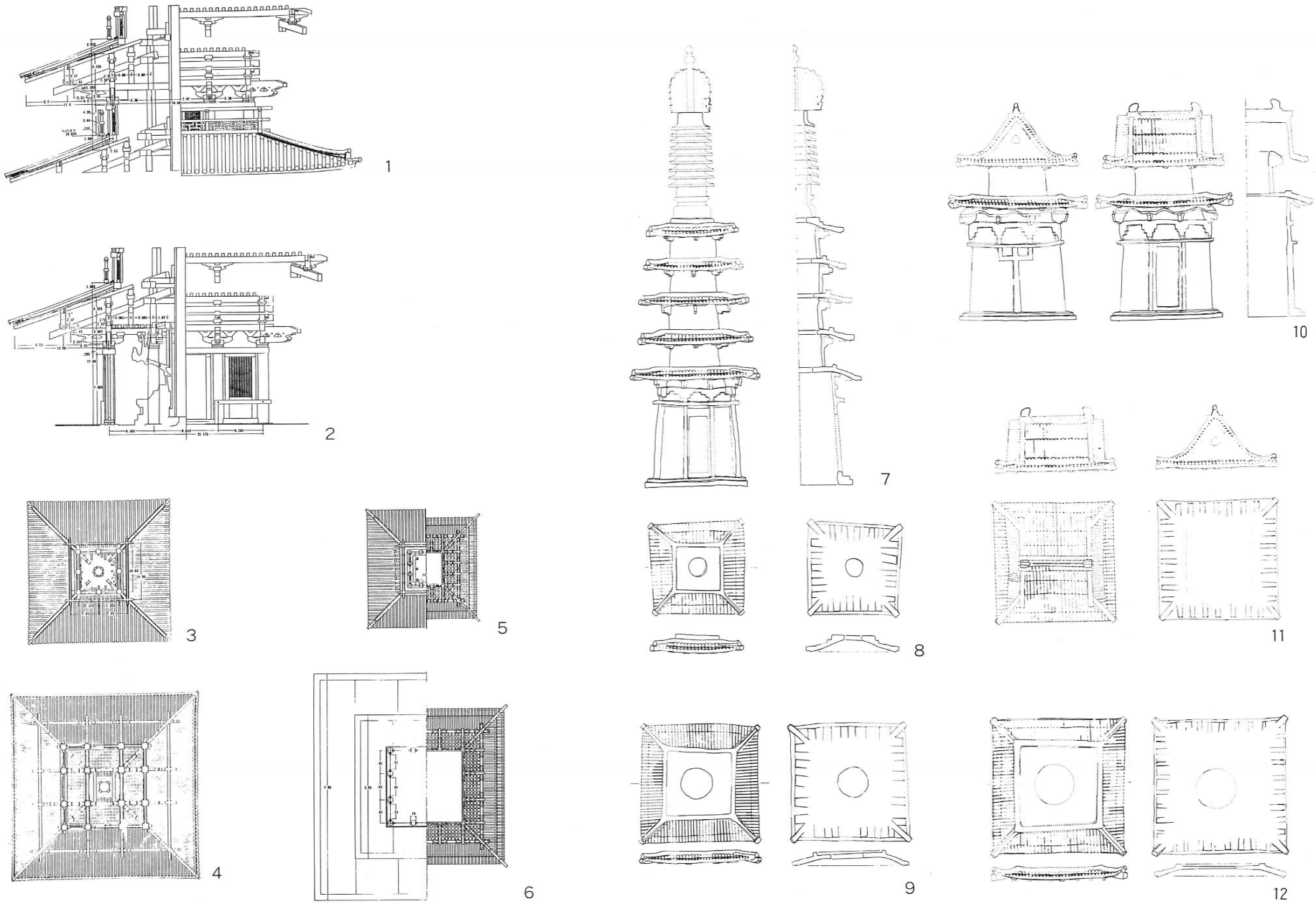
第8図　遺構実測図　噴砂跡（1/20）　1　X255～257　Y330～333　2　X257～259 Y334～337



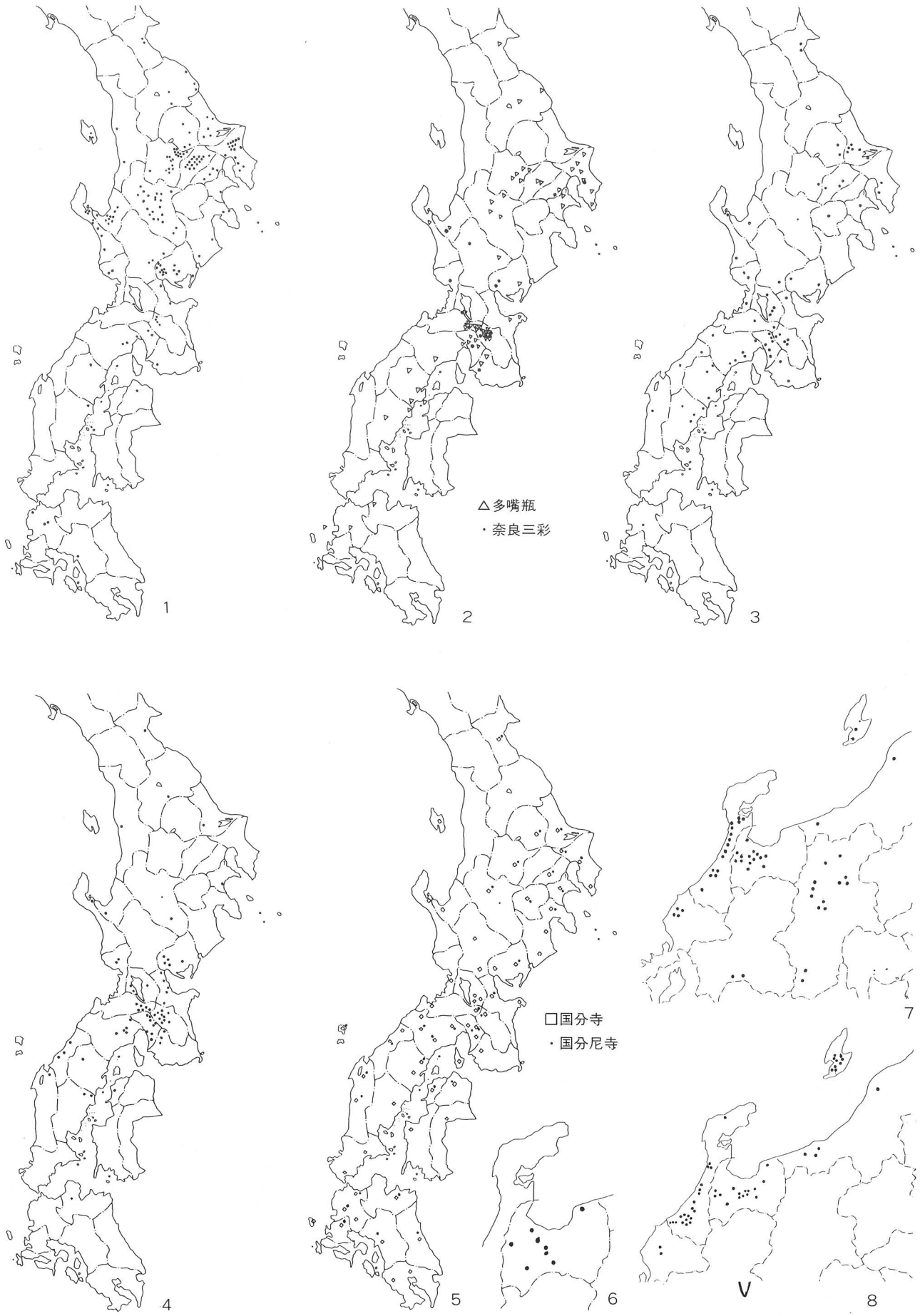
第９図　参考図　建物・瓦塔の部位名称 1　法隆寺５重塔（国宝）部分名称　2　法隆寺５重塔（国宝）全体図　3　静岡県三ヶ日町出土瓦塔（国宝）全体図　4　東京都東村山出土瓦塔（国宝）全体図　5　埼玉県美里町東山遺跡出土瓦堂（国重要文化財）全体図　（以上一部加筆編集）



第10図　参考図　建物と相輪 1　法隆寺５重塔（国宝）全体図（左断面図：右立面図）　2　発起寺３重塔（国宝）全体図（左断面図：右立面図）　3　薬師寺５重塔（国宝）全体図（左断面図：右立面図）
4　海龍王寺５重塔小塔（国宝）全体図（左断面図：右立面図）　5　室生寺５重塔（国宝）全体図（上立面・断面図：下相輪詳細図）（以上一部加筆編集）



第11図　参考図　建物と瓦塔の初層と５層 1～4 法隆寺５重塔（国宝） 1 二重詳細図 2 初層詳細図 3 五重平面図 4 初層見上図 5・6 海龍王寺５重塔小塔（国宝） 5 五重平面・見上図 6 初層平面・見上図 7～12 埼玉県美里町東山遺跡出土瓦塔・瓦堂（埼玉県指定文化財） 7 瓦塔全体図（左立面図：右断面図） 8 瓦塔五層（左平面図：右見上図） 9 瓦塔初層（左平面図：右見上図）10瓦堂全体図（左側面図：中央正面図：右断面図）11 瓦堂二層（左平面図：右見上図） 12 瓦堂初層（左平面図：右見上図）（以上一部加筆編集）



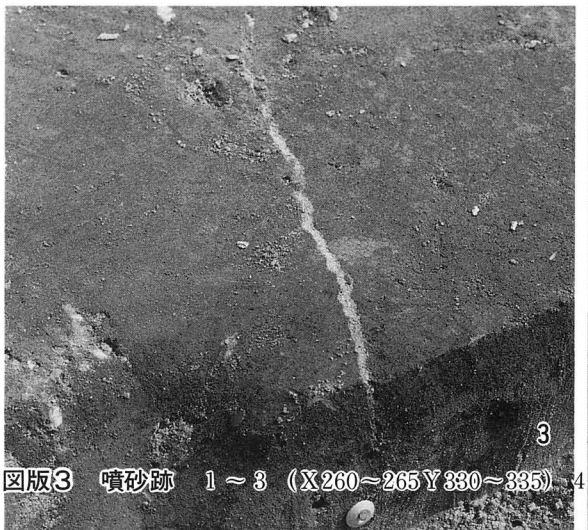
第12図　瓦塔他の出土位置と分布 1 瓦塔　2 多嘴瓶と奈良三彩　3 相輪　4 塼仏　5 国分寺と国分尼寺　6 県内出土緑釉　7 北陸地方の瓦塔　8 北陸地方の陶硯

1

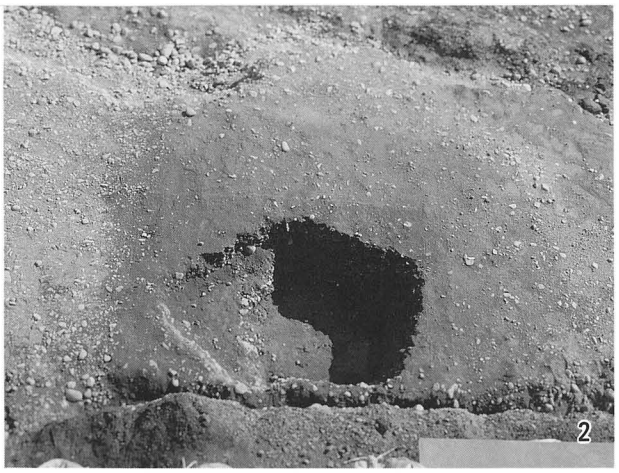
2

図版1　遠景　1南より　2西より

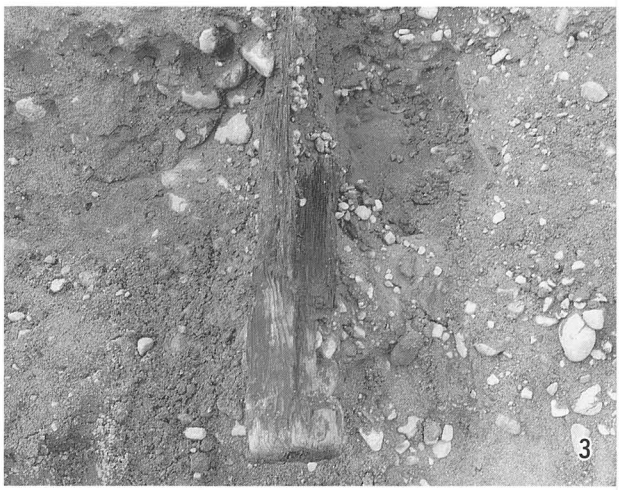
図版２　遺物集中区出土状況（X 260～265 Y 330～335）



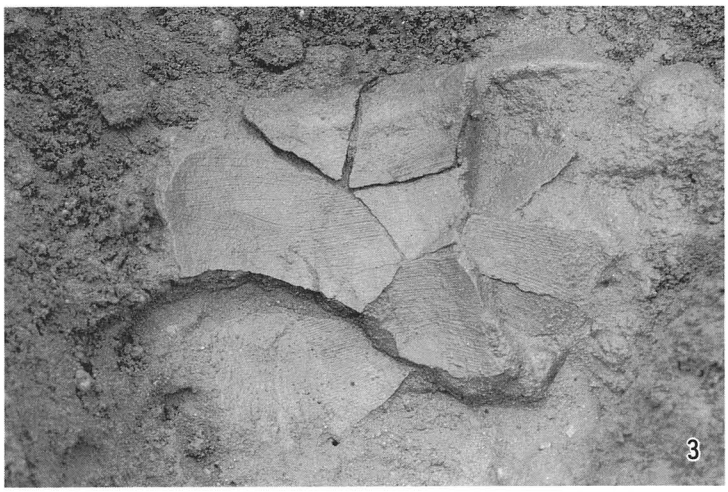
図版3　噴砂跡　1～3（X260～265Y330～335）4（X257Y337）1 北より 2 東より 3 断面東より 4 西より

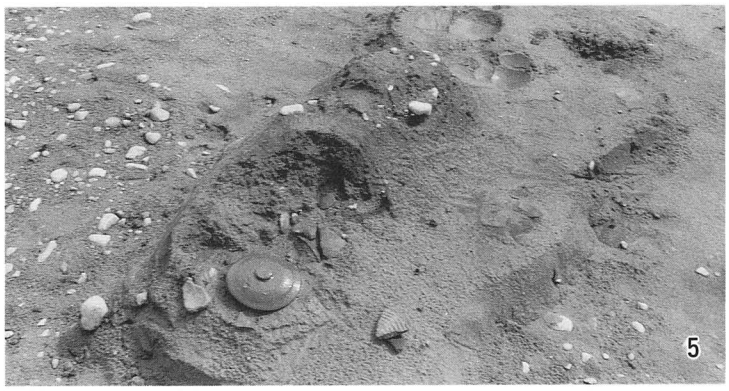


図版4　SE20　1 東より　2 西より　3 阿弥陀三尊像取上痕跡　4 阿弥陀三尊像他出土状況南より

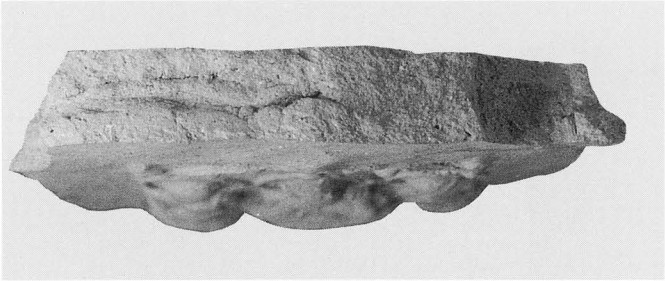


図版5　SE20　1・2 断割状況東より　3～5 井戸枠



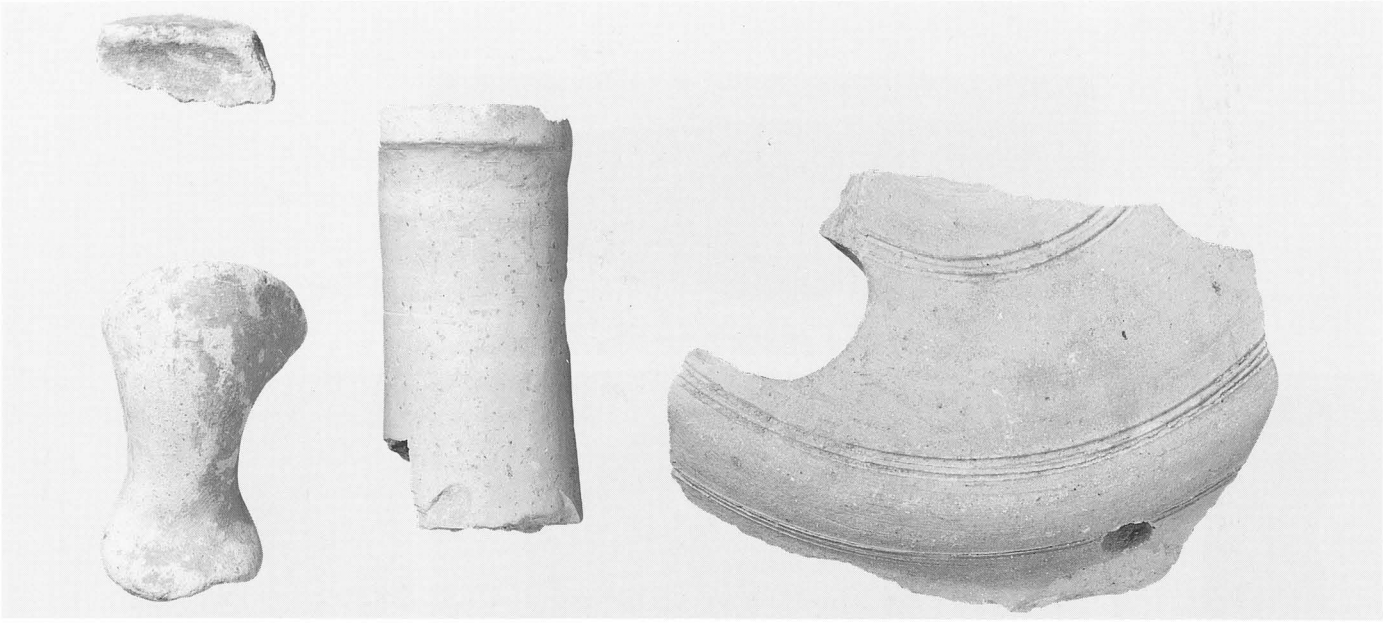


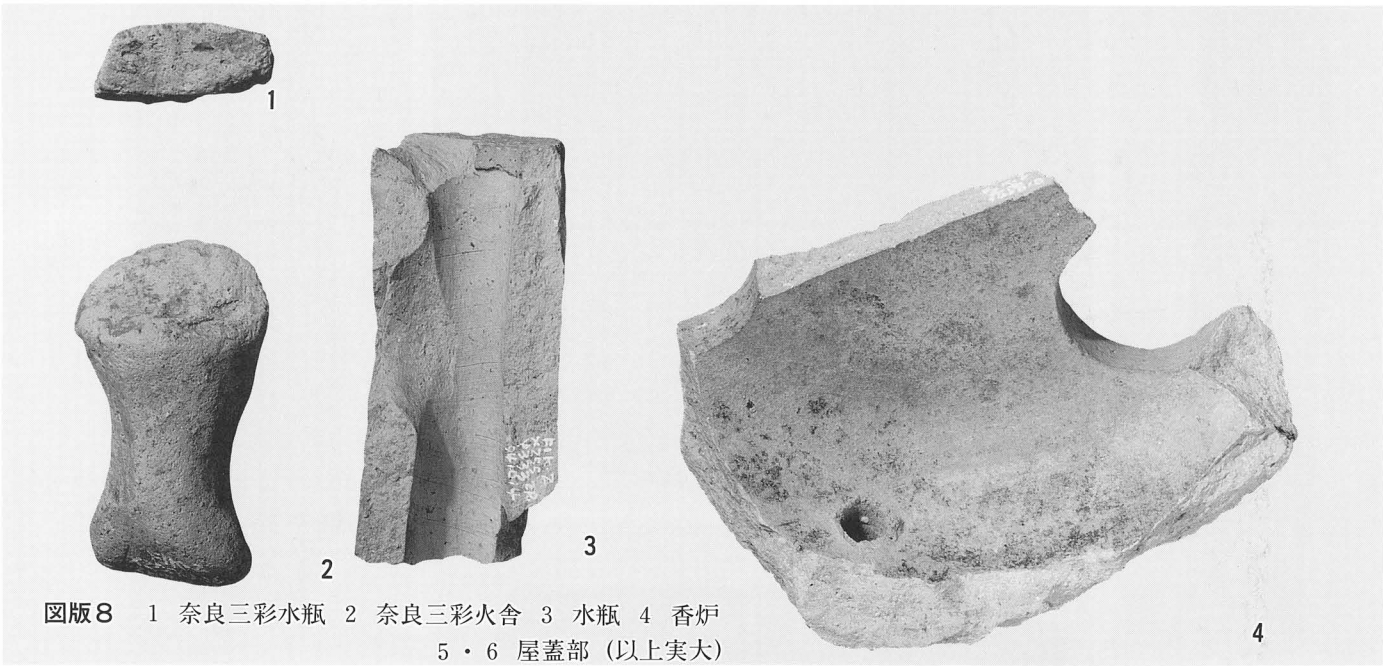
図版６　遺物出土状況　１・２　SK70卍崩し高欄　３　SB１Ｐ２土師器椀　４　集中区No.８多嘴瓶
５　集中区No.25須恵器他　６　集中区No.37須恵器杯蓋　７　SD１越前甕



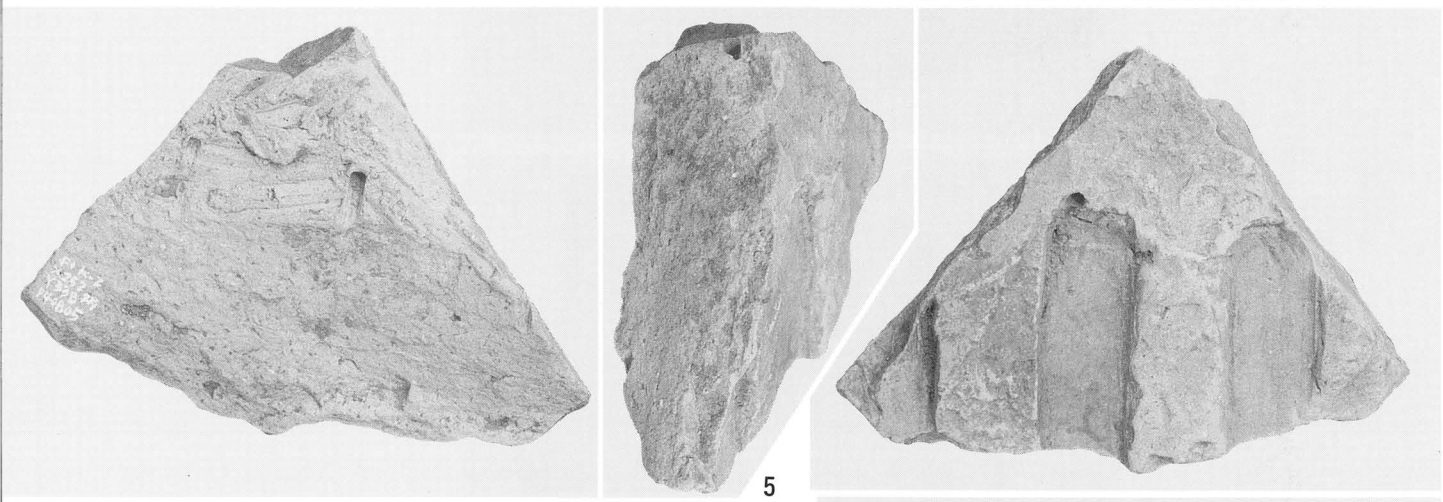
図版７

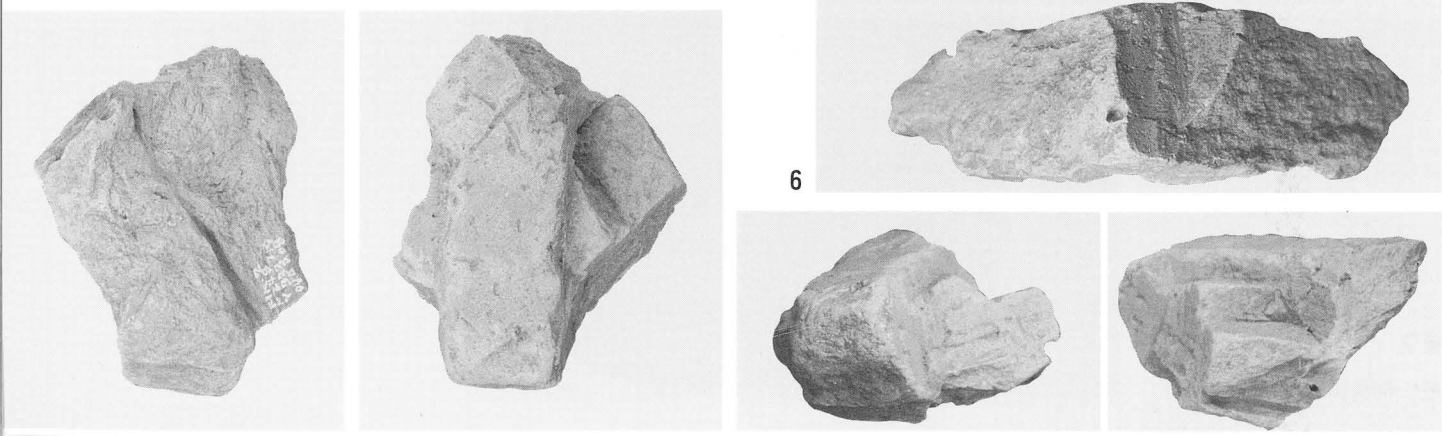
瓦塔：阿弥陀三尊像（実大）

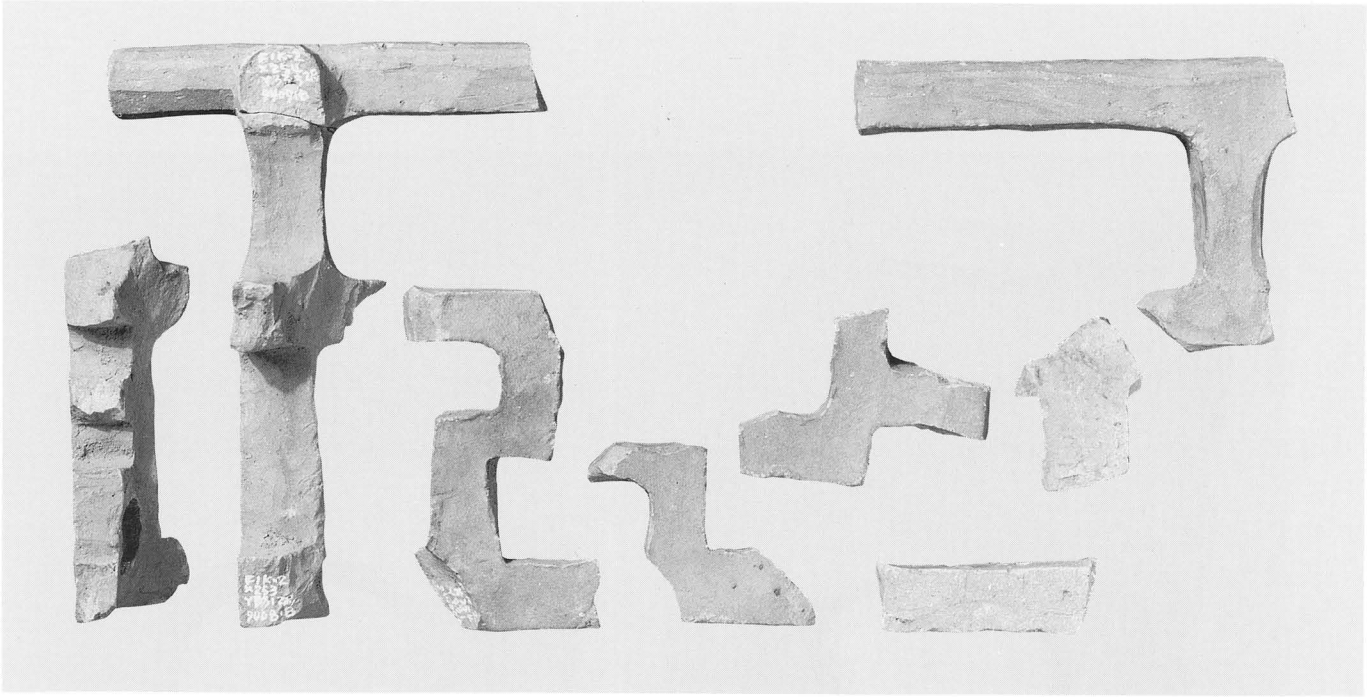


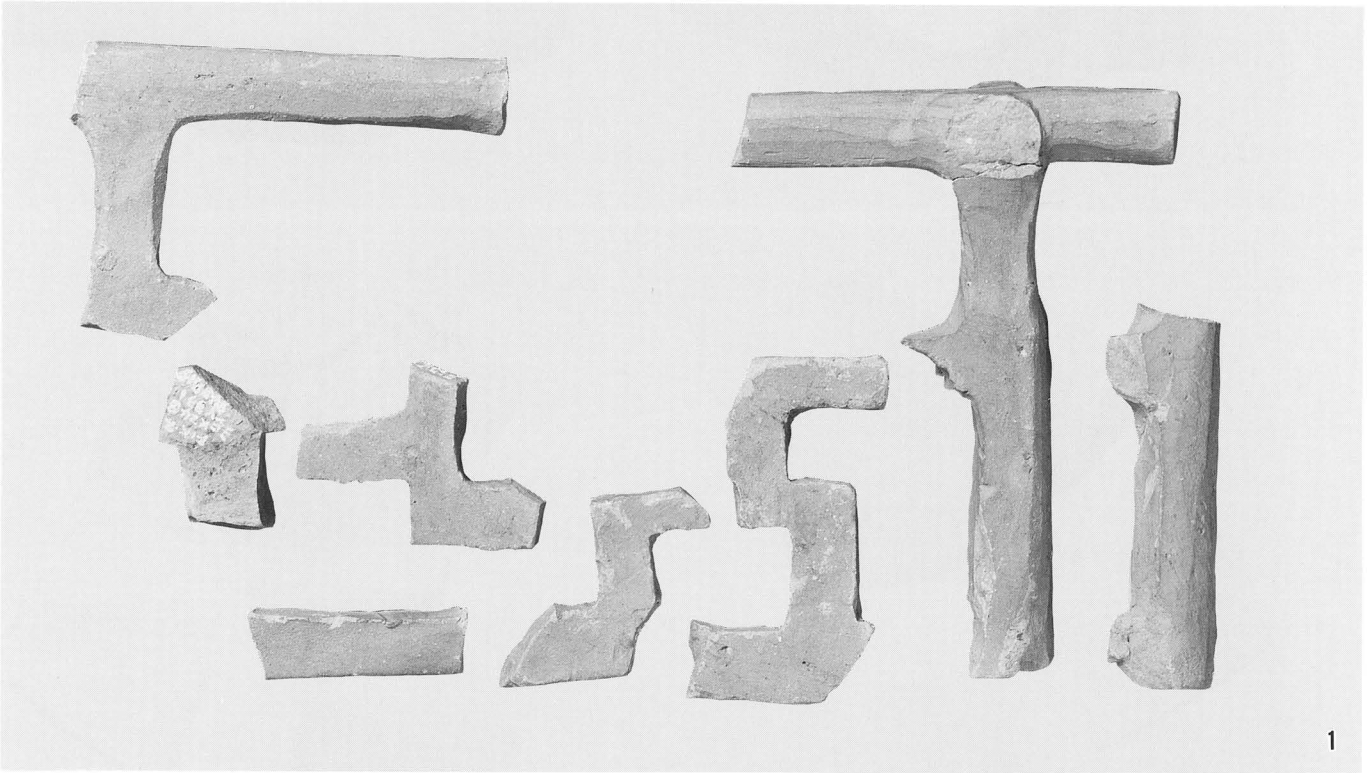


図版8　1 奈良三彩水瓶　2 奈良三彩火舎　3 水瓶　4 香炉
5・6 屋蓋部（以上実大）



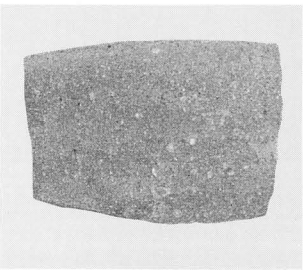


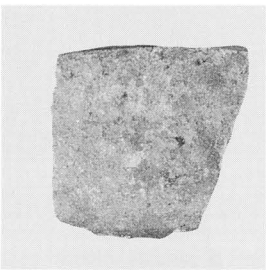


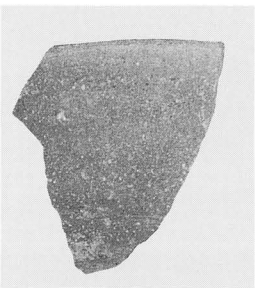


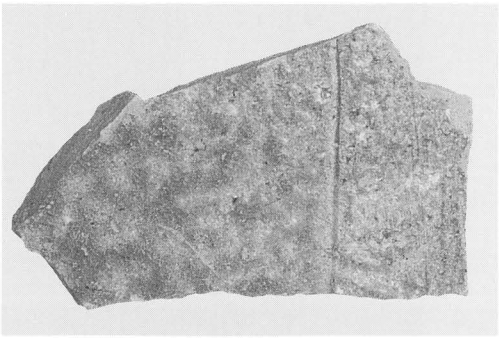
1

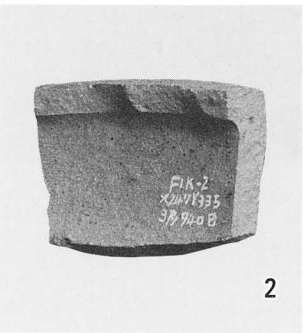
図版９　1 飛鳥様式卍崩し高欄　2 合子（X247Y335）　3 合子（分析資料３：X251Y331）
4 合子（表採）　5 須恵器壺（X248Y333）　（以上実大）





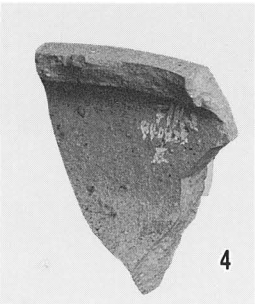






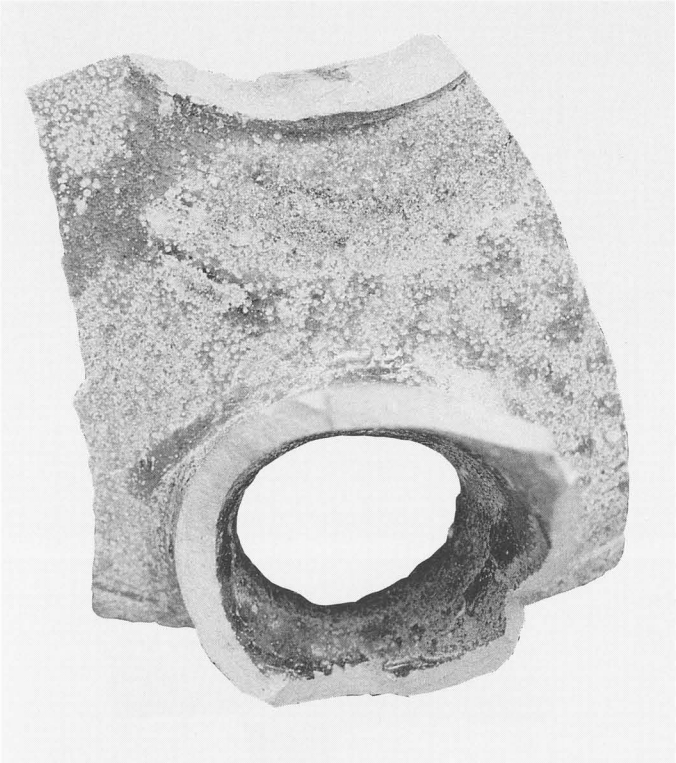
2

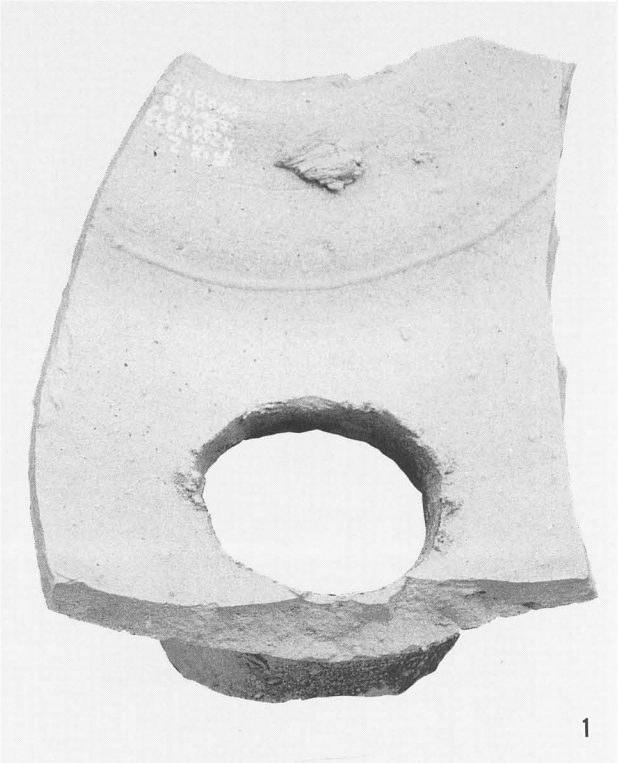
3

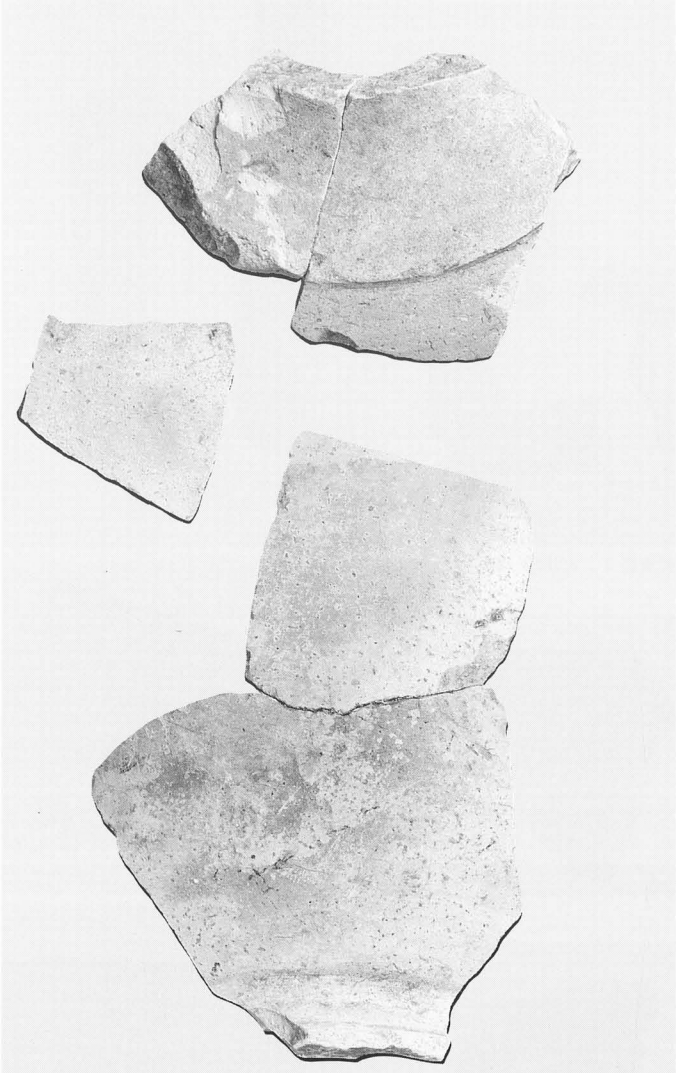


4

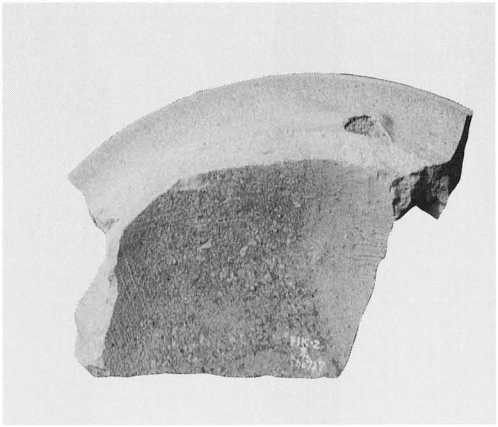
5

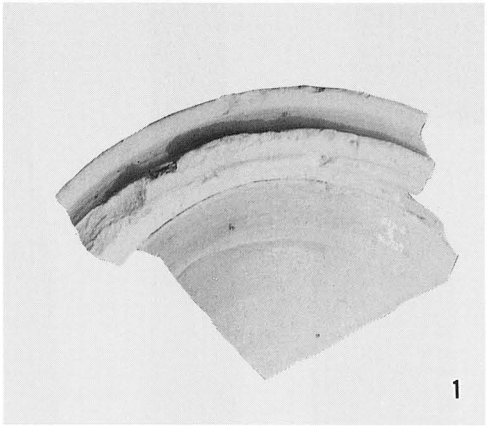


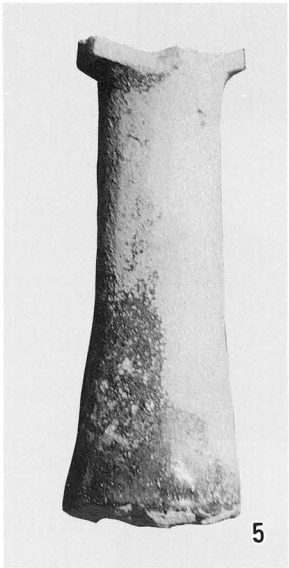


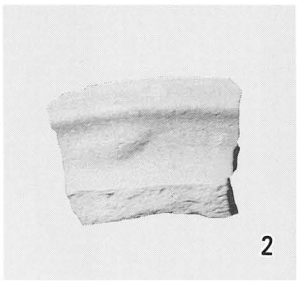


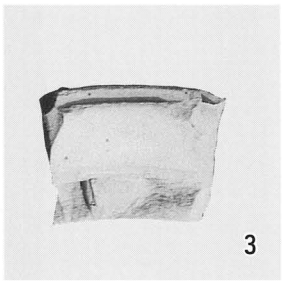
図版10　1　多嘴瓶　2　水瓶（以上実大）

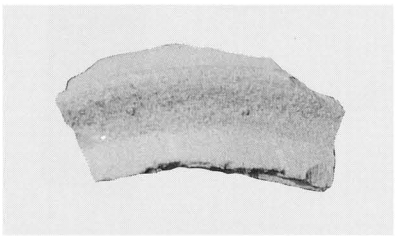


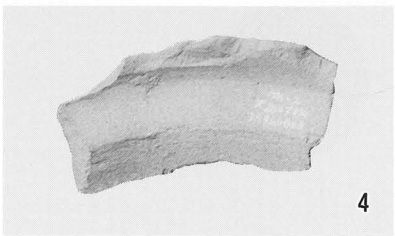


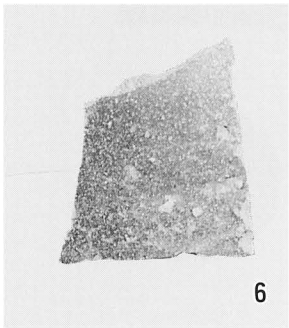


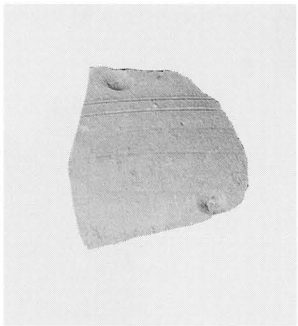


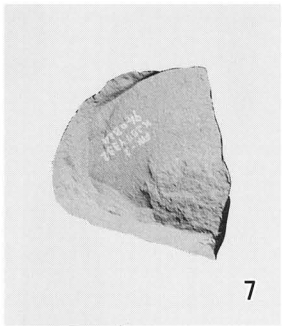


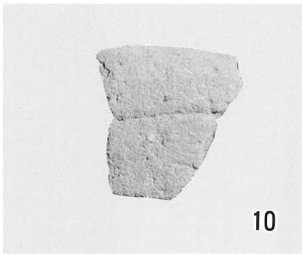


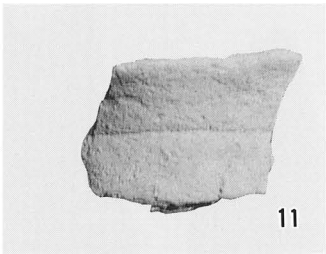


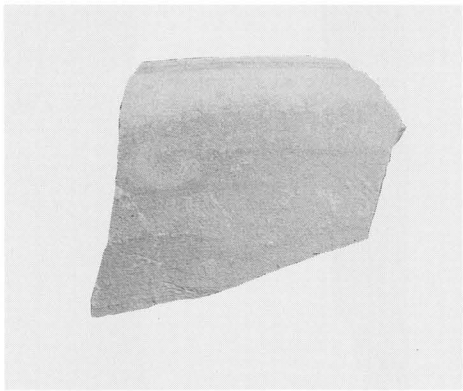


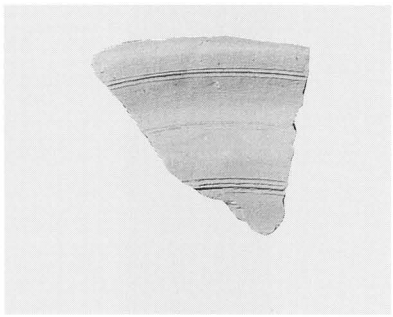


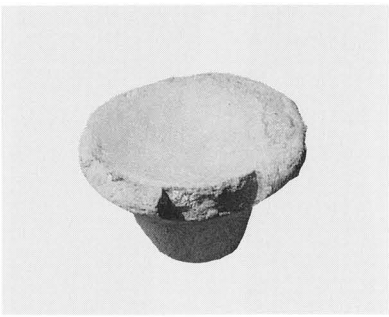


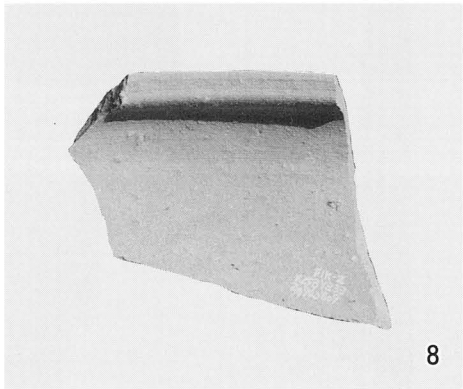


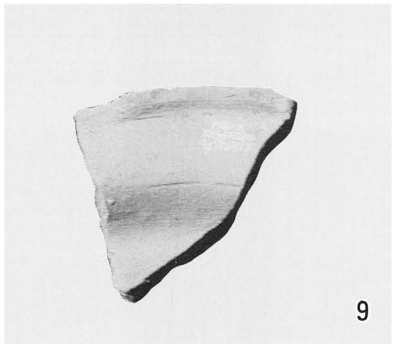




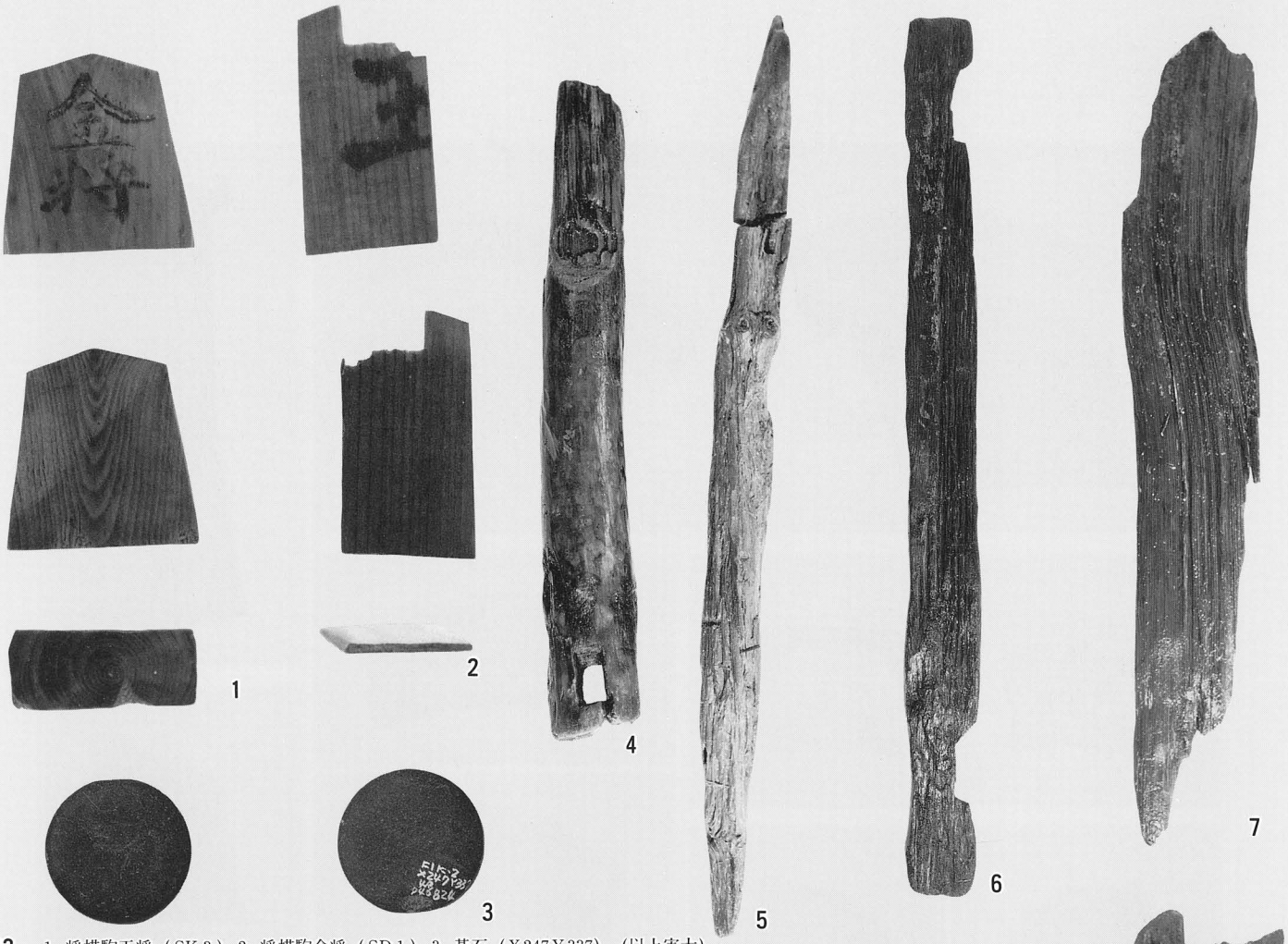




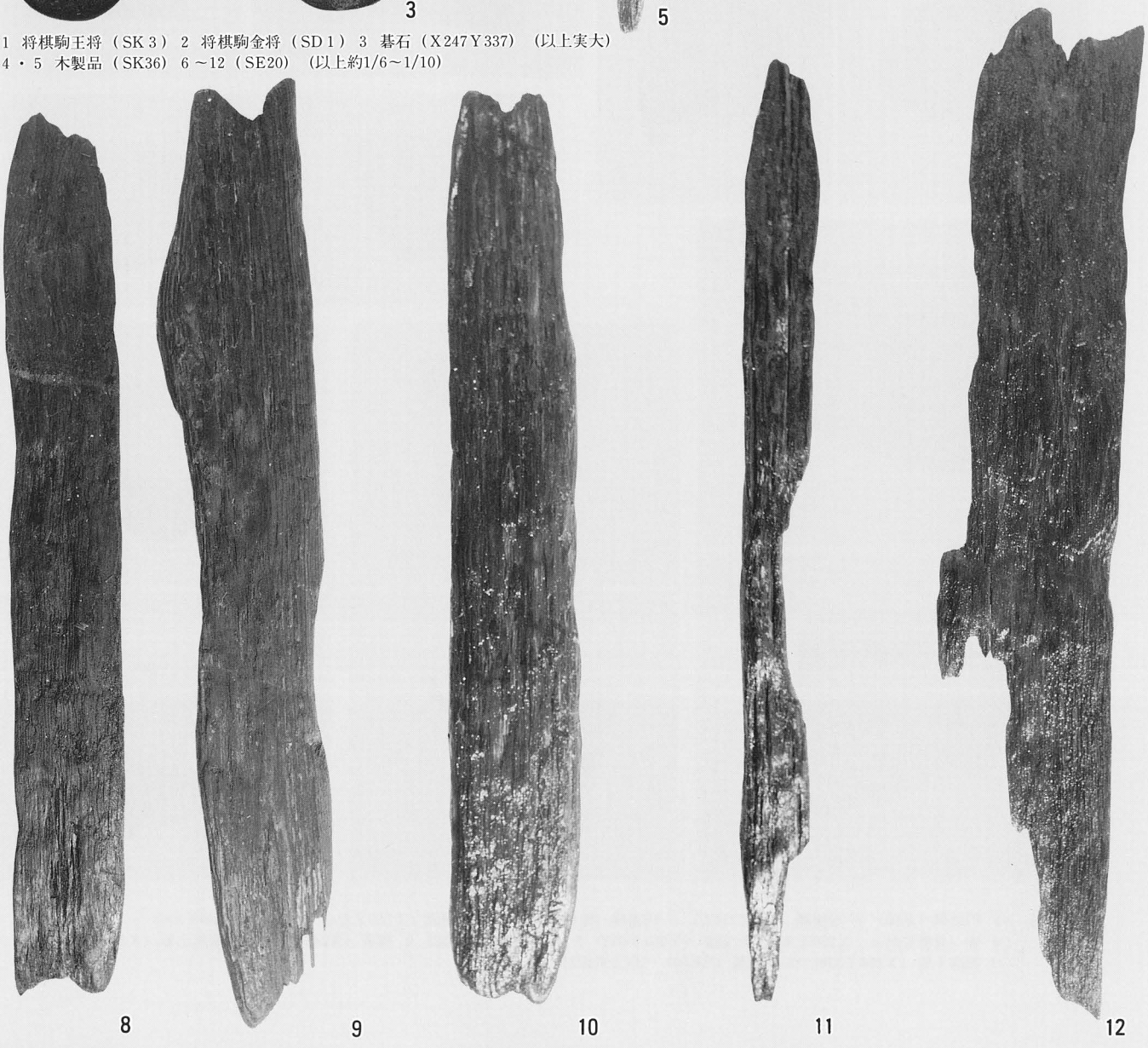


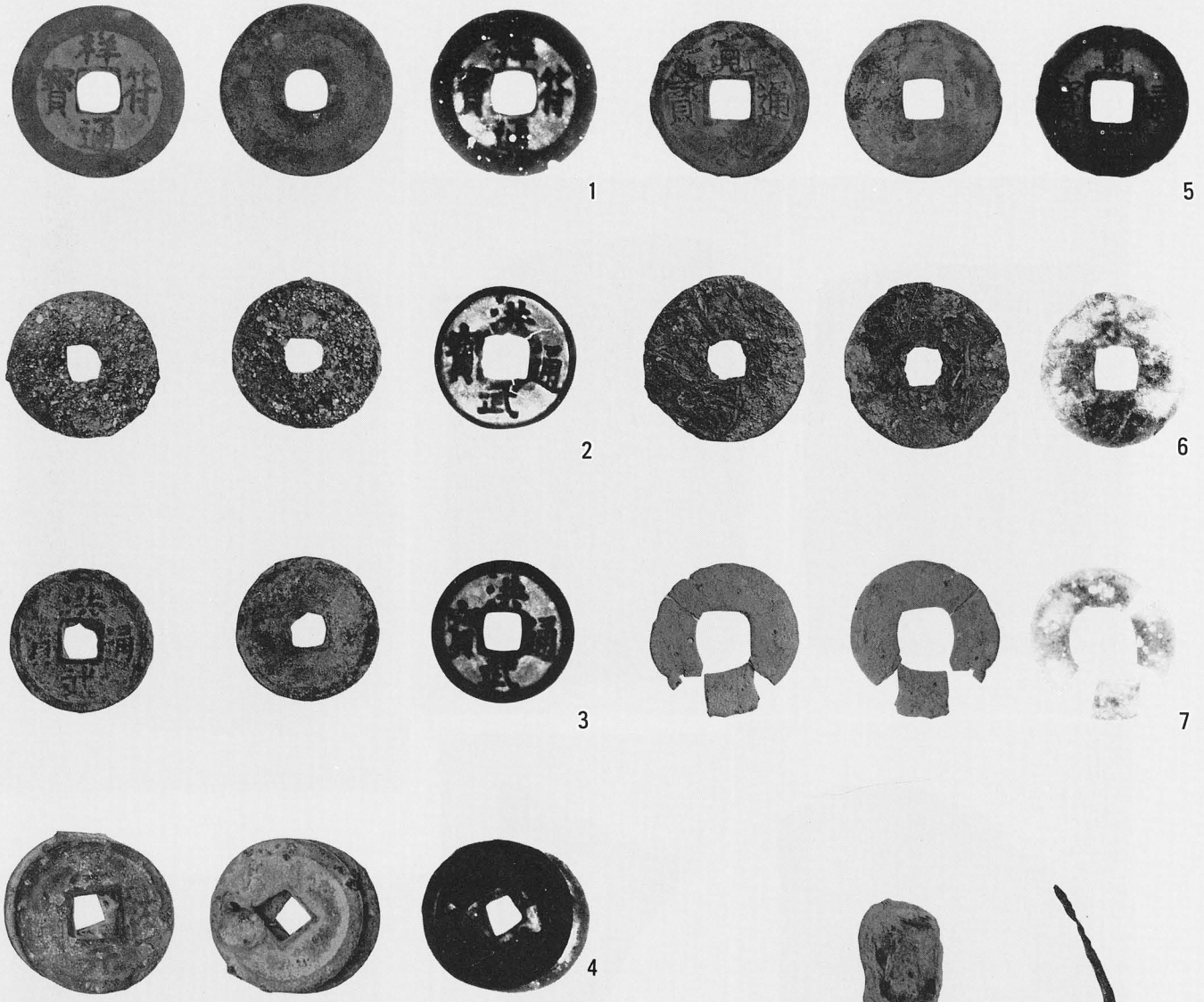


図版11　1 円面硯（表採） 2 円面硯（X257Y332） 3 円面硯（集中区No.12） 4 円面硯（X260Y334） 5 水瓶（X250Y334）
6 壺（分析資料4：X250Y334） 7 鉄鉢（X257Y332） 8 鉄鉢（X258Y333） 9 椀蓋（X246Y330） 10 製塩土器（X243Y230）
11 製塩土器（X256Y336） 12 坩堝蓋（SK56）（以上約2/3）

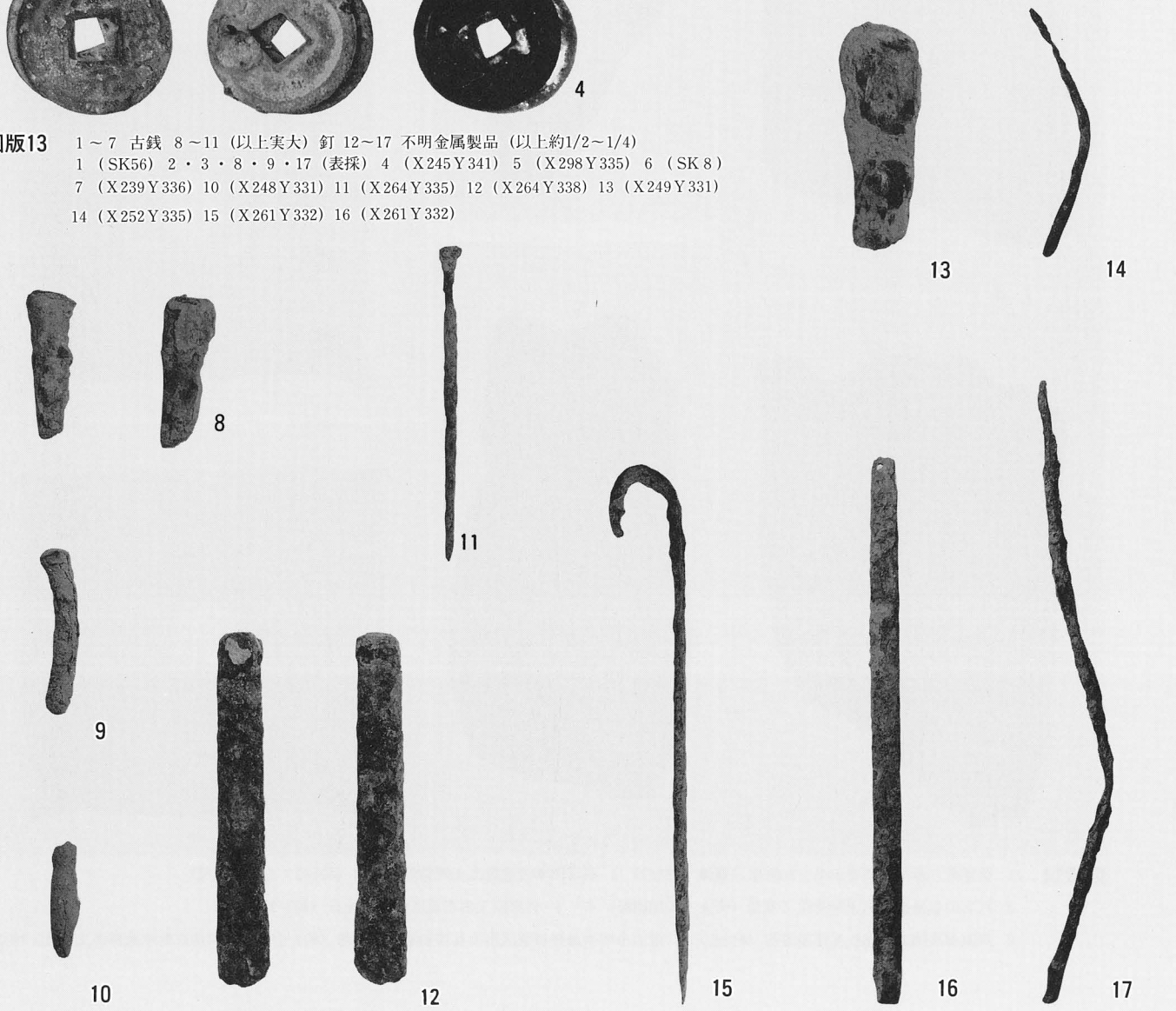


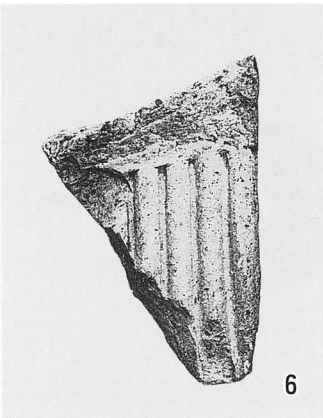
図版12　1 将棋駒王将（SK３）2 将棋駒金将（SD１）3 碁石（X247Y337）（以上実大）
4・5 木製品（SK36）6～12（SE20）（以上約1/6～1/10）

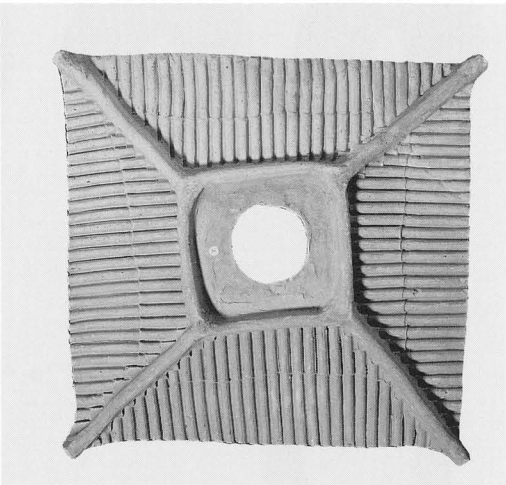


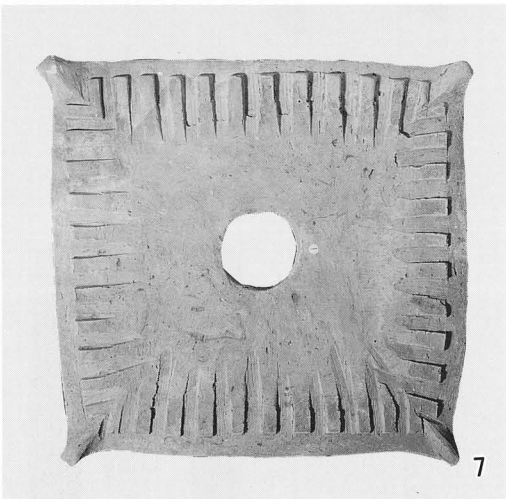


図版13　1～7　古銭　8～11（以上実大）釘　12～17　不明金属製品（以上約1/2～1/4）
1（SK56）2・3・8・9・17（表採）4（X245Y341）5（X298Y335）6（SK8）
7（X239Y336）10（X248Y331）11（X264Y335）12（X264Y338）13（X249Y331）
14（X252Y335）15（X261Y332）16（X261Y332）

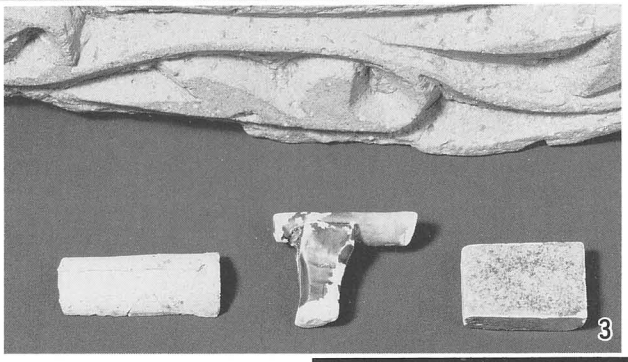


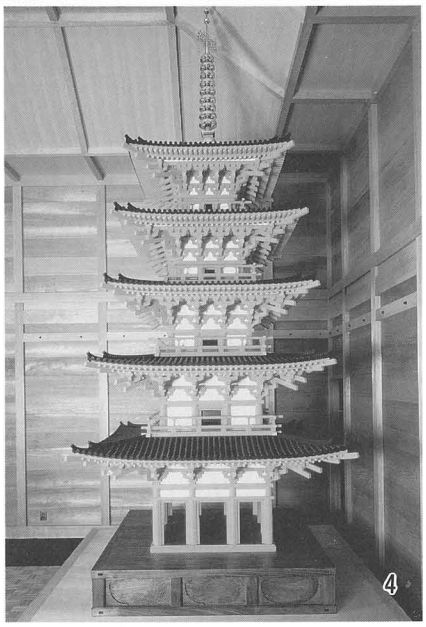


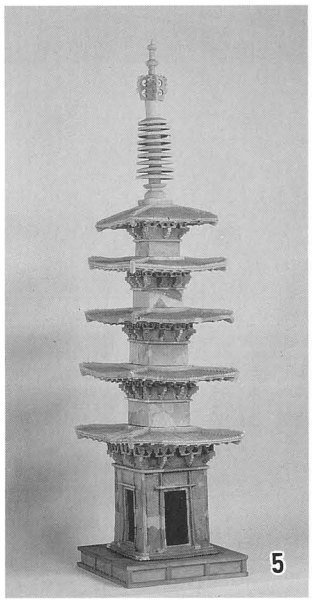


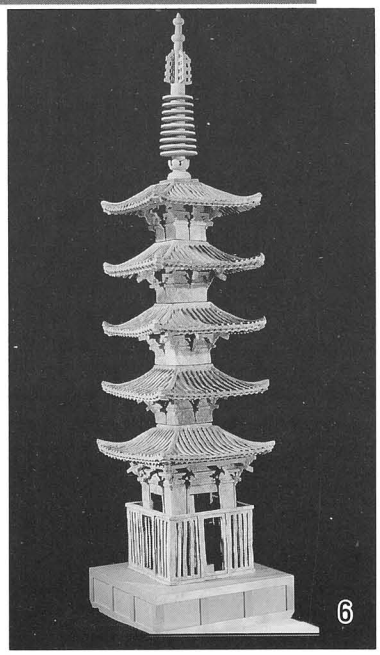


図版14　1　兵庫県三木市正法寺山出土阿弥陀三尊像（約1/2）　2　石名田木舟遺跡出土阿弥陀三尊像（約1/2：1と同縮尺）
3　石名田木舟遺跡出土阿弥陀三尊像（実大：X線撮影）　4・5　兵庫県三木市正法寺山出土仏（約1/2）
6　高岡市常国遺跡出土瓦塔屋蓋部（約2/3）　7　富山市明神遺跡Ⅲ地区出土瓦塔初層階屋蓋部（約1/6）　8　小矢部市松永遺跡出土塼仏（約2/3）

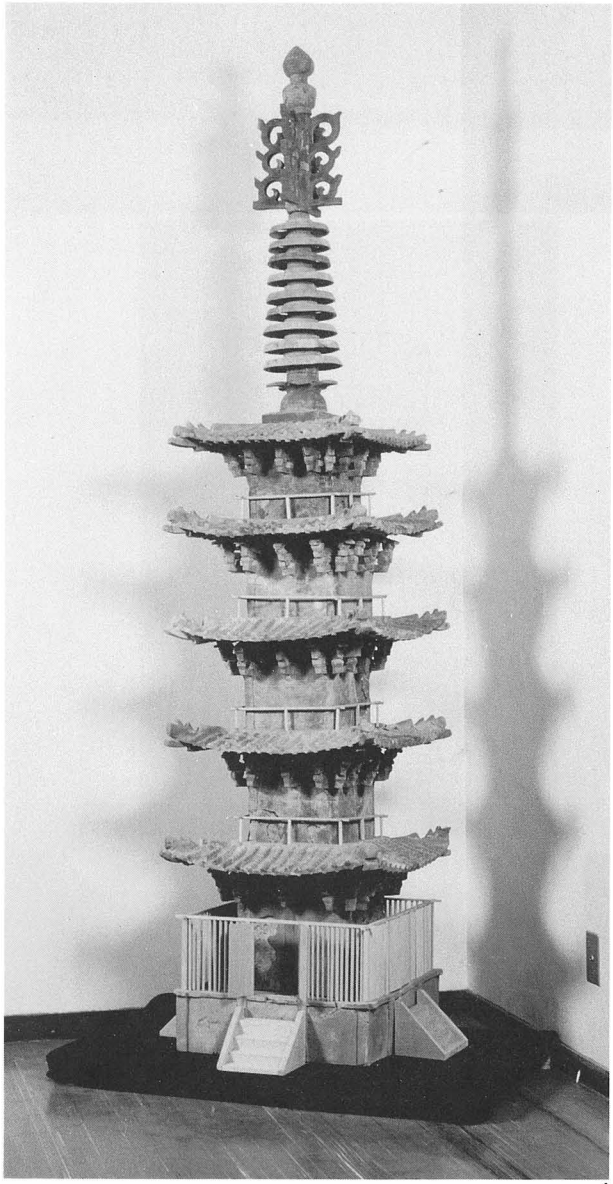




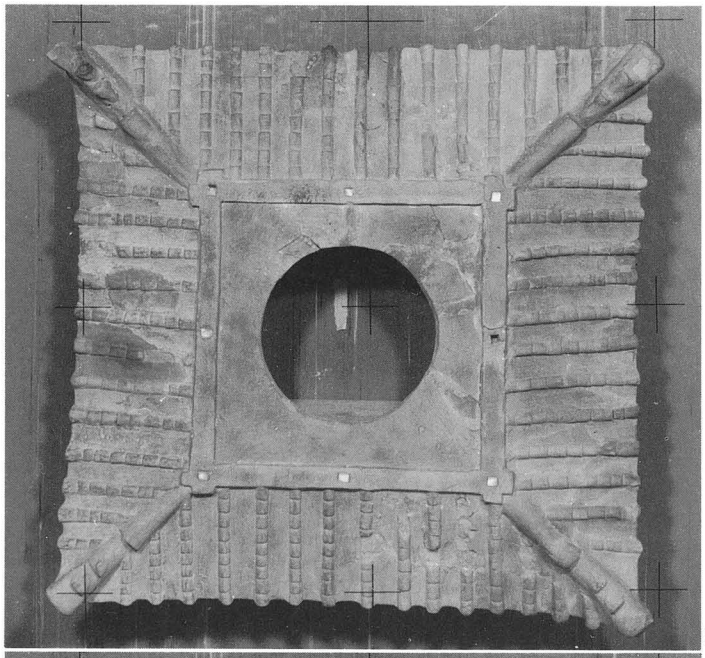




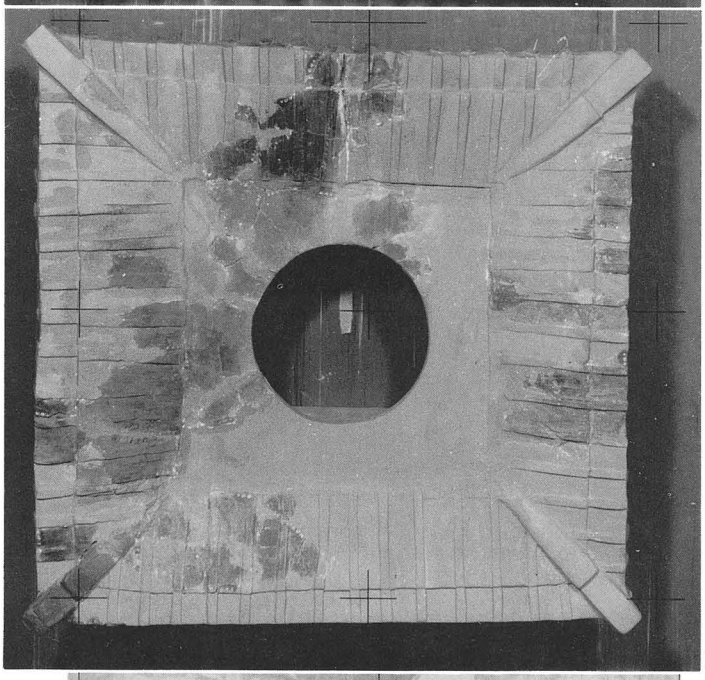
図版15　参考編集図版　1・2 法隆寺　3 下中央：薬師寺二彩高欄部材　下左：難波宮跡小形丸瓦　下右：平城宮跡小形 塼
4 海龍王寺五重小塔（模造）　5 東京都東村山出土瓦塔全体　6 静岡県三ヶ日町出土瓦塔全体
7 静岡県三ヶ日町出土瓦塔初層内箱形（内陣菩薩立像）



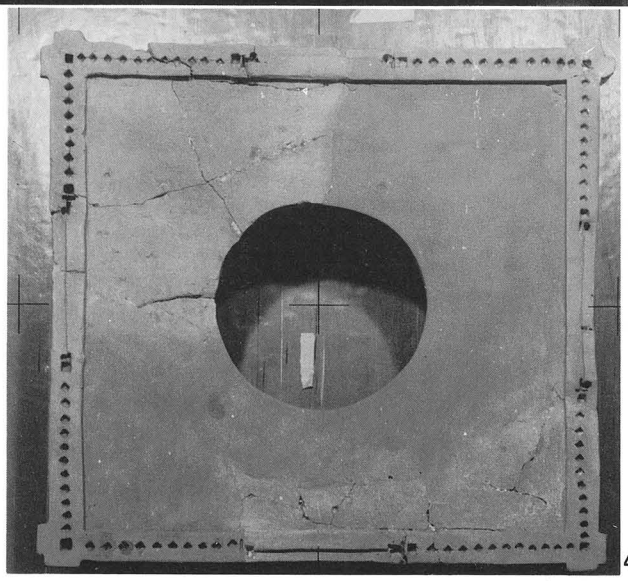
1



2



3



4

図版16　参考編集図版　長野県菖蒲沢窯跡出土瓦塔　1 全体 2・3 初層階 4 基壇

報告書抄録

書名	富山県福岡町石名田木舟遺跡発掘調査報告書 とやまけんふくおかまちいしなだきぶねいせきはっくつちょうさほうこくしょ		
編著者名	斎藤 隆・橋本 正春	編集機関	福岡町教育委員会・富山県埋蔵文化財センター
所在地	〒939-01 富山県西砺波郡福岡町大滝12 TEL 0766(64)－5333	発行年月日	1995年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
石名田木舟 いしなたきぶね	富山県西砺波郡 とやまけんにしとなみぐん 福岡町石名田木舟 ふくおかまちいしなだきぶね	164224	422080	36° 41′ 20″	137° 53′ 35″	1994年 6月4日～ 11月7日	2,056㎡	県道西中大滝線バイパス建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
石名田木舟	集落 城跡	弥生 古代 中世	竪穴住居跡 溝・土坑・井戸	須恵器将棋駒 土師器・越前・珠洲	飛鳥様式卍崩し高欄・阿弥陀三尊像を持つ瓦塔と宗教関連仏具の出土

SUMMARY

This book is the excavation survey report of the ISINADA-KIBUNE site.
This system of reserch investigation is the board of education Fukuoka town in the October from Decenber, 1995.

The site yield various features and artifacts from Nara and Heian periods.
This organizer of an excavation is the Toyama prefectual center for archaeological operation, Takashi Saito and Masaharu Hashimoto, in chifce of Reserearch Section in this center.
The archaeological data and remains for the excavation survey are in safe keeping on the center.
In this site, main artifical trace is that tresiderce, hale, dith, well in the period of the antiquity and a part of hale and ditch in the period of Middle age.
Main artificiale thing is Sue-pottery were, Haji-pottery were and salt produced pottery in the period of the Antiquity. And Suzu pottery, Echizen pottery and wooden (*King pony* and *Strong pony* from Japanese-chess), metale (*coins*), stones (*go stone*), plant and so on in the period of Middle age.
I think so special comment in this site's archaeological thig to ceramic tower raw materials Sue-pottrey and thar's in connection with Buddhism thing.
The ceramic tower have high balustrade Asuka-style and inside, 1st flower, install the Amida-traid.
This archaeological this have possible in oldest and greatest.
The Buddhism thing is three-color glazed pottery, censer, pottery ewer, jar, pottery ink slab, coverd bowl, iron bowl and so on.

富山県福岡町
石名田木舟遺跡発掘調査報告書

発行日　平成7年3月
編　集　富山県埋蔵文化財センター
　　福岡町教育委員会
印　刷　日興印刷株式会社